
混沌の魔法師

鈴樹 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌の魔法師

【Nコード】

N3824W

【作者名】

鈴樹 凜

【あらすじ】

聖アストラル学院。

そこは霊獣使いが魔法を学ぶ名門校。

そこに二匹の幻獣を連れた謎の幻獣使いが入学を果たした。

謎の幻獣使いは、この学院で仲間を得て人間として成長していく。

そこにあるのは希望か絶望かそれは誰にも分からない……。

主人公最強の学院ファンタジー！

ブローグ（前書き）

突然のタイトル改変やブローグ投稿を深くお詫び申し上げます。
これからも目を通して頂ければ幸いです。

プロローグ

鬱蒼と生い茂る森の中を一人の少年が歩いていた。

辺りは不気味な程に静まり返っており、月明かりだけが前方を見据えるための光源だった。

肩口でバツサリと切られた銀の髪が月明かりを反射して幻想的な雰囲気を醸し出している。

だが、少年の衣服はその雰囲気とはあまりにも掛け離れていた。身に纏う真っ白な衣服には真っ赤な液体が付着しており、なにより少年の空色の瞳の奥には底の知らない虚無が広がっている。

その瞳はまるで、世界に絶望しているかのようなだった。

そんな少年に、不意に複数の殺気が飛んできた。

少年が足を止めて殺気のある方向に視線を向けると、群れを成した20匹の魔獣がいた。

体長は2メートル程で顔の周囲が深い毛で覆われ、二本足で立っており、その手には人肉など簡単に切り裂ける鋭利な爪が、その口にはあらゆるものを食い千切る牙が生えている。

直立二足歩行する巨大なライオンといった感じた。

その魔獣が少年に向かって血に飢えた眼を投げ掛けている。

少年と魔獣は暫く静かに対峙していたが、我慢出来ないとはかりに先に魔獣が動いた。

魔獣は連携などまったく考えていない動きでバラバラに少年に襲い掛かる。

少年はその場から全く動かない。

只冷然とその場に立ち尽くし、虚無の瞳で魔獣の全てを観察していた。

魔獣の内の一匹が一番乗りとはかりに吠え、少年をその鋭利な爪で引き裂こうとする。

そして次の瞬間、何をされたのかも自覚できぬまま全ての魔獣は

絶命した。

いつの間にか少年の姿はそこにはなく一番後方にいた魔獣の後ろに立っていた。

20匹の魔獣の首は重力に従って地に落ち、制御を失った身体はそのまま崩れ落ちる。

少年は返り血一つ浴びてはいない。

シルバーの髪が、流れる微風に揺れているだけだ。

少年の様子に生を奪った事に対する良心の呵責はまるで感じられない。

その瞳には既に魔獣の姿など映ってはいなかった。

少年は行先も分らない道に行く。

無自覚な孤独と絶望の中で。

この先、虚無の瞳が何を見て何を映すのか……。

それは希望なのか絶望なのか……。

少年の門出を祝福するかの如く、夜空に浮かぶ月と無数の星々が煌々と輝いていた。

プロローグ（後書き）

面白いと思って頂けた方は評価、感想を宜しくお願いします。

第1話〜世界〜（前書き）

初めて書くものなので、誤字・脱字等のご容赦下さい。

それでも、お目を通して頂ければ幸いです。

学校などもあつて、定期的に更新は出来ないかも知れませんが、なるべく頑張つて投稿していこうと思っています。

どうぞよろしく願います。

第1話〜世界〜

この世界は創造の三神と呼ばれる三人の神の魔法の力によって創造された。

一人は天空を創造し、一人は、地上を創造し、一人はこの世界に住まう生物を創造した。

ある種族は互いに争い合い、ある種族は互いに手を取り合い、ある種族は滅んでいった。

その中でも特に強大な勢力を誇っていたのが、人間族、エルフ族、霊獣族、そして魔族と呼ばれる種族である。

魔族は特に強大な力と勢力を誇り、他の種族を次々と取り込んでいった。

そして、ある時魔族は三神に対して反逆を開始した。

当初は神々の勝利を誰も疑っていなかったが、魔族の中に魔神と呼ばれる三神に匹敵する力を持った者がおり、世界の創造に大半の力を注ぎ込んでいた三神は魔族に敗れてしまった。

しかし、三神は魔族に敗れることを予期しており、残った力一部の種族に分け与えていた。

そして、このそれぞれの種族は力を合わせ魔族をタルタロスと呼ばれる異世界に封じた。

以後、人間、エルフ、霊獣の三種族はそれぞれの国を築いたのだという。

人間族はウィズダム、エルフ族はホーリー、霊獣族はライフという王国を。

聖アストラル学院

この学院は、人間族の王国ウィズダムの中でも有数の名門校である。

入学する者は人間族だけには限らず、他にもエルフ族、妖精族といった様々な種族が入ってくる。

入学することが許されるのは、それぞれの種族の中でもトップクラスの实力者に限られる。

さらに入学して終わりではなく、EとSのクラスに成績ごとに分けられるのだ。

その聖アストラル学院の体育館で今、長々と意味があるのかないのかという、学院長の話を聞いていたのだが

《ゼロよ、この退屈な無駄話はまだ終わらないのか！》

《そうだよ！退屈すぎてもう間違っただけだよ！》

《ガイア、ウリア、そんなこと言っちゃ駄目だよ。学院長も一生懸命話しているんだから》

《しかしゼロよ、もう既に20分は話してるんじゃないか》

《そうだよ！もう後5分も待たされるぐらいなら本当に暴れちゃうよ！》

ゼロの左右の肩に乗っているガイアとウリアとの念話に付き合われていた。

ガイアは体長30センチ程で、蛇のような細長い胴に合った翼が生えており、その体は純白の白で瞳の色は輝くような金色。

ウリアは体長20センチ程で、その艶やかな深紅の体毛に深緑色の瞳は人の目を引き付けてやまない。

ガイアは光竜、ウリアは鳳凰という幻獣族である。

ゼロ・イシュタルはガイアとウリアとは血の盟約を交わした対等なパートナー同士。

古来より人間族と霊獣族は友好関係にあり、今では人間族と霊獣族で古の盟約を交わし、お互いに対等なパートナーとして生きていく者が多く、その者は霊獣使いと呼ばれる。

しかし、幻獣族と古の盟約を交わしているものはそうはいない。何故なら、古の盟約を交わす際には相手の魔力と自分の魔力を交わらせる必要があり、霊獣族より遥かに強大な力を持った幻獣族の魔力に耐えられる者がいないせいだ。

最も、幻獣族が人間族を下に見ているという理由もあるが……。そのような性格の幻獣族だが、ゼロはこの二人と古の盟約を交わし、通じ合っている。

だが、その二人を宥めるのに今ゼロはとも必死だった。

・・・

この二人が本気で暴れだしたら、今のゼロではとても手に負えないからだ。

しかし、そんなゼロの胸中を察してかようやく学院長の話が終わってくれた。

と思つたら、今度は別の人物が壇上に上がってきた。

人間族だ。

青を基調としたブレザーの制服を颯爽と着こなしている。

165センチ程の背丈にウェーブのかかった黒髪を腰の辺りまで伸ばしており、描いたかのような眉、黒の瞳は穏やかな雰囲気を出している。

整った鼻に、健康的な唇の紅はとても魅惑的な色香を放っている。胸は年の割には大きく、形も服の上からでも分かる程に丸みを帯びている。

だが、腰は折れそうな程細く、足もすらりと長い。

100人に100人が振り返るであろう容姿の持ち主である。

そんなことを考えていると、誰かの視線を感じた。

その視線に目を向けると、壇上に上がっていた少女がこちらを見ていた。

目が合うとニコリと微笑んだ。

嫌な汗が背筋を流れた。

《ゼロ、また下等な人間が壇上に上がってきたぞ。一体いつになったら我々は解放されるのだ！》

ガイアが不機嫌そうに言った。

《まったくその通りだよ！でも、あの娘ちょっと良いかも》

《呆れてものも言えんな。我々が認める人間はゼロ唯一人ではないか！》

《……。けどあの娘中々良い女じゃん》

《ウリア、貴様という奴は！》

《はは……まあ二人とももうちょっとの辛抱だから頑張ろね》

そんなことを話しているうちに、ウリア曰く良い女の話が始まった。

「新生生の皆さん、聖アストラル学院にようこそ。私は、聖アストラル学院生徒会会長の2年生セリカ・シュタインと言います。新生生の皆さんご入学本当におめでとう」

屈託ない笑顔を浮かべたその顔はまるで女神のようだった。

現にその笑顔に魅了されている者が多いようで、そこかしこで感嘆とした溜息が聞こえる。

しかし、ゼロにはその笑顔の裏に何かが隠されているような気がした。

「さて、早速本題に入りましょう。ご存じの通り、この学院には霊

獣と心と力を通わせる霊獣使いの方々が数多く在籍しております。しかし、何事にも例外が存在するようで、皆さんの中に一人、幻獣族と…それも二匹の幻獣族と古の盟約を交わしている方がいらつしやいます。本日はその方のお言葉を伺いたいと思います。それではゼロ・イシユータルさん壇上へどうぞ」

そう言つて、こちらに誰もが見惚れるであろう笑顔を向けてきた。事ここに至つてようやくあの笑顔の真意が理解できた。

《ゼロよ、何やらご指名のようだぞ。ゼロの圧倒的な力を見せつけ、下等な人間共を震え上がらせるのだ！》

《そうそう！さつさと終わらせて昼飯にしよう。散々待たされてお腹と背中がくつつきそうだよ！》

《ガイア、そんなことが目的じゃないよ。ウリアももうちょっと待っててね。》

パートナー達とそんな念話を交わしながら、背後に無数の視線を感じつつ、ゼロは壇上へと上がっていった。

第1話〜世界〜（後書き）

感想をお待ちします。

第2話　出会い

ゼロは真つ赤な血に染まった四方50メートルからある部屋に一人佇んでいた。

ふと部屋を見渡して見れば、そこかしこに数えるのも面倒な数の死体が散らばっていた。

（たくさん殺したな。）

と、そんなことを思いながら視線を正面やや下方に戻すと白衣を血で真つ赤に染めているダリア・ガツシュという男の姿がある。

その男、ダリア・ガツシュの四肢は既になく、出血もしていない。

・・・

ゼロにしか扱えない特異魔法で出血を止めているからだ。

ただ、痛覚と恐怖という感情だけがその目に渦巻いている。

ゼロにはその意味が只只理解できなかったが……。

「や、やめてくれ！悪かった0号！私が悪かったから！私の四肢を還してくれ！お前の魔法なら容易なことだろ、な！」

ダリア・ガツシュは顔を恐怖に歪め、そんなことを懇願してくる。

「そんなことが聞き入れられると本当に思っているのですか。僕達兄弟にあれだけのことを繰り返しておきながら」

ゼロは淡々と無機質な機械のように言った。

まるで、死刑宣告をする無慈悲な裁判官の様に。

ダリア・ガツシュはさらに叫んでくる。

「だ、だから、許されるのならどんなことでもする。私は、お前達の親も同然だろう！頼む、助けてくれ！！！」

次の瞬間ゼロの手は一閃、ダリア・ガツシュの首を刎ねていた。
真っ赤に血で染まった床に重力に従って落ちるダリア・ガツシュ
の首。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その男は『人造魔兵器プロジェクト』の発案者その人であった。

そこでゼロは目を覚ました。

（いやなものを思い出したな）

寝起きの頭でそんなことを思いながら、視線を正面に向けると見
覚えのない天井が広がっていた。

（ああ、そういえば昨日から聖アストラル学院の学生寮に宿泊する
ことになったんです）

聖アストラル学院は全寮制で全ての生徒は学生寮で生活すること
を義務付けられている。

そして、実に12棟もの学生寮があるのだ。

何故なら、E・Sのクラスごとに一つ学生寮があり、しかもそれ
が男女別になっているのだから驚きだ。

（一体どれだけ敷地が広いのか）

驚きを通り越して呆れるばかりである。

そんなことを考えていると二匹の幻獣が話しかけてきた。

《おはよう、ゼロよ。何やらうなされておった様だが妙な夢でも見たのか》

《そうそう、寝汗もすっごいよ。本当にどうしたの？》

「うん、ちよっと昔のことが夢に出てきて…」

《ゼロよ、昔のこととはもしや…》

《あまり気にする必要はないよ。今のゼロは昔のゼロとは違う》

どうやら二人は、気を使ってくれているようだ。
だから、ゼロは言った。

「そうだね。ありがとう二人とも」

《ふ、ふん。我は礼を言われるようなことは何もしていない》

《あれ、ガイアってば照れてるの。かわいいところもあるんだね》

《うむ、ウリアよ。貴様よほど死にたいらしいな。良いだろう、表へ出る。格の違いを見せつけてやる》

するとウリアは楽しそうに言った。

《わ、ガイアが怒った。ゼロ助けて》

そう言いながらゼロの背後に回ってガイアの方に顔を覗かせる。

「はは、二人共暴れるなら10キロくらい離れてからにしてね」

ゼロは日常茶飯事な二人のじゃれ合いに相槌を打ちながらしながら、学校に行くための支度をし始めるのだった。

ゼロは聖アストラル学院への長い道のりを歩いていた。

聖アストラル学院は全寮制であり敷地内に点在しているが、決して目と鼻の先に学院があるわけではない。

その距離は、クラスがS〜Eへとランクダウンすることに遠くなっている。

ゼロのクラスは1年E組なので学院から一番遠いEクラス寮に住むことになる。

だが、ゼロは学院唯一の幻獣使いだからなのか、先程から非常に周囲の視線を集めている。

いや、正確にはゼロの両肩に乗って朝の一件はどこへやら……楽しそうにゼロに念話をしてはしゃいでいる二匹の幻獣へ……。

《見るゼロよ、愚民共が溢れかえっているぞ。奴らがゼロの真価を目の当たりにし、恐れ戦く日も遠い日ではない。ははははは！》

《そうそう、ゼロの真の力を見せつければここにいる全員がゼロに跪くことになるよ！》

「二人共、そんなことしないから落ち着いて。学校には勉強をしに行くんだよ」

《むう、ゼロはいつもそれだな。何故自身の力を示さんのだ》

《そうだよ、そうすればゼロが下等な種族に見下されることなくて無くなるんだから》

「でも、わざわざ力を示して無駄に注目されるのも面倒だろう」

もう、無駄に注目されている気もしたが、そこはスルーすることにした。

そんなことを思いながら歩いていると、こちらに歩いて来る人物

が、いることに気が付いた。

セリカ・シュタインはゼロ・イシュタールを待っていた。

季節は3月ピークを過ぎたとはいえ、道に沿うように立っている並木には桜が花開いている。

そんな樹木の内の一つに背を預けて立っていると、ようやく目的の人物が近づいて来るのが見えた。

腰まで届く銀の髪をヘアゴムで一つに纏めている。

驚くほど中性的な顔立ちをしており、細く落ち着いた眉に空色の瞳と合わせて小動物の様な雰囲気を出している。

全体的にほっそりしており、女子の制服を着てもまったく違和感なく着こなせるだろう。

（ようやく来たわね）と、

意味のないことを思いながらゼロへと近づいて行った。

「おはようございます、ゼロ君。随分と遅い登校なのね、お姉さん待ちくたびれちゃったわ」

聖アストラル学院生徒会長のセリカ・シュタインが話しかけてきた。

言葉からして、随分と待たせてしまったようだ。

ゼロ自身に非はないが、何とも申し訳ない気持ちになった。それにしても、いきなり『ゼロ君』とは、随分とフレンドリー（馴れ馴れしいともいう）な人だ。

「おはようございます、シユタイン会長。何故僕をお待ちに？」

生徒会長がゼロのようなEクラスの落ちこぼれに何の用なのか？両肩の二匹の幻獣が大人しくしてくれているうちに話を終わらせなければ……とゼロは思った。

「ええ、昨日の入学式では悪いことをしたと思って」

満面の笑みを浮かべて言ってきた。

（絶対そんなこと思ってないですね）

昨日の一件でセリカの本性を垣間見たゼロはそう思った。入学式で、壇上に立ったゼロに待っていたのは新入生からの質問の嵐だった。

例えば、どこで幻獣と出会ったのか？どうやって幻獣に認められたのか？

何故、二匹の幻獣と血の盟約を交わして平気でいられるのか？等々……

山のような質問攻めにあった。

もっとも、幻獣族絡みの質問は一切答えなかったが……

「いえ、お気になさることはありません。それでは、もうじき予鈴もなる時刻ですので失礼します」

「そう、なら良いの。でも気を付けてね。あなた今、学校中の注目

的よ。Eクラスの幻獣使ってね」
「そのようですね」

そう。先程から、こちらを見る視線の量が異常に多い。
一つは、セリカ・シュタインが生徒会長だからだろう。
支持率は伊達じゃないということだ。

二つ目も、ゼロの両肩にいる幻獣への視線だろう。
幻獣族は人前に姿を現すことは殆どない。

幻獣族が国を興さずに隠れ住んでいるのも、他種族との繋がりを
断つ為だ。

それ程までに他種族を嫌い、見下している。
だから、ガイアとウリアに対する視線の意味も分かる。
しかし、なんだろう。

(さつきから、僕に対する視線も凄い。何故だろう？僕が幻獣を連
れているから？どうもそれだけじゃない気がする)

そんなことを考えていると予鈴がなった。

「あら、もうそんな時間？」

「そのようですね。それでは今度こそ失礼します」

・・・

ゼロはにこやかにそう告げて、その場を後にした。

数え切れないほどの視線に晒されつつパートナー二匹と念話をし
ながら、ゼロはようやく1年E組の教室に辿り着いた。

中を覗くと教室には既にたくさんの生徒と霊獣がおり、喧騒で溢れている。

（少し遅く過ぎるかな？明日からは、もう少し早く寮を出るようにしよう。）

そう思いながらスライド式の扉を開いた。

すると、先程の喧騒が嘘のように静まり返り教室中の視線を集めることになってしまった。

そのことに、心中で溜息をつきながら自分の席を探す。

そんな様子を感じ取ったのか、パートナー二匹が話しかけてきた。

《ゼロよ、気に病むことはない。皆ゼロに注目しておるのだ》

《そうそう、胸を張ってドヤ顔でも振り撒いとけば良いんだよ》

「ウリア、どこでそんな言葉覚えてきたの…」

内心では苦笑しながら、ウリアに突っ込みを入れておく。

そんな念話を交わしながら席に着くと、一人の男子と二人の女子が近づいてきた。

男子は175センチ程の背丈に短く切った灰色の髪、眉はきりつと細長く、青の瞳は少年のような純粋な色を帯びている。

特徴的なのは鋭く尖った耳だろうか。

エルフに比べると丸みを帯びているので、恐らく人間族とエルフ族との間に生まれるハーフエルフだろう。

身体付きは服の上からでも分かる程しっかりと鍛えられており、逞しい身体といえる。

女子は人間族とエルフ族のようだ。

人間族は肩まで伸びている色鮮やかな橙色の髪に、少し吊り上った眉、茶色の瞳は好奇心全開といった感じだ。

それなりに出た胸に引き締まった綺麗な太ももはとても魅力的だ。

エルフ族は綺麗な紫がかった銀の髪をツインテールにしており、そこからエルフ族特有の耳を覗かせる。

落ち着いた曲線を描いた眉に紫の瞳は三人の中で誰よりも落ち着いている。

もう一人の女生徒と比べると残念な胸をしているが身体の肉付きは少なくほっそりとしている。

そんな三人組が話しかけてきた。

「なあ、例の幻獣使いってお前のことか？」

「何言ってるのよりー、どう見てもそうでしょうが……」

「ミリーの言う通り。」

「念のため確かめただけだろうが！」

「確かめるも何も両肩にいる幻獣族見れば一目瞭然じゃない……」

「…その通り」

男子が言い返せば女子二人掛かりで言い返す。

男子の側に味方がいない以上、どちらが優位立つかは分かりきっている。

《ゼロ、何だこの姦しい連中は……》

《まるでコントを見てるみたいだ。おもしろい！》

ガイアが呆れ、ウリアは楽しんでいる。

「僕に何か御用ですか？」

「あ、そうそう忘れてたぜ」

（忘れてたんだ）

「やっぱりリーは馬鹿ね」

「……リーは馬鹿。」

「お前らも同じだろうが!!」

というリーという男子の主張は女子に見事にスルーされた。

（ウリアの言う通り本当にコントみたいだ）

「自己紹介がまだだったわね。あたしは人間族のミリアリア・スレインよ。ミリーって呼んで」

「……ワタシはエルフ族のリリー・ワンダー。リリーと呼んで」

「俺はハーフエルフのリーガン・ギンターだ。リーでいいぜ」

「僕はゼロ・イシュタール。よろしくね。リーさん、ミリーさん、リリーさん」

「おいおい俺らのことは呼び捨てで構わねえぜ、ゼロ」

「よろしくね、ゼロ君」

「……よろしく、ゼロ」

ゼロは幼い頃から第一に他人を疑うようにして生きてきた。

この世界は嘘と欲望で溢れているから。

だからというべきか、ゼロは他人の嘘をある程度見破る確かな眼を持っている。

しかし、この三人からは好奇心はあっても悪質な下心があるようには見受けられなかった。

・・・

だからゼロは作り笑顔を浮かべて言い直した。

「リー、ミリー、リリー、これからよろしくね」

その笑顔を見たガイアとウリアが思いつめた表情をしたことは誰も気づかなかった……。

第2話〜出会い〜（後書き）

何か設定や書き方についてのご不満などがありましたら遠慮なく申してください。

出来る限り善処いたします。

感想・レビューをお願いします。

第3話〜差別〜

「皆さんはじめまして。私は1年E組担任のルーナ・キャンベル。24歳の妖精族よ。これから一年よろしくね!」

というフレンドリーな一声から1年E組のホームルームは始まった。

135センチ程の身長に、桃色のショートヘア、元気そうにピヨンピヨン跳ねている眉、くりくりで黄色く大きな瞳のうえ子供体系+童顔である。

身長は妖精族の中でもかなり低い部類な上、あそこまでの童顔は常軌を逸している。

「はい、今私のことを見てチビと思った人は素直に手を挙げて下さい。今なら私のパートナーのルンルンちゃんに甘噛みされる程度で済みます」

と、そこで教室に入ってきたのは体長2メートルを超える程の大きなライオンの霊獣だった。

霊獣の中でもランク分けはされており、基本的にサイズが大きく、凶暴な霊獣程強大な力を持つとされる。

あの霊獣から感じる魔力からして恐らくAランク相当だろう。

ランクが高ければその分プライドも高く、自分が見下す者には決して従わない。

幻獣はその最たる存在だ。

そんな霊獣を従えているということは、ルーナ自身の能力もそれだけ高いということである。

(というか、あのサイズの霊獣に甘噛みでもされたら只ではすまな

いでしょう)

甘噛み宣言を聞いて顔を真っ青に変えたクラスメイトはルンルンちゃんという名前を聞いて緊張を解いていた。

怖いのか、怖くないのか分からない霊獣である。

心なしかルンルンちゃんも気を落としている様に見える。

「さて、これから早速授業に移りたいところですが、まずは皆さんの霊獣を霊獣館へと移動させたいと思います。パンフレットにも書いてあった通り一般の授業を受けるにあたって霊獣を教室に置いておく事は出来ません。霊獣のサイズによっては、移動教室の時等周囲の迷惑にもなります。よって寂しいでしょうが今から霊獣達を霊獣館へと移動させたいと思います」

ルーナは少し寂しげに言った。

自身もこれからルンルンちゃんと離れるのが辛いだろう。

周りも皆、同じなのだろう。

そうやって感慨に耽っていた時、ゼロの肩の上から抗議の念声が上がった。

《下等な妖精風情が我等に命令するというのは。貴様何様のつもりだ!》

《そうだね。そもそもゼロと離れること自体有り得ないし、例え離れたとしても下等な霊獣族と部屋を分かち合うなんてまるで罰ゲームだよ!》

ガイアとウリアの念話にクラス中皆驚きの表情を浮かべる。

何故なら、念話は古の盟約を交わし合った霊獣との間でしか行えないことだからである。

だから、二人が飛ばした念話が聞き取れたことが酷く衝撃的だった

たのだろう。

だが、衝撃から立ち直ると、クラスメイト全員とその霊獣が此方を睨んできた。

ガイアとウリアだけでなく、ゼロまでも。

ゼロは生きた心地がしなかった。

しかし、霊獣はともかく幻獣であるガイアとウリアはどうするのだろうか。

「キャンベル先生、幻獣はどこに預ければ良いのでしょうか？」

「確かにそうですね。霊獣達と幻獣と一緒にしておくことは確かにお互いの精神上良くないでしょう。今から学院長にお訊ねしてきます。皆さんは少しの間待っていてください」

そう言つと、傍にいたルンルンちゃんの背に跨り走り去ってしまった。

（先生が校内を霊獣に跨って走り回っても良いのだろうか……？）

そんなことを思っていると、こちらに向いている非難の視線がまだ続いていることに気付いた。

なので、ゼロは素直に頭を下げることにした。

「ガイアとウリアが失礼なことを言つて本当に申し訳ありません。ほら、二人も一緒に！」

ガイアとウリアも一緒に頭を下げさせるとゼロ達に対する非難の視線が減った。

全ての視線が無くなった訳ではないが、ひとまずは安心だろう。それから、5分ほどが過ぎた頃、学院長のところに行っていたキャンベル先生が戻ってきた。

「イシュタール君、幻獣達は学校にいる間君が面倒を見ることになった」

「でも良いんですか？僕達だけ特別扱いなんて…」

「君の幻獣、ガイア殿とウリア殿は君にしか従わないからね。仕方ないのよ」

ルーナは溜息顔で言う。

「はあ、学院側がそれで良いのなら……」

「でも、先程のような言動は注意するように言ってくれないかしら？」

「分かりました。二人共もうああいうことは控えてね」

ゼロがそう言うのと、二匹は渋々といった体で頷いた。

《うむ。ゼロがそう言うのであれば今後は自重しよう》

《でもねゼロ。ゼロが下等な人間に侮辱されるようなことがあったら、間違って消し炭にしちゃうかもね》

ゼロはその言葉に不吉な予感を拭えなかった。

その後、普通授業（文学、数学、歴史等の一般教養）が終わり昼休みに突入した。

「なあゼロ。学食行こうぜ」

「そうそう、一緒に食べよう。それとも誰かと先約ある？」
「…あるの？」

リーガン、ミリアリア、リリーが昼食に誘ってきた。
だが、ミリアリアとリリーはこちらの様子に気づいたようだ。

「いえ、ガイアとウリアの食事はどうしようかと思ひまして」

ゼロがそう言うとしてリーガンが整った眉を吊り上げながら言った。

「さっきから思ってたんだけどよ、その敬語止めにしねえ。全身がムズムズするんだよ」

「リーの言う通りよ！ゼロ君すごくかわい…… かつこいいのにモテないよ」

「……敬語やめたらモテモテ間違いなし」

リーガンは不機嫌そうに言い、ミリアリアは不穏な単語を口走り、リリーは無表情に告げた。

「うん、じゃあお言葉に甘えようかな」

「まだ堅い気がするが…ま、良いだろ」

「その方がずっとかつこいいよ」

「…素敵^{ソウテキ}」

（何故リリーは頬を染めたんだろう？）

「話は戻るけどよ、そのガイアとウリアの食事はどうする気なんだ？」

そこで、呼び捨てにされたことが気に食わなかったのかその二匹は口を開いた。

《人間、我を呼び捨てにするとはい程死にたいらしいな》
《そうだね、僕達を呼び捨てにして良いのはゼロだけだよ》

ガイアとウリアが底冷えのするような念声でそう告げた。

「うお、さつきもそうだったけどホントにプライド高いのな」
「二人共、そんなこと言っちゃだめだよ。リーは僕の友達なんだから。他の人にもね」

《むう、ゼロがそう言うのであれば、人間すまなかったな。許せ》
《ゼロは甘すぎるよ。まあ、それがゼロの魅力なんだろうけど》

二人ともひとまずは納得してくれたようだ。

「ねえゼロ君、ガイア君とウリア君の食事は結局どうするの？」
「お昼抜き？」

「ガイアとウリアの食事に関しては問題ないと思うよ。二人共何でも食べるしね」

《ゼロ、その発言は非常に心外だ！》
《そうだよ！それじゃまるで下等な雑食種みたいじゃないか！》
「はは……ごめんね。言い過ぎたよ……」

そんな会話を交わしながら廊下に出ると3人の人間族の男子が待ち構えていた。

真ん中の男は茶色のセミロングに、挑発的な眉、何処かこちらを見下したような鳶色の瞳で此方を見ている。

身長はとても小さく150センチ程で、高慢な雰囲気から温室で育てられたお坊ちゃんだという事が窺える。

左右の二人はその男の取り巻きのようだ。

二人共顔が瓜二つ、双子のようだ。

短く切った黒髪に強気そうな眉、一重の黒眼もこちらを見下した

様子だ。

なんとも小物臭い集団だった。

「お前が噂の幻獣使いか？」

「うわ、俺って幻獣初めて見た！」

三人共ゼロの両肩にいる二匹を見てそれぞれのリアクションをとった。

「ええ、そうです。僕に何か御用ですか？」

「誰もお前などに用はない。用あるのはお前の両肩にいる幻獣だ」

《……我等だと？》

《……一体何の用？》

三人組の傲慢な態度が頭に来ている様子だが、教室の一件もあって堪えてくれているようだ。

「これは…念話！盟約を交わした種族以外に念話を飛ばせるなんて！」

「これが幻獣…」

「すげえな！」

先程と同じく三者三様の驚きを示す。

「…お前らどこの誰だよ？」

しびれを切らしたのかリーガンが話を促した。

「ふん、本来ならお前らに名乗る名前などないのだが特別に教えてやろう。俺はA組のジオ・ライガー。あのライガー伯爵家の一人息

子だ！」

と、勝手に前置きをして勝手に名乗り始めた。
すると後ろの二人も便乗したのか……、

「俺達はA組のギルド・ルージンとガルド・ルージンだ！」

どうやら兄がギルド、弟がガルドというらしい。

「今日はお前がどんな卑劣な手を使ってその幻獣うを手懐けたのかを聞いてやりに来たのだ」

後ろの双子は黙って控えているらしい。

「卑劣な手？」

「そうだ！常識的に考えて幻獣がお前のようなE組の落ちこぼれと盟約を交わす訳がない。お前が何か汚い手でも使ったのだろう。そうに決まっている！」と、一気にまくし立ててきた。

そんな声に興味を惹かれたのか、なにやらどんどんギャラリーが増えていく。

「何故そう思うんですか？」

「だから言っただろう。お前がE組の落ちこぼれだからだ！」

ドンツツツツと、

ゼロを中心に魔力の爆発が起こった。

それに今まで黙っていた友人たちや三人組、ギャラリーが吹き飛ばされた。

《貴様今何と言った。ゼロが落ちこぼれたと！なににも知らない屑が何をほざく！！！》

《ゼロ、こいつら殺してもいいかな！？僕もう我慢出来そうにないよ！！！！》

「待つて二人共！こんなことでいちいち暴れてたら…」

が、そこでゼロが続けようとした言葉は凜とした声に遮られた。

「貴方達！そこで何をやっているの！」

視線を向けると、その声に違わず凜とした佇まいの綺麗な人間族の女の子がいた。

腰まで真っ直ぐ伸びた銀の髪は太陽の光を受けて煌々と輝いている。

器用にも片方だけ吊り上げた眉に綺麗な空色の瞳は怒りの色を宿してなお、その輝きは色褪せることはない。

あの生徒会長セリカ・シュタインにも引けを取らないレベルの美少女である。

「もう一度お訊ねします。今ここで一体何をやっているのですか？」

先程よりも落ち着いた様子で問いただしてきた。

しかし、ゼロはその整った顔を驚愕に歪めて呆然と呟いた。

「……シエリア……」

「貴方、聞いていますか？」

幸い聞かれはしなかったようだ。

「いえ、何でもありません」

「再三にわたってお訊ねします。今ここで何をしていたのですか？」

その質問に答えようとすると、突然横槍が入った。

「そいつです。そいつが幻獣に命じて暴力を振るっただんです！」

あのジオとかいう男だった。

「それは、本当のですか？」

どうやら安易に周囲の意見を信じるようなことはしないようだ。

「馬鹿言ってるじゃねえよ！そいつらがゼロを馬鹿にしたからガイアとウリアが怒ったんじゃないか！」

「なにを馬鹿なことを！我々がそんなことをする筈がないではないか。リーナさんこいつらの言うことはでたらめです！！」

どうやら二人は知り合いの様だ。

何故か一人称が俺達から我々に変わっているが…

「でたらめじゃねえよ！周りに倒れてる奴ら全員が証人だ！」

「ジオさん、それは本当ですか？」

リーナがジオを見やると、ジオは思いつきたじろいだ。

「ぐ……そ、それは……」

そこまで頭が回らなかった様だ。と、リーナがジオを追い詰めていた時、三人の人影が近づいてきた。

一人はセリカだ。その雰囲気はいつもの（2回しか見たことはないが）温厚なそれとは違い、鋭い怒気を放っている。

二人目は体格のがつしりとした人間族の男だ。短く切り込んだ黒髪に極太の眉、黒い瞳は見る者を震え上がらせる眼光を宿している。しっかりとした体格は服の上からでも容易に想像できる。

三人目は線の細そうなエルフの女だ。セミロングの金髪に気弱そうに垂れた眉、緑の瞳はおろおろと虚空を彷徨っている。

身長は平均よりも少し低い、それに反比例して胸は驚くを程出ている。

「貴方達、一体何があったの!？」

いきなりセリカが怒りを隠そうともせずに出てきた。

「シュタイン生徒会長、どうやらジオさんがこちらのゼロ・イシュタールさんを馬鹿にしたのが原因の様です」

「…成程、それにゼロ君の幻獣が激高したというわけね」

「……はい、ご賢察の通りです」

リーナはセリカの余りの察しの良さに驚きを隠せなかった。

だが同時に、さすがは聖アストラルの生徒会長だとも思った。

「この件は、放課後にゆっくりと聞かせて貰うでしょう」

「はい。私もそれがいいと思います……」

今まで口を閉ざしていたがつしりとした体格の男が言い、気弱そうなエルフは自身なさげに言った。

「そうね…、そうしましょう。貴方達の処罰については放課後に話し合うことにしましょう。」

事の当事者は放課後生徒会室に来て頂戴。リーナさん一応あなたもお願い出来るかしら？」

「分かりました」

セリカはリーナが嫌な顔一つせずに承諾したことに少し驚いていたが、すぐに二人を引き連れてその場を去った。

「お前、後で覚えてろよ！」

ジオも倒れていたギルドとガルドを叩き起こした後、そんな捨て台詞を残して去っていた。

すると、ミリアリアが不安げに訊いてきた。

「ゼロ君どうするの…」

「とりあえず、行くしかないだろうね」

という事で、放課後は生徒会室行きが決定したのだった。

第3話〜差別〜（後書き）

たくさんの方にご覧になっていたいただき誠にありがとうございます。
評価の方もよろしくお願いします。

第4話く話し合い

ゼロ達は放課後、生徒会室に向かっていた。

「何か緊張してきたな」

「そうよね…、あたしも緊張してきたかも」

「武者震い？」

《リリーちゃんその意味が違うよ…》

《人間をちゃん付けとは、堕ちたなウリア》

《たまには良いじゃん。それにリリーちゃん可愛いし》

《……もう呆れてものも言えん》

そこにリーガンが茶々を入れる。

「前から思ってたけどさ、お前らめちゃくちゃ仲良いよな」

《良くない！》

《良いよ》

まったく同時の発言だった。

「ガイアってば、そんなに息ピッタリじゃ全然説得力ないよ」

ゼロが苦笑しながらいうと、

《むう……》

不服そうだった。

そんな感じの話をしているとあつという間に生徒会室に到着した。
生徒会室の重厚そうなドアを2回軽くノックすると、

「どうぞ、遠慮せずに入って」

というセリカの声が聞こえたので入室すると先客がいた。
綺麗な銀の髪をの真っ直ぐ腰まで流しており、色白な顔の造形は
驚くほど整っている。

平均的な胸にしなやかな肢体はまるでモデルに様だ。
こちらの視線に気づいたのか、わざわざ席から立ち上がり一礼し
てくる。

その様子が過去の姿と重なって、ゼロは思わず見惚れてしまった。

《ゼロよ、どうかしたのか？》

《ホント、ボクってしてたけどあの娘がどうかしたの？》

その念話を聞いてリーガンが野次を飛ばしてきた。

「もしかしてゼロ君は惚れちゃったのかな？」

「えー！ゼロ君ってば、ああいう娘が好みなの？（すごい強敵だ
よ……）」

「ゼロはああいう髪型が好み？（ツインテールやめようかな……）」

便乗してか、ミリアリアとリリーまでからかっていた。

「あのー、私達のこと忘れてないかしら……」

「……そんなことはありませんよ、ははは……」

凶星を突かれてゼロは苦笑いした。

「……まあ良いわ。まだ当事者が全員揃ってないし。他の役員の紹
介もその時するわね」

疑いの眼差しを向けられてヒヤツとしたが、スルーしてくれたようだ。

言われるまで意識していなかったが、生徒会室にはセリカの他にも昼休みの時にいた二人がいた。

「お前がゼロ・イシュタルか。昼休みの時はごたごたしていた話す時間がなかったな」

「お、お噂はかねがね……」

（一体何の噂だ？）

「イシュタル、お前に二つ尋ねたいことが……」

男子生徒の言葉は、突然の来訪者によって最後まで続けられることはなかった。

「待たせたな！Aクラスのジオ・ライガーだ。早速ゼロ・イシュタルの処罰について話し合おうか！」

その背後では、ギルドとガルドの二人がオロオロとしている。

突然の事に頭がついて行かないのだろう。

ゼロ達は少し同情の念を覚えた。

「無礼でしょう！一体ここを何処だと思っているのですか！？」

「へっ……」

突然、今の今まで気弱そうにしていたエルフの彼女が怒鳴った。

「ここは聖アストラル学院生徒会室ですよ！ライガー伯爵家のご子息なら、遵守すべき規則は守りなさい！」

「クッッ……」

二の句が継がないようだ。

が、そこでその雰囲気を払拭するようにセリカが口頭を切った。

「ふう…、ようやく当事者全員が揃いましたね。それでは皆さんで自己紹介をしましょう。まず私からです。生徒会会長で2年S組のセリカ・シュタインです」

あの三人組が来た途端、口調と態度が改まった。

あれがセリカの被る生徒会長としての仮面なのだろう。

「自分は、風紀委員長で3年S組のダリア・ウォジュレットだ。よろしく頼む」

「わ、私は生徒会副会長で2年A組のアン・リンスレットです」

（先程の気迫嘘みたいだ…）と思いながらも話の流れを次ぎ、

「僕は1年E組のゼロ・イシュタールです。そして両肩にいるのが、光竜のガイアと鳳凰のウリアです」

《我がガイアだ》

《僕がウリアだよ》

「俺は1年E組リーガン・ギンターです」

「あたしは1年E組のミリアリア・スレインです」

「…私は1年E組のリリー・ワンダー」

「仕方ないな。もう一度名乗ってやるか！」

そう前置きするとアンにじろりと睨まれていた。
の鋭い眼光にたじろぎながら言った。

「俺は1年A組のジオ・ライガーだ」

「俺は1年B組のギルド・ルージンだ」
「俺は1年B組のガルド・ルージンだ」

そして、残った最後の一人に視線が集まった。
彼女は何の気負いも無く言った。

「私は1年S組のリーナ・ランカスターと申します。今度ともよろしく願います」

という流れで自己紹介は何事もなく終わったのだった。

「それでは、昼休みの騒ぎに対する生徒会の意向をお知らせします」
「ちよつと待てよ！その生意気な幻獣使いの処罰はこの時間に話し合っんじゃないのかよ！？」

「本人達の前で話をするわけがないでしょう。確かに放課後とは言いましたが、私が話するのは風紀委員長と副会長だけです。それに、あなたも処罰の対象ですよ？」

「な…、僕は被害者だぞ！何で僕が罰を受けなきゃならないんだ！？」

「今更ですか…、元はと言えばあなたが今回の騒動の元凶でしょう」

「ぐ…、糞が！！」

「生徒会室での下品な言動は私が許しません」

アンが無言を言わさぬ絶対零度の視線と声音で告げた。
それに怖気づいたのか、傍目にも可哀想に思えるほどジオはすっ

かり小さくなっていた。

「それでは繰り返しますが、生徒会の意向をお知らせします」

その言葉に処罰を待つ者は気を締め直した。

「我が生徒会はゼロ・イシュタールとジオ・ライガーに真剣勝負を
所望します」

その場が驚愕に包まれた。

《それは良い！ゼロの力を愚民共に知らしめる良い機会だ！》
《そうだよ！そうすれば誰かさんがゼロを侮辱することなくなる
しねえ……》

二人の言葉を見殺してゼロが尋ねた。

「どういふことですか？彼と僕では勝負にならないと思いますが…」
「そ、そうだ。こいつと僕では力の差がありすぎる。それは無謀と
いうものだ！」

「それはやってみないと分からないだろう？それとも、お前はイシ
ユタールが怖いのか？」

ダリアが不敵な笑みを浮かべて挑発した。

「な、そんなことはない！やるだけ無駄だと思ったからだ！」
「なら何も問題はないだろう。お前には何のデメリットもないんだ
から。逆に考えてみる。うまく事が運べばお前は謎の幻獣使いを倒
した初の男として学院で高く評価されるだろう。ライガー伯爵もさ
ぞかし鼻が高いだろうな」

「……成程。くくくはっはっはっ！良いだろう、この勝負受けてやる！」

先程までの口先が嘘の様に調子に乗り出した。
そしてゼロに挑発的な視線を投げ掛けた。

「お前はとうするんだ？まさか、逃げる気ではないだろうな！？」
「……」

ゼロは何も答えなかった。

「どうした、怖気づいたのか！所詮はE組の落ちこぼれということ……」

が、ジオの言葉は最後まで続かなかった。
否、最後まで続けられなかった。

《屑が……。調子に乗るなよ》
《本当だよ。自分の立場が全然分かってないなんて……。ある意味
幸せな屑だよ》

部屋の温度が二匹を中心に上がっていた。

「二人共落ち着いて」

ゼロが注意すると、二人は無意識に発動していた魔法を解除した。

「分かりました。その勝負受けます」
「良いのですか？」

今の今まで我関せずといった体を取っていたリーナが言った。
只ゼロだけは、その言葉の真意を悟っていた。

「はい、構いません。いずれ分かっていたことです」
「そうですか……、分かりました」

リーナは、何故か思慮深げに答えた。

「はっ！せいぜい無様な姿を晒さないようにするんだな！」

「そうですね。胸をお借りします」

「それでは、お二人の勝負は明日の放課後第3アリーナで行いましょう。これで、ひとまずこの件は終了とします」

話が終わったようなので席を立とうとすると、

「あ、ライガーさんとルージン御兄弟だけで結構です。他の方々は残して下さい」

「なっ！どうしてこいつらだけなんだ！」

「あなた方とはもう話し合う必要がないからです」

「こいつらには用があるってか！」

「はい。さっきからそう言っているではありませんか？」

「ちっ！」

盛大な舌打ちをし、最後にゼロを一瞥した後、ルージン兄弟を引き連れて生徒会室を後にした。

「それで、俺らに一体何の用ですか？」

リーガンがゼロ達を代表して言った。

「単刀直入に言います。この学院では、入試の結果の改竄が行われています。ランカスターさん以外の皆さんはその被害者なのです」

この場にいる者の殆どが驚愕に言葉を失った。

第4話〜話し合い〜（後書き）

評価・感想をよろしくお願いします。

第5話　追憶

誰よりも早く沈黙を破ったのはリーガンだった。

「ちょっ、それってどういうことですか!？」

リーガンは怒りを隠そうともせずと言った。

「私達も認めたくはありませんが、これは紛れもない事実です」
「一体どうして...？」

ミリアリアが顔面蒼白で呟いた。

「それは自分から説明しよう」

「学院側の事情ですか？」

「鋭いな、イシュタール。まさしくその通りだ」

「でも、どうして？」

「ワンダーさん、不思議に思うでしょうけど、どうしてこの話を貴方達にするか分かりますか？」

「あたし達に関係があることだからだって言うの？」

ミリアリアの言葉にアンが頷いた。

「その通りです。貴方達、入試の日のことを覚えていますか？」

すると、ゼロとリーナを除く三人は苦い顔を浮かべた。

その日リーガン・ギュンターは心配する両親に見送られて家を後にした。

今日は聖アストラル学院の入試の日である。

リーガンは無事合格出来るだろうかと心配しながら、学院に向かった。

学院の近くまで来ると様々な制服を着た入学生達が見えてきた。この場にいる学生全員がライバルかと思うと、気分が憂鬱になってくる。

それでも、足を止めるわけにはいかない。夢にまで見た聖アストラル学院なのだ。

（なんとしてでも合格しなきゃな！）

などと一人心中でガッツポーズをしつつ、校内に足を踏み出した。

（ここが俺の席か？）

受験票を何度も確認して間違いないということが分かったので、その席に座る。

只席を探すだけだというのに随分と気疲れしてしまった。

（まだ試験も始まってないってのに…）

心の中で溜息をつき、受験勉強しながら試験開始を待つ。

「ちょっと、そこあたしの席なんだけど」

なんだ……、と思いながら顔を上げる。

そこには一人の女子生徒が立っていた。

どこかの学校の制服を着ており、肩まで伸びた橙色の髪にそれなりに整った顔立ちをしている。

その彼女がこちらに向かって言ってきた。

「ねえ、聞こえてる？そこ、あたしの席なんだけど」

「お前こそ何言ってるんだよ。ここは俺の席だぞ。受験票を良く確認してみる」

そう言つと面倒くさそうな顔をして、受験票を確認した。

「あつ、ホントだ！」

「だから言つたじゃねえか。で、席何処だよ」

「えーと、55番だからそこね」

そう言つて彼女が指差したのはすぐ後ろの席だった。

「だから言つたじゃねえかよ。もしかしてお前めちやくちや緊張してんの？」

「う、うるさいわね！そうよ！緊張してたのよ！なんか文句ある！？」

「お前少しは声押さえるよ。周りが見てるぞ」

すると、周りの視線に気づき顔を真っ赤にした後腰を下ろした。そしてリーガンは後ろを向くと、今度はひそひそ声で会話する。

「お前、もう少し周りに気い遣った方が良いぞ」
「そのことについては気を付けるわよ」

未だ頬を染めたままで言った。

「お前、なんていうんだ」

「何、入試の時に口説いてくるの。やらし〜」

「違うっつーの！そんなことしたことないわ！」

「冗談よ冗談。あたしはミリアリア・スレイブよ。ミリーでいいわ」
「おう。俺はリーガン・ギウンターだ。リーでいいぜ」

自己紹介をし合い、話をしてみるとお互いに驚くほど馬が合うことが分かった。

「それにしてもあれだよな。こうして見てると皆俺より勉強できる風に見えてくるな」

「ホントよね〜。実際、出来るんだらうけど。でも、逆に考えると他の人も私達をそういう目で見てるってことよね」

「いや、さっきのこたごたで、絶対舐められてると思うぞ。俺達」

「それ、言えてるかも。馬鹿騒ぎするんじゃないわね」

そんな話をしながら笑い合っていると、リーガンの机に影が差した。

その影を見上げると一人の女子がこちらを見ていた。

紫がかった銀色のツインテールに、ミリアリアもそうだが10人中8人は振り返るであろう容姿をしている。

「そこ……、私の席」

「えっ！また！」

何故入試の今日に限って何度も席を間違えられるのか。
リーガンはいないはずの筈の神を呪った。

「受験票見直して見てよ。さっきこいつも席を間違えたんだよ」
「それ本当？」

「そうよ。こいつがいると何故か間違えるのよ」

「そりやどついう意味だ！」

「……本当だ」

「で、何処なんだ。まさか前の席なんて言わないよな？」

リーガンは空いている前の席を見て、嫌な予感を覚えた

「53番。本当だ。あなたの言った通り。もしかして、未来予知魔法？」

「いやいや、俺にそんな超高等魔法使えると思う？」

「……思わない」

そんな二人を無視してミリアリアが訊いた。

「あなた、名前は？」

「私はリリー・ワンダー」

「俺はリーガン・ギンターだ」

「あたしはミリアリア・スレイブよ、よろしくね」

「ま、よろしくと言ってもみんな高い競争率を争うライバルな訳だ
けどな」

「けど、みんなまとめて入学できると良いわね」

「無事入学出来たらよろしく」

その後は、始まるまでに少しでも勉強しようということになり、

三人で勉強をしていた。

受ける入試内容は一般科目の文学、数学、歴史である。

専門科目の魔法理論、魔法戦闘理論、魔法薬学の中から二科目選ぶことになっている。

筆記が終わると次は実技で、やることは主に三つ。

一つ目は保有魔力量の確認。

保有魔力量が多ければ、規模や質にもよるがそれだけ多くの魔法が扱えることになる。

これは専用の装置を使って調べることが出来る。

二つ目は魔法演算領域の確認。

魔法演算領域が大きければ、複数の魔法を並列演算で発動することが出来る。

テストはどれだけ同時により多くの魔法を発動できるかを調べるものである。

三つ目は魔法操作能力のテスト。

これは言葉そのままの意味で、魔法を正確にコントロールする技術のこと。

テストでは、一定以上離れた所から指定された的に攻撃魔法を当てることで判断する。

この総合評価に基づき、EとS組への組分けが決定する。

ある程度範囲の確認が終わった頃、教室に担当教師らしき人物が入室してきた。

異常な程背が低い、というのが第一印象だ。

桃色のショートヘアにくりつくりとした黄色の目が相まって、驚くほどの童顔だ。

背もとても低く一目で妖精族だと分かった。

「はい、皆さんお勉強はそこまでにして下さい。今から出席をとります」

という流れで出席を終え、緊張感に満ちた沈黙の中、入試は開始した。

「あゝ……、やっと終わった！」

それが全ての試験が終わってからのリーガンの最初の一声だった。

「ホントよね。筆記なんて全然分からなかったわ」

「実技は出来たの？」

「うん、実技はなんとか。普段からやってることだったからね」

「それは私も同じ」

前後からも解放された声が聞こえる。

「やっぱり名門は違うな。他のところも予備として受けてるけどよ、こっちのほうが断然難しいぜ」

「そりゃそうよ。簡単だったら苦労しないわ」

「……難しかった」

そんな会話をしながら校門を出て、人気の少ない裏通りを歩く。話をしながらだったせいか、前方不注意になっていたリーガンはそのまま誰かとぶつかってしまった。

そんなに勢いはなかったが、ぶつかった両者共に尻餅をついてしまった。

「いってえ。すみません前を見てませんでした！」

「貴様……、何処を見て歩いてる！」

反射的に謝ったりリーガンに対して相手は声を荒げる。

短く切った緑色の髪に吊り上った眉、髪と同じく緑色の眼は怒りで煮えたぎっている。

どうやら高貴な家の者だったようで、どこからともなく現れた三人の黒服の男達の肩を借りてる。

「お前ら、坊ちゃんに対してなんてことを！」

黒服の一人が声を荒げる。

それに便乗してか、他の男達も次々に罵声を飛ばしてきた。

だが、それを黙って聞いていられるほどリーガンも気は長くない。

「ああ！前を見てなかったのはそっちも同じじゃねえかよ！」

「黙れ、ぶつかってきた貴様が悪いんだろ！俺を誰だと思ってる！俺はガートン侯爵家のレイブン・ガートンだぞ！道を譲らないほうが悪い！」

「侯爵家が何よ！あんたは侯爵家に生まれただけで、侯爵本人じゃないでしょ！思い上がってんじゃないわよ！！」

「その通り。あなたは只侯爵家に生まれただけ。それ以上の価値なんてない」

「貴様ら……」

リーガンは今日初めて会ったにも関わらず、自分のために目の前の男を糾弾してくれる二人の行動が、何よりも嬉しく感じられた。

「貴様ら、言わせておけば！お前達、あの無礼な者共に身分の違いを分からせてやれ！！！」

「……はっ、かしこまりました。」

そう言つとすかさずこちらに殺気を放ってきた。

黒服の内の一人が手をかざすとその手を基点に、単純奇怪な文様

を描いた魔法式が描かれ、Cランク炎属性魔法『炎弾』が放たれた。リーガンも対魔法戦闘の訓練は受けているので、この程度の魔法はどうということはない。

リーガンはすぐに手をかざし土魔法属性のCランク防御魔法『土壁』を発動、『炎弾』を防いだ。

すると、他の黒服達も同じ『炎弾』を放ってきた。

畢竟、リーガンの『土壁』は簡単に砕け散り、威力を残した『炎弾』がリーガンに襲い掛かってきた。

だが、この攻撃もリーガンには届かない。

ミリアリアとリリーの張った水魔法属性と雷魔法属性のCランク防御魔法『水壁』と『雷壁』が『炎弾』を防いだからだ。

「ほう、学生の割に中々やるじゃないか」

「当ったり前でしょ！これでも聖アストラル学院入学目指してんのよ！」

「この程度の事は出来て当たり前。そこでただ吠えてる奴とは違う」

「お前ら！坊ちゃんに対する侮辱は許さん。やるぞ！」

「はっ！」

リーダーらしき男が叫ぶと、黒服達はCランク炎属性魔法をBランク炎属性魔法に切り替えた。

単純奇怪だった魔法式が複雑奇怪なものへと変わる。

そこから、先程の大きさの10倍はあるBランク魔法『大炎弾』

が放たれ、二人の張った『水壁』と『雷壁』を易々と突破してリーガン達を襲おうと迫る。

三人は思わず瞑り、目の前の恐怖から目を逸らすことしか出来なかった。

しかし、いくら待っても『大炎弾』は襲ってこない。

三人が恐る恐る目を開くと、そこには一人の男子生徒が微笑んでいた。

「大丈夫ですか？」

腰まで届く銀の髪をヘアゴムで一つに纏めている。とても中性的な可愛らしい顔立ちで、身に着けている学ランは全然似合っていない。

そんな彼（彼女？）が黒服達に振り返る。

見ると黒服達も彼の突然の登場に驚いているようで、動きが止まっているが、リーダーらしき男はすぐに立ち直ったようで、彼に鋭い視線を向ける。

「お前、一体何者だ？私達が同時に放った『大炎弾』を防ぐとは、ただの学生ではないな？」

「いえ、僕は只の学生ですよ。それ以上でもそれ以下でもありません」

「戯言を！只の学生にあんな芸当が出来る訳ないだろう！」

「あの程度の魔法は、防げて当たり前だと思いますが」

「……思い上がるな！お前達やるぞ！！」

彼が只者でないことを見抜き、自分一人では勝てないと踏んだのだろう。

自分の弱さを隠そうとせず、仲間に救援を求めることは中々出来ない。

その上、先程のやり取りで魔法では勝てないと判断し、肉弾戦に持ち込んできた。

（良いリーダーだな……）と、彼は素直に賞賛を送った。

リーダーらしき男は下段の構えをとり、彼に向かって拳を放つ。彼は一步も動かなかった。

否、動く必要がなかった。彼はタイミングを合わせて左手を振り上げた。

只それだけだった。

パン！

左手はリーダーらしき男の顎を打ち抜き、5メートル以上吹っ飛ばした。

男は道路に激しく身体を打ち、そのまま仰向けに気絶した。

「「ゲイロンさん！！」

その光景を見た黒服達は逆上して彼に襲い掛かった。

一人目は回し蹴りを放ったが、彼は逆にその足を掴み横に軽く放ると、そのまま壁にぶつかり動かなくなった。

二人目は仲間が投げ飛ばされるのを見て正拳突きを放つもその手は空を切る。

いつの間にか後ろに回り込んだ彼は、黒服の首筋に手刀をいれると、黒服はそのまま前に倒れて気絶した。

リーガン達は目の前の光景が信じられなかった。

瞬殺だった。

黒服達が倒れるまでに10秒も経っていない。

自分達が束になっても敵わない相手だというのに。

ふと、侯爵家の御曹司に目を向けるとその顔は恐怖に引きつっていた。

彼が御曹司に見やると一層顔を強張らせた。

「き、貴様達の顔は忘れないぞ！この雪辱は必ず果たす！必ずだ！
！覚えていろ！！！」

そう言つと自分を守ろうとした黒服達には目も暮れずに走り去つていった。

御曹司の背中を見届けていると彼が声をかけてきた。

「酷いですね。自分を守ろうとしてくれた人達を見捨てて行くなんて……」

「あ、ああそうだな。男の風上にも置けないぜ……」

「この人達、僕が警察の方に届けておきますね」

そう言つと彼はAランク風属性魔法『浮遊』を発動し、自分と男達を宙に浮かせた。

リーガン達は改めて只者ではないと思つた。

そのまま彼が行こうとしていたのでリーガンは咄嗟に呼び止めた。

「な、なあ、お前の名前はなんていうんだ？」

「僕ですか？僕はゼロ・イシユタール。聖アストラル学院の受験生です」

そう名乗るとゼロは黒服達を引き連れて空へと飛び去って行つた。リーガン達三人はゼロの名前を決して忘れまいと、脳の奥深くに刻み込んだ。

ゼロが去つた空には雲一つ無く、三人の身体と心に向かって燦々と光を浴びせ続けていた。

第5話〜追憶〜（後書き）

評価・レビューをよろしくお願いします。

第6話　相応しい場所

「今の俺達があるのはゼロ、お前のおかげなんだ。ありがとう」…
ぺこり。

「ホント、あの時のゼロ君、かつこよかったわ（あの時から…）」
「瞬殺だった（ポツ）」

リーガンは律儀に頭を下げ、ミリアリアとリリーはゼロの勇姿を思い出したのか頬を染めた。

《ゼロ、そんなことがあったとは流石は我が唯一認めた人間だ》
《そんな面倒なことがあったんなら僕等を召喚すればよかったのに》
「ごめんね。言われるまですっかり忘れてたんだ。リーガン顔を上げて。大したことなかったんだから」
「ゼロ、ありがとう！」

そう言つて、二人は握手を交わす。
新たに二人の友情が育まれた瞬間だった。
その光景を見てリーナが口を開いた。

「本当に立派ですわね。見返りを求めない無償の人助け。イシユタールさん、感服いたしました」
「そんな大したことではありません。ランカスターさんだって、同じ状況に立ったら同じことをしたでしょう」
「フフ…、そういうことにおきます」

そういつて誰もが見惚れるほどの輝く笑顔を見せる。
そんな空気の中、セリカは感慨深げに呟いていた。

「そんなことがあったのですか…」

彼ら（リーナを除く）の試験結果改竄にガートン侯爵家が関わっているのは確定的だろう。

「和やかな雰囲気の中すみません。少し話は変わりますが、何故今回の入学式で入学生代表による答辞発表がなかったと思いますか？」

「そういえば…」

「なかったわね…」

「どうして…？」

ゼロとそのパートナー、リーナは口を閉ざしたままだ。

「それは、ゼロ君が筆記、・実技共に受験者9546人中トップだったからです。他でもそうですけど、答辞を発表する人はトップの成績を収めた主席だけです。けど、その主席であるゼロ君はE組生学院としては、次席であるランカスターさんに任せるという案もあったのですけれど、結局答辞の発表は諦めることになったのです」

「てことは、本当はゼロはS組の超優等生ってことですか！」

「道理で強いはずよね……」

「でも、それだけの実力があるならいずれは学院の不正が発覚するはず…」

「はい、その通りです。そこで生徒会が提案したのが今年からの新しい行事です」

「……新しい行事!?」「……」

ゼロ、リーナ、リーガン、ミリアリア、リリーは揃えて驚きの声を上げた。

非常識にも程があるからである。どこの学校でもそうだが、学校行事というのはいわばその学校の伝統である。

そこへ新たに行事が追加されるなど一体どのような行事なのか。

「そんなに堅くならないで下さい。私達生徒会が提案したのは全学年を対象としたトーナメント方式の校内実力模擬戦です。もちろん学年別ですが…」

《ゼロよ！不正により偽られたゼロの力を今こそ見せつける時だ！》
《その通り！屍の上に立って高笑いしてるゼロの姿が目には浮かぶよ
うだよ！》

「ウリア…、君は僕のことをなんだと思ってるのかな？」

……

そのウリアの言葉にゼロは冷たい笑みを浮かべた。

《ぜ、ゼロ、落ち着いて。も、もう言わないからごめんなさい！》

《ははは、我が言っても全く意に介さないからな。たまにはゼロに、
お灸を据えて貰え！》

ゼロは貼り付けた笑みをうかべ、ウリアの翼を容赦なくひっぱって
いた

「あの～お楽しみのところ申し訳ないのだけど、話を進めても良い
かしら？」

気づけばゼロ達に向かって、生暖かい視線が送られていた。

空気を読んだゼロは、高速ともいえる速度でウリアの翼から手を
放し居住まいを正した。

「ゼロも羽目を外す時があるんだな」

「ホント、すつごく意外（でもちよつと可愛い）」

「でも挑発したウリアも悪い（また挑発してくれないかな）」

「見た目通り可愛いところもあるんですね」

自分達が直接言えないようなことを平然と笑顔でと口にしたりー
ナを、ミリアリアとリリーは軽い殺気を込めて睨む。

「こほんっ！」

今度はこの4人が居住まいを正す番だった。

「先程も言ったようにゼロ君はS組相当の実力者にも関わらずE組
に在籍しています。生徒会の調べたところ、他にも学院側の勝手な
都合で実力に見合わないクラスにいる生徒が何人もいました。これ
は、今まで機会に恵まれなかった生徒が実力を示す良い機会になる
んです。もちろん、貴方達も例外ではありません」
「……どういう意味ですか？」

リーガン達三人の声が見事にはもった。

だが、本人達にそのことを気にする余裕はなかった。

「先程も言いましたが、ランカスターさんを除いた貴方達の入試結
果は改竄されています。本来なら、ギョンターさんとスレイブさん
はB組、ワンダーさんはA組相当の実力者なのです。はつきり言っ
て、これほどの暴挙は学院の存続にも関わってきます。なので、今
大会では一つのルールを定めました」

「それは一体どのような条件のですか？」

「そうですね、面倒事の臭いがプンプンしますが……」

リーナとランカスターが問うた。

「め、面倒事とは失礼ねゼロ君」

セリカが遺憾そうに顔をしかめた。

「セリカ…話が前に進まないからお前は少し口を閉じてる。ここからは自分が説明する」

「あら、随分な物言いね。心外だわ」

「む、別にそういう意味で言っただけでは…」

セリカが拗ねてみせるとダリアは一瞬で動揺した。
何となく普段の二人の力関係が垣間見えた瞬間だった。

「セリカちゃんにダリア君、話が脱線してるよ」

そんな二人にアンがすかさずフォローを入れる。

案外いつものことなのかも知れない。

「んんっ、それでは自分から話そう。先程会長が言ったルールだが、それ相応の実力を示した者はクラスに関係なく実力に見合ったクラスに異動するというものだ。その逆は言わなくとも理解できるな。一言でいえば下剋上ルールだ。これにより生徒同士の競争心を仰ぐことが出来るし、実力者を相応しいクラスに異動させることも出来る。まさに一石二鳥という訳だ」

「ですが、上位のクラスの大部分の生徒はエリート意識の塊です。そんな彼らが納得するでしょうか？」

ゼロのこの疑問は至極当然のものだ。他も同様に頷いたりしてそれぞれの反応を示している。

「そこは私達も同様に悩んでいました。そんな時嬉しい吉報が届いたのです」

アンの言葉にゼロ達の視線が集まる。
アンは少々怯えた様子ながらも、ゼロに向けて顔を綻ばせて言った。

「イシユタルさんです。イシユタルさんとライガーさんの試合でイシユタルさんがライガーさんに勝てば、今後の良い切っ掛けになると生徒会では考えています」

その言葉にゼロ達は、皆一様に顔に納得の色を浮かべた。
そこで、セリカはアンの言葉を引き継ぐ。

「という訳で、生徒会としてはゼロ君には是非ともライガーさんに勝って欲しいんです。ゼロ君お願いできますか？」

「……分かりました。ご期待に沿えるよう精一杯頑張りたいと思います。ですが、一つ質問があります。」

「一体何かしら？」

「どのようなシナリオで勝てば良いのですか？」

ゼロとそのパートナー以外の全員の頭の上に？が浮かんだ。
そんな皆を代表して、ダリアが訊き返した。

「その質問はどういう意味だ？」

「ですから、どのようなシナリオで勝てば良いのですか？勝つと言ってもその勝ち方は様々です。例えば圧倒的な力で捻じ伏せるのか、互角の戦いを繰り広げた末に勝利するのかでは、かなり意味合いが違ってきます。結果によっては、生徒の反感を買いかねません。そうなれば、今回の勝負は意味がありません。だから、お訊ねしているのです。どのようなシナリオで勝てば良いのですか？、と」

「……………」

皆一様に言葉を失っていた。二匹の幻獣とリーナを残して。

《さすがはゼロだな！そんなことまで考えているとは！我には思いつかなかったぞ！》

《さすがは僕達のパートナーってところだね。並みじゃないや！》

幻獣二匹は大騒ぎである。

そんな幻獣の様子で皆我に返ったのか、ゼロに不思議そうな視線を向ける。

「確かにそんなところまでは考えていませんでした。しかしゼロ君、彼に圧勝することは本当に可能なのですか？ゼロ君がS組の実力者とはいえ、さすがにそれは厳し過ぎるのではないの？」

セリカ疑問は最もなことだった。

セリカ自身もS組の実力者である。

だが、結局のところA組生とS組生の明確な違いは魔力保有量である。

魔力保有量は先天的なもので、後天的に伸ばすことも可能ではあるが相当に困難なことだった。

極稀に魔力を殆ど持たずに生まれてくる子供達がいる。

以前、そんな子供達に他人の魔力を分け与えるといった実験が行われたことがあったが、子供達の身体が強い拒絶反応を起こした。

その結果、生き残れた子供はたった一人だけだったという。

魔力保有量は血筋も関係してくる。

故にこの国では大量の魔力を持つ者には貴族の地位が与えられ、何人もの妻を娶ることが出来る。

話は逸れたが、A組生とS組生の明確な違いは技量加え魔力保有量の違いである。

しかし、一年生の現時点でS組生とA組生に大きな実力差がある

とは思えない。

だからセリカは訊いた。

本当にジオに圧勝出来るのかと。

だが、ゼロの返答はある意味予想通りであり、ある意味予想外なものであった。

・・・

「あの程度の相手なら今の僕でも十分圧勝出来るでしょう。ガイアやウリアの力を借りるまでもありません」

「ほ、本当に大丈夫なんですね？」

「はい、会長。ですので、早くシナリオをお考え下さい。その通りに動きますので」

・・・

ゼロは精一杯の作り笑顔を浮かべて告げた。

すると、その笑顔にほだされたのか場の緊迫した空気が緩む。

セリカも真面目な顔をで答えた。

「分かりました。その件に関しては少し考えさせてください。明日のお昼休みに報告します」

「はい、分かりました」

会話の流れからして、もう用は済んだと判断したゼロ達はセリカ達に頭を下げて生徒会室を後にし、廊下に出る。

そこで、セリカが思い出したかのように背後から声をかけた。

「待って下さい。もう一つの用をすっかり失念していました。ゼロ君とランカスターさんは明日の勝負が終わった後、生徒会室に来て下さい。お話したいことがあります」

「僕とランカスターさんですか？」

ゼロはリーナに目を向けた。

リーナも首を傾げている。

（一体何の用だろう？）

「来ていただければ分かります、お願いしますね。後ゼロ君、明日のお昼休みは教室で待っていて下さい」

まくし立てるように言つとセリカはそのまま生徒会室に引込んだ。

一体何なんだ？と、ゼロ達は頭に？を浮かべるのだった。

第7話〈魔法授業〉（前書き）

今回は連続投稿です。

第5話〈追憶〉の戦闘シーンを少し改変しました。

日刊学園ランキングと週刊学園ランキングBEST3に入ることが
出来ました。

これもひとえに読者の皆様のおかげです。

本当にありがとうございます！

第7話　魔法授業

ゼロは今、E組寮のベランダにいた。

天を仰げば無数の星々が煌々と輝いている。

・・・

ゼロはシェリアのことを考えていた。

久しぶりに再会したシェリアは絶世の美少女に成長していた。

彼女はゼロと違って、記憶を失っているようだった。

無理もないと思う。

それだけ衝撃的な出来事だったのだから。

しかしそのおかげで、ガイアやウリアと出会うことが出来た。

ガイアやウリアも初めからあんな態度だったのではない。

むしろ昔は、他の種族に対する態度と何ら変わらなかった。

幻獣には遠く及ばぬ下等生物だと見下されていた。それが今では
対等なパートナーだ。

・・

ゼロは気づかぬ内に笑いを零していた。

・・

ガイアやウリアとの出会いがなかったら、ゼロは人間として何も
成長できていなかっただろう。

シェリアも自分を変えてくれる人に出会えたのだろうか？

否、出会えたからこそ記憶を失っていても、こうして再会できた
のだ。

ゼロはシェリアの育ての親に心の中で感謝した。

とそこへ、ガイアとウリアがやってきた。

《どうしたゼロ？ゼロが一人笑いなど珍しいではないか？》

《そうだよ。明日は雨でも降るんじゃないの》

「はは…酷いな。」

《あのリーナとかいう人間のことで悩んでいるのか？》

「えっ……」

《隠しきれてると思った。何年ゼロと一緒にいると思ってるの》

「二人には隠し事は出来ないね。うん、そのランカスターさんのこととでちょっと……ね」

そう言いながらゼロは心の中でガイアとウリアに感謝した。

何も言わなくても、二人がゼロの胸中を悟ってくれるからこそ、今のゼロがあるのだから。

《あのリーナとかいう小娘は何者なのだ？ゼロにここまでショックを与えるということは……まさか……》

「うん、あながちガイアの考えてる通りだと思うよ」

《そうか……》

《ゼロ……》

「そんな顔しないで、二人共。僕は大丈夫だから」

……

ゼロが笑ってみせると二匹は複雑な顔をした。

《ゼロ、そんな顔はするな。ゼロを悲しませることは我等の本意ではない》

《そうだよ。ゼロが悲しそудと僕等まで悲しくなっちゃうよ。無理はしないでね》

「ガイア、ウリア、ありがとう……。もう心配ないからね」

《そうだな。まったくゼロは世話の焼ける奴だ》

《全くだよ。やっぱりゼロには僕らがついてなくちゃね！》

そういつて、一人と二匹は静かに微笑んだ。

そんな様子を月と星々は冷たくも暖かく見守っていた。

ゼロは真っ白な世界に立っていた。

その両手には紅と白の二振りの鏢のない刀剣を握っている。

そして、ゼロの周りには数多の炎、風、光属性の球体が浮かんでいた。

ゼロが動くと同時に球体も動き出す。

その一つ一つにはたったの一発で半径10メートルものクレータを穿つ程の威力が込められている。

ゼロを中心に数多の球体が乱回転をしながら襲い掛かるが、それが当たることはない。

ゼロは見る者全てを魅了するような美しい剣舞を舞いながら球体を切り裂いていった。

前方の球体を切ると、その隙を突くかのように後方から球体が迫る。

しかし、ゼロは動じない。

滑らかな円を描く足運びの勢いをつけたまま横薙ぎに刀剣を振るい球体を切り裂く。

そうやって、球体が全て無くなるまで、ゼロの鍛錬は続いたのだった。

「ふう、良い運動になったね。今日は防御趣向だったけど、次は攻撃趣向で良いんじゃないかな」

「うむ、良い動きであった。だが、それでも数が少ないとは…、次はもっと球体の数を増やすことにしよう」

.....

「ホントだね」。そろそろリミッターを外して訓練した方が良くいん

じゃない？でないと、ゼロも僕等もいざという時に力をつまぐ出せないよ」

・

「そうなんだけどね……。本気でしちゃうとこの空間が壊れちゃうでしょ。かといって、外でする訳にもいかないし……」

そう言って、周囲に目を見やる。

周りは、まるで天変地異でも起きたかのような有様だった。

白の世界は大きく歪み、あちらこちらに次元の裂け目が見える。

ゼロが両断した魔法の余波によるものだ。

《確かにこの有様では……。》

《そうだね、例えばリミッターを解除しても空間の維持に力を割いてたら、結局何も変わらないからね……。》

今、ゼロ達がいるのはゼロが空間魔法で切り開いた次元の狭間につくった仮想空間である。

ゼロ達は毎朝こうして次元の狭間で鍛錬を積んでいる。

今回はゼロの鍛錬だったが、ガイアやウリアの鍛錬の時もある。

「もう大分時間も経ったし、そろそろ空間魔法を解除するよ」

ゼロの一言と共に白の空間は崩れ去った。

「それでは今から魔法理論の授業を始めます。皆さんにとっては既に常識的なことでしょうが、復習はとても大事です。突然当てるこ

ともありますので、答えられない方はもれなくルンルンちゃんに甘噛みしてもらいますから、そのつもりでいて下さいね」

ルーナが笑顔で告げるとクラス中に戦慄が奔った。

これで、誰もが授業に集中するだろうと判断したルーナは授業を開始した。

「魔法とは、皆さんの中にある魔法式の情報魔法演算領域へと送り込み、そこで魔力を吹き込み現実に投射する力の事です。そういった魔法を使える人々を私達は魔法師と呼びます。

魔法師にはそれぞれ得意とする7つの基本魔法属性があります。炎属性、水属性、雷属性、土属性、風属性、光属性、闇属性ですね。それと基本魔法属性の性質をもたない無属性魔法があります。無属性を除く7つの属性にはそれぞれ弱点となる属性が存在します。炎属性は水属性に、水属性は雷属性に、雷属性は土属性に、土属性は風属性に、風属性は炎属性に、そして光属性と闇属性はお互いが弱点の魔法属性といわれています。この魔法属性の弱点をつくとうなるでしょうか？ギウンター君答えて下さい」

いきなりの指名にリーガンは緊張しながら答えた。

「は、はい。一言に弱点と言ってもその性質は様々で、例えば炎属性と水属性の場合水属性は炎属性を打ち消します。でも逆に炎属性と風属性の場合は炎属性が風属性を打ち消すのではなく、風属性が炎属性の威力を強める結果になります。このように弱点をついても必ずしもその効果を打ち消すだけとは限らない。それが魔法属性の弱点です」

「はい、まさにギウンター君の言った通りです。ですが、一つ抜けているところがあります。皆さんはどこだか分かりますか？」

その言葉にゼロ以外のクラス中の生徒が首を捻る。

しかし、只一人無表情なゼロを見て、ルーナは笑みを浮かべる。

「イシユタール君は分かっているみたいですね。じゃあイシユタール君お願いします」

「はい。それは魔法のランクです。魔法ランクはEランクからSSランクまであり、E・Dランクが家庭内で使うランクです。CランクからSSSランクは戦闘で使うレベルの魔法です。特にSランクからはその威力が桁違いであり、S・SSランクの魔法は戦術級魔法と呼ばれ、SSSランクは戦略級魔法と呼ばれ、人を殺せるレベルの魔法となります。少し話は脱線しましたが、基本的に弱点の魔法属性であつても1ランク以上上回っていれば負けることはありません」

「はいそうです。イシユタール君の言う通り、弱点の魔法属性であつても1ランク以上上回っていれば威力負けすることはありません。例を挙げるならCランク水属性魔法『水弾』にBランク炎属性魔法『大炎弾』を当てたら『水弾』は蒸発してしまいます。ですが、このような手段をとる魔法師は殆どいません。そんなことをするよりも防御魔法で確実に防いだ方が魔力の節約にもなりますからね。いるとしたら、保有魔力量に余程の自信がある魔法師か魔力計算の出来ない魔法師だけです。ですから、皆さんが知らなかったのも無理はありません。イシユタール君、よく出来ました！」

「ありがとうございます」

ゼロはルーナの賛辞を素直に受け取った。

そんなゼロに向かって不思議そうな視線が飛ぶ。

何故、そんなことを知っているのだろうか？といった感じた。

もちろんゼロは華麗にスルーを決め込んだが……。

「次は複合魔法と融合魔法についてです。複合魔法は複数の魔法属

性を組み合わせて一魔法属性の効果を高めることです。例えば、風属性で炎属性の威力を高めることがそれに当たります。

融合魔法は複数の魔法属性を組み合わせる新しい魔法属性を生み出すことです。氷属性を生み出す場合は水属性と風属性の魔法を組み合わせます。

このように複合魔法や融合魔法を使う場合は、複数の魔法属性を使いこなさなければなりません。我が校の生徒会長セリカ・シュタインさんは三つの基本魔法属性を使いこなすことができます。皆さんも高みを目指して精進を重ねて下さいね」

「先生は幾つ属性を使いこなせるんですか？」

リーガンがルーナに訊いた。

「私ですか？私は魔法属性までは言えませんが3属性は使いこなせます」

「へー、先生って見た目によらず凄いんですね」

リーガンはしまった、といった表情を浮かべる。

ルーナの顔は引き攣っていた。

「ギューンター君、それってどういう意味かしら？」

「え、ええと、すみませんでした！！！」

リーガンは椅子から飛び上がるとそのまま机の上に着地しながら土下座した。

それに、呆れや同情や憐みなどの視線が向けられる。

ルーナはその様子にバツを悪くしたのか、それ以上は何も言わなかった。

「……もう良いです、ギューンター君。ちゃんと席に着いてください

……」

「あ、ありがとうございます！」

リーガンは瞳を潤ませていた。

それほど怖かったのだろう。

「こほん！そ、それでは授業に戻ります。次は無属性魔法についてです。

無属性魔法は基本属性に分類不能な魔法の総称です。血の盟約によって結ばれた霊獣を呼び寄せる召喚魔法、魔法師の使える魔法属性を帯びた魔法を防ぐための防御魔法、負傷した人を自身の魔力により治療する治療魔法などといった様々な魔法があります。無属性魔法は基本魔法属性ではありませんので誰にでも使え汎用性に優れるのが特徴です。

しかし、扱いが困難な無属性魔法も存在します。例えばこういったものでしょうか？ワンダーさん答えて下さい」

「……はい。代表的な魔法が身体強化魔法や空間魔法、未来予知魔法です。身体強化魔法は精密な魔力コントロールを必要としていて、未熟な者が使用すれば身体が破損してしまうこともあります。

空間魔法は使い手が少数のため詳しいことは分かっていませんが、例を上げれば、次元の裂け目を開いて自らの望む場所に自由に移動したり、次元の裂け目に仮想空間をつくるなど神に準ずる魔法と言われています。ですが、これもまた精密な魔力操作を必要とする上、膨大な魔力を消費するという欠点が存在します。

最後に未来予知魔法は、自らが指定した数秒間の限定的な未来を見ることの出来る魔法です。この魔法はそこまでの魔力は消費しませんが、精密な魔力操作と強靱な精神力を必要とします。未熟な者が使用すると未来の情報に脳や心が耐えられずに壊れてしまう危険性がある魔法です。……以上です」

クラス中の生徒がリリーに対して瞠目していた。
無属性魔法の空間魔法や未来予知魔法についてそれほど深く知っている者はそう多くないからである。

確かに有名な魔法ではあるが情報とイコールという訳ではない。

「ワンダーさんは博識ですね。私も知らなかったことが幾つもありました。皆さん、素晴らしい知識を披露してくれたワンダーさんに拍手を！」

教室中が拍手の音に包まれた。

リリーはほんの少しだけ顔を綻ばせていた。

丁度その時学院のチャイムが鳴った。

「それでは、今日の授業はここまでです。それにしても本当に良かったわ。ルンルンちゃんに甘噛みされる人がいなくて。危ない人は一人いましたが……」

そう言つてリーガンを見ながら教室を後にした。
その視線にリーガンは冷や汗が止まらなかった。
その晩、リーガンの夢にルンルンちゃんが出てきたのは余談である。

「なあゼロ、お前昼休みはどうするんだ？」

「ここに残ってるよ。放課後の件があるから」

「そっか。ゼロ君会長に待ってるように言われたんだっけ」

「お昼何を食べるの？」

「シュタイン会長が帰ったらすぐに食堂に行くよ。だから皆は気にしないで良いよ」

「そっか……。じゃあ食堂で待つてるからな」

そう言つと、リーガン達三人は教室を出て行つた。

その後席に着いていると妙な視線を幾つも感じた。

その視線を追つと、廊下の方から通りすがりの生徒がこちらを見て、こそこそと話をしていた。

ガイアとウリアを見に来てるのかとも思ったが、どうも視線はゼロに向いているようである。

その視線に嫌な予感を覚えていると、セリカがやってきた。

「遅くなつてしまつてごめんなさいね」

《本当だ！ゼロを待たせるとは一体何様のつもりだ！》

《そうそう。ゼロがその気なら死刑だよ》

「二人共、そんなこと気にしてないから。それよりシュタイン会長、先程から僕に視線が集中しているようですが、何かあったんですか？」

「別にそういう訳ではないわ。生徒会は放課後の勝負を大々的に宣伝しました。恐らく、その影響でしょう」

平然と放たれたその言葉にゼロは重い溜息をついた。

「やはりそういうことですか。なんとなく想像はしていました」

「そう、なら話は早いわ。ちょっとここは人目が多いし、場所を移して話しましょうか」

そうして二人と二匹は様々な奇異の視線の中、教室を後にしたのだった。

第7話〈魔法授業〉（後書き）

評価、感想をよろしくお願いします。

第8話　～圧勝～

放課後、第3アリーナで、ゼロとガイア、ウリアはジオとそのパートナーである蜥蜴の霊獣と10メートル程の距離を置いて対峙していた。

聖アストラル学院には5つのアリーナがあり、全てのアリーナに防御魔法が張られている。

第1アリーナには最も強力な防御魔法が張られており、その強度はSSランクになる。

この第3アリーナにはAランクの防御魔法が張られている。

全てのアリーナは闘技場のような形状をしており、第3アリーナの観客席には収まりきらない程に大勢の生徒が足を運んでいた。

セリカが行ったという宣伝の効果だろう。ゼロ達には多くの野次馬的視線が向けられている。

それだけ、E組の謎の幻獣使いとライガー伯爵家の一人息子であるA組のジオ・ライガーの勝負は見るに値する価値があるということだろう。

ゼロは自分達に向けられる視線の量に内心うんざりしていた。

そんな様子を勘違いしたのか、ジオが挑発をしてきた。

「なんだ、怖気づいたか。まあ、そうだろうな。なんたつてこのA組のジオ・ライガー様と勝負するんだからな。見る！お前の無様な姿を見ようとこんなにも人が集まっている。今ここで土下座するのなら手加減してやらんでもないぞ」

「グアー！」

《ほう、威勢だけは良いようだ。今ここで貴様達を瞬殺することも可能なのだが》

《ガイア、もういつその事その蜥蜴も含めて殺っちゃおうよ！さすがに堪忍袋の緒が切れそうだからね》

ガイアとウリアの殺気にジオと蜥蜴の靈獣が恐怖する。
特に蜥蜴の靈獣の方は格の違いが理解出来るよううで後退りさえしている。

「ど、どうしたんだガイル！し、心配するな！お、俺がお前を守つてやるから！」

自身も震えながらも靈獣を思いやる姿勢に、ゼロは少しだけジオの評価を上げる。

「良いところもあるんですね。少し見直しました」

「お前ごときに見直される覚えはない！地面に這いつくばる落ちこぼれは黙っている！」

ゼロの言葉で緊張も解れたのか、急に威勢が良くなる。

ジオの言葉に反応してガイアとウリアはまた殺気を飛ばすが、今度は怯まなかった。

と、そこへ審判役のアンがやってきた。

「私はこの勝負を取り仕切らせていただく、生徒会副会長アン・リンスレットです。今からルールの説明をさせていただきます。

勝利条件は相手が降参するか、相手を気絶させるか、私が勝負がついたと判断した場合です。靈獣と共に戦うことは構いませんが、相手を殺害出来るランク魔法の使用は認めません。もし使用した場合は、強制的にその場で敗北が決定しますのでご注意下さい。それでは双方とも準備はよろしいですか？」

「はい。いつでも構いません」

「いつでもいいぞ」

「はい。それでは始めて下さい！」

ジオは戦闘開始の合図と共に手をゼロにかざし、複雑な文様の魔法式を展開、その魔法式からCランク炎属性魔法である『炎弾』が5つ放たれた。

ゼロが何の拳動も見せないのを見て口元に笑みを浮かべる。

A組に所属するジオにとって魔法を同時に5個発動することは難しい事ではない。

だが、E組のゼロには魔法演算領域が足りずそんなことは出来ないと確信していた。

聞いた話だとE組の連中は精々3個がやっとだと聞く。

ジオはその気になれば10個は魔法を同時に発動出来る。A組とE組とではそれ程の実力差があるのだから、ジオの傲慢も決して行き過ぎたことではなかった。

しかし、次の瞬間ジオは瞠目した。

今まで何の拳動も見せなかったゼロの前面に魔法式が現れ5個の『炎弾』を放ち、ジオの『炎弾』を相殺したからである。

（馬鹿な！E組程度が拳動もなしで『炎弾』を5個も！そんなことは俺にも出来ないぞ！！）

ジオが驚愕するのも無理はなかった。

拳動は魔法を使う上で重要な動作だ。

拳動は人それぞれだが、一般的にはジオのように手をかざしてそこから魔法を発動する。

その方が、魔法を発動するイメージがしやすいからだ。

それに比べてゼロは何の拳動もなしに魔法を発動して見せた。

その上、魔法の質も落とさずに5個もの『炎弾』を放ったのだ。この場に居た者の全員が驚いていた。

ジオはすぐにショックから立ち直ると、先程よりも複雑な文様の魔法式を展開しBランク炎属性魔法『爆撃』を放った。

『爆撃』は『炎弾』と見た目は変わらないが、物体に着弾すると四方10メートル程度の爆発を起こす魔法だ。

（この魔法ならば相殺されることなどある訳がない！さっきのはマグレだ！そうに決まっている！！）

しかし、ジオの考えはすぐに覆された。

ゼロはやはり何の挙動も無しに魔法式を展開、Bランク炎属性魔法『爆撃』を放ったのだ。

同等の威力を有する『爆撃』と『爆撃』は着弾と同時に互いの威力を食い合い爆発を起こしながら、辺りに煙と熱風を撒き散らす。

ジオが爆発地点からの煙と熱風に怯んでいると、煙を穿ちながら6個の『炎弾』が飛んできたので、ジオは咄嗟にBランク防御魔法『炎の盾』を前面に展開して『炎弾』を防いだ。

（あ、危なかった…。咄嗟に防御魔法を展開してなかったら終わってた！くそ！まさか『爆撃』を使えるとは…。落ちこぼれのぶんざい……………」

ジオは、今日一番の驚愕を味わった。

ゼロの頭上に特大の火球が浮かんでいた。

『炎弾』の100倍のサイズと威力を誇るAランク炎属性魔法『業炎』。

『炎弾』とは違い、精密な魔力操作を要求する上、一步でも魔力

操作を間違えれば暴発の危険すらある魔法がE組の落ちこぼれに使えるはずがなかった。

そこでジオは見た。

こちらの反応を見て愉快そうに唇の端を歪めて見せたゼロを。

（この野郎！！勝負なんてどうでも良い！！ぶっ殺してやる！！！）

そして、ジオは冷静さをかなぐり捨てた。

「ガイル、『同調霊化』だ！！！！俺の中に来い！！！」

ジオが叫ぶとガイルは一条の光となってジオの中に消えた。
その身体が赤い光に包まれ、次の瞬間爆風が巻き起こり、その姿を顕わにした。

ゼロはセリカの指示した通りに動いていた。

昼休みセリカの後について行ったら生徒会室に通された。

中には誰もいないようでセリカと二人きりということになる。

セリカはゼロを席へと促すと自身も着席した後言った。

「ゼロ君、昨日あなたが言ったように、ジオ君に圧勝して下さい。

しかも只圧勝するだけでなく、ジオ君の実力を全て引き出した上です。可能ですか？」

「分かりました。ですが、どうしてそういう結論になったのかを教えてください」

「ゼロ君の実力を生徒に示すためです。短時間で終わらせてしまえ

ば、まぐれかと考える者も出てくるでしょうから……。

「成程…、分かりました。最善を尽くします」

というセリカの望み通り、ジオの実力を全て引き出すためにジオの魔法を悉く相殺して見せた。

Aランク炎属性魔法『業炎』は只の脅しのつもりだったが、あれで戦意が喪失する可能性もあったので、極めつけにあの笑みである。それによって完全に冷静さを失ったらしいジオは『同調霊化』をしたのだった。

手からは炎で構成された鋭い爪が生え、お尻からはこれまた炎で構成された尻尾が生えている。

（へえ、…、A組とはいえ『同調霊化』を使えるなんて、計算外ですね。ですが……）

『同調霊化』とは古の盟約を交わした霊獣と行える魔法。

霊獣と古の盟約を交わす際に、盟約者は霊獣の魔力を体内に取り込む。

『同調霊化』とは、盟約者の体内の霊獣の魔力と霊獣自身の魔力を共鳴させ、霊獣本体を体内に取り込み自身の力と為す魔法の事である。

『同調霊化』をすれば、その霊獣の特徴を一部有する様になる。

この古の盟約こそ、かつて創造の三神から魔族を滅ぼすために与えられた力である。

しかし、霊獣と盟約を交わした者なら誰しもが使える訳ではなく、扱うためには高い魔力操作能力が要求される上、霊獣との信頼関係がその力に比例する。

よって、『同調霊化』を使えることは一種のステータスであり、誇りでもある。

だが、ジオはゼロへの怒りから『同調霊化』の力を暴走させてい

た。

「殺す！殺してやる！！」

「やめなさい！それほどの魔力は人を殺せます！試合放棄と見なしますよ！」

「うるさい！！」

「きゃっ！！」

ジオの身体から溢れ出た魔力は物理的な衝撃となってアンを襲った。

アンはそのまま5メートル程吹き飛び意識を手放した。

そんなことには目も暮れず、ジオは叫んだ。

「殺す！！お前だけは絶対に殺してやる！！！」

そう叫ぶとジオの頭上に巨大な魔法式が生まれ、『業炎』よりも巨大な火球が生まれた。

Sランク炎属性魔法『陽炎』。その威力は半径500メートルを焦土と化す程であり、この場で使ったら間違いなく防御魔法を破り第三アリーナを焼き尽くすだろう。

あまりの異常事態に周りの生徒は声を出す事も出来ず呆然としていた。ゼロ達以外は。

《ゼロよ、どうする？我等も『同調幻化』をするか？》

《そんな必要ないよ！ゼロならあんなの一発だ！》

《うん。あの程度なら今の僕でも十分出来るよ。》

《そうか、分かった》

《頑張ってね！》

多くを語らずともガイアとウリアはゼロの意志を理解した。

そんなパートナー二匹に感謝しながら、ゼロは『陽炎』に対してSランク空間魔法『転移』を発動した。

途端、ジオの頭上にあった『陽炎』の周囲に一瞬魔法式が生まれ、『陽炎』が消えた。

そして、第3アリーナを揺るがす振動と共に遠くで爆発音が聞こえた。

いきなりの出来事に理解が追いつかず呆然とするジオ。

ゼロはその隙を見逃さずにジオとの距離を一瞬で詰めると、勢いそのままにジオの鳩尾に突きを繰り出す。

「かはっ……！」

ジオの身体は九の字に折れ曲がり、そのまま意識を失った。

リーガン、ミリアリア、リリーの三人はリーナと共にこの勝負を観戦していた。

ゼロには終始驚かされっぱなしだった。

無拳動で魔法を5個も発動したり、Bランク魔法にAランク魔法まで使った時は思わず声を上げそうになった。

だが、同時に納得してもいた。

黒服達から助けてもらったあの日、その実力をもって圧倒して見せたのだから。

その後、ジオが『同調霊化』して生み出したあの巨大な火球を消し去った時は言葉が出なかった。

直後、遠くで爆発音が聞こえたのをきっかけに我に返ったミリアリアが沈黙を破った。

「ねえ、ゼロ君は何したの。あの爆発音は一体何!？」

「そんなの俺に聞かれても分かる筈ないだろ……」

「リリーはどう思う? あれ……」

今まで沈黙を保っていたリリーが答えた。

「……あれは、空間魔法。それもすごく高ランクの……」

「え! マジかよ、それ!」

「一体どうやって……」

リリーは無言でリーナを見やる。すると、リーナも口を開いた。

「リリーさんの言う通り。あれは恐らくSランク空間魔法でしょう。私も空間魔法事態を目にするのは初めてなので、なんとも言えませんが……」

「私も…、あんな規模の空間魔法聞いたことない……」

「イシュタルさんは、空間魔法であの火球を何処か遠くへと移したのでしょうか。だから、直後にあの爆発音が聞こえた」

「でもそれだけの規模の魔法を使うって相当量の魔力を消費するんじゃない。しかも、空間魔法って馬鹿みたいに魔力持って行かれるんですよ。普通ならフラフラになってるんじゃないの?」

「だけだよ、ゼロの奴はすぐにあのム力つく野郎を気絶させたぜ。10メートルの距離を一瞬で詰めたあの身体能力にも驚くけどよ、それ以上に全然疲れを見せないことに驚いたぜ」

「それだけイシュタルさんが規格外ということなんでしょうね。でなければ、幻獣二匹と古の盟約など出来ないでしょうから……」

そう言うと、リーナは無意識のうちに口元に笑みを浮かべた。

ゼロは倒れ伏したジオには一瞥も暮れず、ジオの魔力で吹き飛ばされ気絶していたアンのもとへ向かった。

「リンスレット副会長、大丈夫ですか？」

「う……ん……、ライガー君やめなさい！」

目を覚ますと同時にアンは虚空に向かって手を伸ばし叫んだ。

「もう大丈夫ですよ。ライガーさんは気を失ってます」

「え……、でもライガー君は『同調霊化』して暴走したはずでは……」

……」

そう言っただけで倒れているジオを見やると、

「本当のようですね、でも一体どうやって……」

「勝負はつきました。終了の宣言をして頂きたいのですが……」

「そ、そうですね！」

アンはすぐに立ち上がると宣言した。

「これにてゼロ・イシュタルとジオ・ライガーの勝負を終わります。勝者は、ゼロ・イシュタルです……」

その宣言と共に一部の生徒は拍手喝采を送り、一部の生徒はゼロを恨めし気に見つめるのだった。

「凄いわね、ゼロ君……」

「あれは凄いという言葉で形容出来るものなのか？この学院にも空間魔法を使える奴は何人かいるが、あれ程の使い手は聞いたことがないぞ？」

「そうね、でもこれですますゼロ君が欲しくなったわ」

そう言っ、セリカは少しだけ頬を赤く染めた。

そんな様子を見てダリアは細い溜息をつきながら、誰にも聞かない声で呟いた。

「……あいつも大変だな。こんなじゃじゃ馬に目をつけられるなんて……」

ダリアは第三アリーナを後にするゼロの背中を見つめた。

ランクAの魔法を無挙動で発動させた上、信じられない規模の空間魔法を発動させた、謎の幻獣使いゼロ・イシュタール。

ゼロが今後この学園にどのような影響を齎すのか。

ふと、セリカに視線を向けると目が合った。

どうやらセリカも同じことを考えていたらしい。

セリカとダリアは自然と零れる笑みを抑えることが出来なかった。

第8話〜圧勝〜（後書き）

評価・感想をよろしくお願いします。

第9話 ようこそ！

聖アストラル学院の敷地はとても広大である。

学院やアリーナ、12戸の学生寮の他に、四方三キロメートル程の森がある。

燦々と注がれる太陽の光を受けて森全体が生き生きとしている。

ゼロはその森の奥にある大樹に背中を預けて、自らの所業を後悔していた。

Bランク炎属性魔法『爆撃』やAランク炎属性魔法『業炎』はまだ良い。

仕方がなかったとはいえ、あんな大勢の前でSランク空間魔法『転移』を発動してしまったことが問題なのだ。

しかもこの後は生徒会室に行かなければならない。セリ力達からの追及は避けられないだろう。

《ゼロ、何をそんなに気に病んでいる。愚民共にゼロの実力を知らしめることが出来たのだ！高笑いでもして我らと喜びを共有しようではないか！！》

《そうだよ！これでゼロが学院を掌握する日も遠くないよ！！》

「二人共、僕は学院を掌握する気なんて毛頭ないからね……」

ガイアとウリアにも困ったものだと思う。

普段は多くを語らずともゼロの心理を理解してくれる。

だが、周囲のゼロに対する評価のことになると軽い暴走状態に陥るのだ。

拳句の果てに学院の掌握などと言い出す始末……。

《ゼロよ、過ぎたことを後悔しても仕方があるまい》

《その通りだよ！これでゼロの実力が分からない愚かな種族に馬鹿

にされることも無くなるんだよ!」

「僕はこの学院ではあまり目立ちたくなかったんだよ。表舞台に立つのは、卒業した後でも遅くないからね」

《むう、我はゼロのその消極的な姿勢は数少ない欠点だと思うがな…》

《そもそも、どうしてゼロはこの学院で目立ちたくないの?》

...

「僕がまだ弱いからだよ。今の僕には大切な君達を守りきるだけの力はない。」

.....

ウリアのもう一つの力を取り戻すためにもこの学院で力を蓄える必要があるから……」

《ゼロ、ウリアのことはお前のせいではない!我等の力が足りなかったただけ!》

《それにあの時、もっと早くゼロの力を開放していれば……!》

...

「単純に僕の力が足りなかったんだ。確かにあの時よりも僕は遥かに強くなったけど、まだ足りない。真の力に頼らなくても、君達を守るくらい強くなりたい!」

《ゼロだけではないぞ!》

《僕達も強くなるよ!》

「ありがとう、二人共……。じゃあ、そろそろ行こうか。みんなもう集まってるだろうし」

そう言ってゼロは、腰を上げ大樹から離れていく。

森の中に射す木漏れ日が、スポットライトの如く、ゼロ達を照らしていた。

森の中で落ち込んでいたせいで集合時刻に30分も遅れてしまった。

生徒会室に入室したゼロを待っていたのは、女性陣からの冷たい非難だった。

「随分遅いご登場ね。何か用でもあったのかしら？」

「待ち合わせの時刻に遅れるなんて信じられません！そんな方ではないと思っていたのに！」

「10分前行動という言葉をご存知ですか？」

セリカは満面の笑顔で、アンは憤怒の形相で、リーナは底冷えのするような笑みを浮かべての言葉だった。

ゼロだけでなく、ガイアやウリアまでもが戦慄している。

ゼロ達が生まれて初めて女性の恐ろしさを実感した瞬間だった。

「す、すみません。少し森の方で考え事をしていたもので……」

「森？ああ、神秘の森の事ね。考え事って、勝負の後、すぐ生徒会室に来る約束だったでしょう。まさか、忘れていたのかしら？」

セリカのその言葉に女性陣の視線が鋭くなる。

ゼロは必至で言い訳を考えたが、分かることは額に浮かぶ汗だけで、肝心の回答は全く分からなかった。

そんな珍しく焦るゼロの様子に満足したのか、女性陣の視線も柔らくなった。

「もう良いわ。ゼロ君、早く席に着いて。突っ立ってるままでは何も始まらないわ……」

「すみませんでした……」

ゼロは大変恐縮しながら、リーナの隣、下座に着席した。

配置的には、上座に座っているリーナの正面にセリカ、その隣にアン、その正面にゼロというのは配置になる。

ガイアとウリアは特等席である、ゼロの両肩に陣取っている。

「それでは、役者も揃ったところで本題に入りたいと思います。生徒会としては是非、ゼロ君とランカスターさんに生徒会に入っていただきたいと思っています」

セリカは真剣みを帯びた声音で告げた。

半ば予想していた事だけにゼロとリーナの反応は薄い。

ゼロは何となく横に視線を向ける。

するとリーナもゼロを見ようとしていた様で、ゼロと視線が合う。

それでゼロは何となくリーナの意志を読み取った気がした。

ゼロは正面を向いてセリカに訊いた。

「生徒会に入ると、僕達にどういった利があるんですか？」

「……えっ……」

「僕はこの学院に明確な目的をもって入学しました。その目的が阻害されるようなら生徒会には入る事は出来ません」

「その目的を訊いてもいいかしら？」

「強くなることです」

「強くなる？でも、ゼロ君は今でも十分強いじゃない。この学院にも空間魔法を使える人は何人かいるけど、あの規模の空間魔法の使い手は聞いたことがないわ」

「それは、学院という箱庭の中での話です。あの程度の力では僕の

望みは何も叶わない…」

「望み…？」

「いえ、何でもありません。話は戻りますが、僕とランカスターさんにどんな利があるんですか？」

その言葉にセリカはアンと視線を合わせる。

ゼロの意図を図りかねている様子だった。

セリカに助け船を出すためか、アンがゼロに訊いた。

「イシユータル君は、生徒会に入らないとしたら何をする予定なんですか？」

「僕は僕達の鍛錬の時間にしようと考えています」

「鍛錬ですか？」

「ええ。先程も言ったように、強くなるためにはさらに努力を重ねなければなりませんから」

そこまで言ったところで、セリカとアンが顔を見合わせて微笑んだ。

ゼロに向き直り、どこか納得したような面持ちで言った。

「ゼロ君、聖アストラル学院には様々な最新鋭の魔法設備が充実しています。生徒会役員になれば、生徒会の用事が無い時に、その設備が自由に使うことが出来るの。これが私達がゼロ君とランカスターさんに提案する利です」

「何故、生徒会役員はその設備を自由に使えるんですか？」

今まで口を開かなかったリーナの言葉だ。

「生徒会役員とは我が校を代表する生徒の事です。生徒会とは生徒を統括する機関であり、校内での高い権限を有します。それ相応の

実力が求められるのは当然の事じゃないかしら？」

「成程、そういう事ですか。それで、どういった設備があるんですか？」

「そうね、代表的なものは防御魔法発生魔法具ね。防御魔法の属性は使用者が自由に決められる上に、ランクはSS相当よ。ライガーさんの発動したSランク炎属性魔法『陽炎』の直撃さえ防ぐわ。私やアンやダリア君でも打ち破ぶった事は無いの。それに防御魔法の外からでは中の様子は見ることも聞くことも魔力波を感じることも出来ないから、安心して魔法を使えるのよ」

魔法師の中には固有魔法を有する魔法師が数多く存在する。

一般に知られている魔法は、元は先人の有していた固有魔法である。

固有魔法を国に進呈してその価値が国に認められれば、特許を得ることが出来、その魔法は魔法大辞典に載ることになる。

よって、固有魔法は魔法師の固有財産であり、むやみやたらに他人に見せるようなことを好まないのだ。

（成程、悪くない見返りですね。鍛錬中の僕の空間魔法の強度はAランク程度。SSランクなら今の僕達が本気で暴れても壊れることはないでしょう）

そう思い両肩のパートナーに目を向けると、同じことを考えていたのかすぐに肯定してくれる。

ゼロは決めた。

そして、リーナを見やった。

「ランカスターさんはどうするんですか？」

「そう言うイシュタルさんはどうするの？」

「僕は生徒会に入ることになります」

「そう、なら私も入ることにします」

「それは、どういう意味ですか？」

「さあ、何でしょう」

ゼロの質問にリーナは笑顔ではぐらかした。

そのまま暫しの間、リーナと見つめ合う。

「こほん！二人だけの世界をつくっているところ申し訳ないのだけれど、ゼロ君とランカスターさんは生徒会に入会してくれる、という事で良いのかしら」

その言葉で前方に視線を送ると、セリカは不機嫌そうに、アンは顔を赤くしている。

それだけでなく、両肩の二匹までゼロとリーナに恨めし気な視線を送っていた。

《ゼロはそのような娘が好みだったのか……》

《ゼロとは長年一緒に生きてきたけど、そういうことまでは気付かなかったな……》

ゼロは意味が分からないといった顔をし、リーナは微かに頬を赤く染めた。

「どうしたんですか、皆さん？そんなに怖い顔をして。僕が何か気に障るようなことでも？」

「『『『《………。》』』」

呆れを通り越して憐みの視線がゼロに向けられ、何故かゼロはその場から一刻も早く逃げ出したい衝動に駆られた。

本日二度目の戦慄を味わっていると、ドアがノックされ「もう話は済んだか？」というダリアの声が聞こえてきた。

セリカが返事をする、ダリア、リーガン、ミリアリア、リリーの4人が入って来る。

4人は生徒会室内に漂う不穏な気配を察知したようで、皆一様に首を傾げていた。

「セリカ、何かあったのか？」

「別に、何でもないわ。只、ゼロ君が超鈍感よねって、話してただけ……」

そう言っ、今度は怒りを宿した瞳をゼロに向ける。

ゼロは額だけでなく体中から汗が噴き出すのを感じた。

「ゼロ、本当に何があったんだ？」

「ゼロ君が、そんなに動揺するなんて想像できないわ。それに超鈍感って……」

「どういう意味？」

ゼロに出来ることは、何も答えずに肩身を狭くすることだけだった。

「……もう良いわ。ところでダリア君、その3人を連れてるってことはそういうことかしら？」

「そついうお前も成功したんだな」

「ええ、ゼロ君にはいろんな意味で冷や冷やさせられたけどね」

「そつか……」

その二人のやり取りで1年生組は全てを理解した。

「シュタイン会長、初めからこういうつもりだったんですね」

「ええ、そうよ。ゼロ君とランカスターさんを生徒会に取り入れて、ギウンターさん、スレインさん、ワンダーさんを風紀委員会に取り入れる。当初の目的は見事達成されたわ」

なんとも図々しい物言いだった。

最もこの豪胆さこそが、人を引き付ける魅力なのかもしれない。

「という訳で皆さん、明日からよろしくね」

「「「ようこそ！生徒会と風紀委員会へ！」「」」

こうしてゼロとリーナは生徒会役員に、リーガン、ミリアリア、リリーは風紀委員会へ入会することが決定したのだった。

第9話〜ようこそ〜（後書き）

評価・感想・レビューを待ってます！

第10話　鍛錬（前書き）

この作品の文章構成を少し改変しました。

第10話　鍛錬

ゼロとリーナが生徒会に入ってから一週間、生徒会は地獄だった。何故なら来週から部活動勧誘週間が始まるからだ。

そもそもゼロは今まで学校に通ったことがなかったので部活動や学校行事というものが良く理解出来ていない。

そこに生徒会会計などという学院の予算などを取り仕切る役職に就かされたのだから、ゼロとしては堪ったものではない。

それでもゼロはこの一週間の間に、持ち前の優秀な頭脳で確実に仕事をこなせるようになっていった。

否、こなせるようになってしまった。

ゼロの処理能力は他の追随を許さぬもので、手慣れた筈のセリカやアンをも上回るスピードだった。

畢竟、ゼロにより多くの仕事が回ってくることは必然と言えた。

「ゼロ君こっちもお願い！」

「イシュタールさん、さっきお願いしたこと終わりました！？」

「イシュタールさん、こちらの計算お願いできますか？」

という風に生徒会室内はまさに地獄だった。

ガイアとウリアは我関せずといった体でソファで静かに寝転んでいる。

ゼロに出来ることはそんな二匹を恨めし気に睨み、報復を誓うことだけだった。

「ようやく終わりました……」

そう言うと会計専用の机に突っ伏した。
その姿はまるで生気のない屍の様だ。

「ぜ、ゼロ君、大丈夫……？」

「ま、まるで死人みたいです」

「ここまで疲れ切った人は見たことはありません……」

《ゼロ、どうした！？いつものゼロらしくないぞ！》

《そうだよ！ゼロはいつでも慄然としてなきゃゼロじゃないよ！》

そんな声を聞きながらも、変わらず机に突っ伏すゼロ。

この一週間ゼロは休む暇がなかった。

土日も関係なく慣れない作業を大量に任されたからだ。

慣れない作業に疲れ切ったゼロは机に突っ伏すという滅多にない
姿を晒すことになった。

「ごめんね、いっぱい仕事押し付けちゃって」

「本当にそう思ってるのなら、次回からはこんなことがないように
お願いします」

「それは保障出来ないわ。ゼロ君のおかげで予定よりも3日も早く
仕事が片付いたんだから。今日だって、明日からゼロ君が鍛錬に励
めるようにお姉さんだって頑張ったんだから！」

「それは当たり前前の事です。そもそもどうして役員がこんなに少な
いんですか？」

「前にも言っただけど、生徒会役員は校内で強い権限を有してるの。
実力が有っても性格に問題があれば生徒会役員には任命出来ないわ。
風紀委員会だって同じよ。ゼロ君たちみたいに実力があっても謙虚
な人達ってあんまりいないのよ」

「成程、そういう事ですか。それなら仕方ありませんが、だからと

いつて人に仕事を押し付けても良いという訳にはなりませんよ……」

ゼロの呆れきった姿を憐れに思ったのか、アンがフォローしてきた。

「イシユータルさんごめんなさい。セリカには後で良く言い聞かしておくわ。でも、ゼロ君には本当に助けられたわ。ありがとう」

「……いえ……どういたしまして……」

ゼロはそれ以上何もいう事が出来なかった。

その様子を見てリーナが口元に笑みを浮かべた。

「イシユータルさんも疲れることがあるんですね」

「……ランカスターさんは僕を何だと思ってるんですか？」

「Sランク炎属性魔法『陽炎』を空間魔法で何処かへ跳ばせる程の凄い魔法師です」

「……、どう解釈すれば良いんでしょうか？」

「そのままの意味ですよ」

「ランカスターさんは意外と意地悪なんですネ」

「あら、心外です」

「本当にそうでしょうか」

「うふふふ……」

「……………」

そんな二人のやり取りを遠巻きに見ていた二人と二匹は全く同じことを思った。

「ゼロ君の弱点って……」

「イシユータルさんの弱点って……」

《ゼロの弱点は……》

《ゼロの弱点って……》

「『《ランカスターさん（あの小娘）（リーナちゃん）！？》《

」

彼らの思考は、ゼロとリーナに知られることはなかった。

翌日のお昼休み、ゼロはリーガン達と食堂にいた。

聖アストラル学院の食堂はとても広く、メニューも充実している。ゼロ達は今窓際の丸テーブルに座って5人と2匹で昼食を摂っていた。

「……なあゼロ、お前今めちゃくちゃ顔色悪いぞ。そんなに生徒会の仕事辛いのか？」

「ええ。言うならば無限地獄です。仕事を片付けても片付けても終わらない。いえ、終わってもいないのにどんどん仕事が溜まってくという……」

「……なんかすごく大変そうね……。あたしだったら一日たりとも耐えられないかも……」

「他人事ではありませんよ、スレインさん」

「どういう意味？」

「お忘れですか？来週から部活動勧誘週間ですよ。風紀委員の皆さんにとっては地獄のような日々が始まりますよ」

「ランカスターさんって、意外とユニークな性格なのね。リリーもそう思わない？」

「同感。最初は近寄りがたい人に思えたけど、話してみると親しみやすい」

「ありがとうございます。私も皆さんのようなお友達が出来て嬉しいです」

そんな感じでガールズトークは盛り上がっていき、一方ゼロ、ガイア、ウリアはというと、

《ゼロよ、本当に大丈夫か？我の眼には日に日にゼロが衰弱していくように映っているのだが……》

《あの女、自分の無能を良いことにゼロにあんなに仕事を押し付けて、今度会ったら只じゃおかないよ！》

「ウリア、君も僕が苦しんでる時に見て見ぬ振りしてたよ」
《っ！》

ゼロの言葉に左肩のウリアが飛んで逃げようとするも、ゼロにあっけなく捕まってしまふ。

ウリアをお仕置きする時特有の貼り付けた笑みを浮かべたゼロは、ウリアの弱い部分を思いっきりくすぐる。

《ハハハハハ！……ゼロ、ゆ、許しあはははははは！……》

《いいぞゼロ！もっとやれ！ウリアにお灸を据えてやるのだ！ハハハハハ！》

「ガイア何を言ってるのかな？もちろんガイアも同罪に決まってるだろう？」

一瞬にして表情が凍りつくガイア。

自らの身の危険を悟ったガイアは現時点で出せる最高速度で逃げ出そうとするが、ウリアと同じくゼロにあっさりと捕まってしまふ。

《ぜ、ゼロ！悪かった！ゆ、許してくれ！！次回から我も生徒会とやらの仕事を手伝う！！だから！！！！》

「罪には罰が必要だよ。それはガイアもよく知ってるでしょ」

ゼロの言葉を合図にガイアとウリアの絶叫が食堂中に響き渡るのだった。

放課後、ゼロは第一アリーナの中にあるSSランク防御魔法発生魔法具の前に立っていた。

その形は円柱型で、大きさは160センチ程で真上に手を翳して魔力注入するタイプのだ。

魔法具とは、創造の三神がまだ健在だったときに人類に与えられた魔法を発生させるアイテムの事である。

その形は様々で、指輪もあれば巨大な建造物サイズの物まである。そして、魔法具の能力は大きく分けて二種類ある。

この防御魔法発生魔法具のように定められた一定量の魔力を注入することによりその力を発動する魔法具や、使用者に魔力を貸与して特別な魔法を使わせる魔法具などである。

ゼロは目の前の魔法具に魔力を注入する。

すると、第一アリーナ全体が青白い光に包まれた。

この防御魔法を壊さない限り、この光の中では第一アリーナの物には干渉出来ない。

ゼロは防御魔法全体を見渡した。

「見た目は他の防御魔法とそう変わらないね」

《うむ、だが強度は段違いだ》

《これなら今の僕達がいっきりに暴れても大丈夫そうだね》
「そうだね。『同調幻化』さえ使わなかったら大丈夫かな」

そう言つとゼロはSランク空間魔法『仮想世界』を発動し、中に収納していた白と紅の二振りの武器を取り出した。

この二振りには鍔もなければ鞘もない。

これはガイアとウリアの魔力から創られた刀剣で、刀剣の力はガイアとウリアの力に比例する。

右の白刀を『アイテール』、左の紅刀を『エレボス』という。

《うむ、では我らも戦う用意をしよう！》

《うん、そうだね！》

ウリアの言葉が終わると、ガイアとウリアの体が輝き、二人の男が現れた。

一人目は長い白銀の長い髪を真つ直ぐ伸ばし、精悍さを感じさせる眉、歴戦の猛者を思わせる金色の鋭い眼光を放っている。

世の女性が一度は夢見る理想の王子様と言った雰囲気だ。

二人目は肩口で切り揃えられた燃えるような赤髪に利発そうな眉、深緑の瞳はあどけない子供を思わせる。

お転婆な美丈夫といった感じだ。

ガイアとウリアの人間体である。

幻獣はその強大な力を利用しようとする他種族の眼を欺くための擬態魔法を使えるのだ。

ゼロ達は正面に向かい合った。

「じゃあ、始めようか。勝負は2対1の形式でね」

《うむ、いつもは出せなかった力を今こそ出す事にしよう！》

《ゼロ、手加減しないからね！》

「うん、よろしくね。さて、このコインが地面に落ちたら始めることにしよう」

ゼロの言葉を二人が肯定する。

それを合図にコインが真上に投げられた。

そして、コインが地面に落ちると同時に三人の姿が消えた。

ゼロ達は身体強化魔法を発動し自らの肉体を極限まで高め、音速の世界に突入したのだ。

ゼロがウリアに『アイテール』で斬りかかり、ウリアはそれを平然と躲しゼロに手刀を放ってくる。

ゼロがウリアの手刀を『エレボス』で受け止めたところでガイアがSランク風属性魔法『大鎌鼬』を放ち、圧倒的な切れ味の巨大な風の刃がゼロとウリアに襲い掛かった。

ゼロとウリアは咄嗟に後方へ避け、お互いにSランク炎属性魔法『陽炎』を放つ。

二つの熱は衝突と同時に大爆発を起こした。

しかし、そんなことをいちいち気に掛けるような真似はしない。

三人は熱風などものともせず正面からぶつかり合い、その衝撃で熱と煙が吹き飛んでいく。

ゼロが『アイテール』と『エレボス』で二人に斬りかかる。

それを難なく避けて、ガイアは拳を、ウリアは手刀をもってゼロに襲い掛かる。

ゼロはそれを捌きながらSランク光属性魔法『光塵』を二人に向けて放つ。

だが、『光塵』を予期していた二人は至近距離から放たれる『光塵』を何とか躲すとゼロから距離をとった。

「ゼロ、また腕を上げたな！まさかあのタイミングで『光塵』を放ってくるとは、さすがに驚きを禁じえぬぞ！」

「そうそう！只でさえ光属性魔法は光速で攻撃してくるんだから、あんな至近距離から放たれたら堪ったもんじゃないよ！」

「でも君達なら躲してくれるって信じてたから」

「まったくゼロには敵わないな」

「さすがは僕達が唯一認めた人間だね！」

「無駄話もこれくらいにして、そろそろ始めようか」

ゼロがそう言うと、ゼロの身体が光を纏い、『アイテール』が光を、『エレボス』が炎を帯びた。

「『纏衣』と『魔力貸与』か……。ようやく本気で来るな！」

「そうでなくっちゃゼロじゃないね！」

二人がそう言うとガイアの身体はゼロと同じく光を、ウリアの身体は炎を纏う。

「二人共、行くよ！」

「「来い！！」」

次の瞬間、ゼロ、ガイア、ウリアは光速の世界に突入する。

ゼロ達が発動したのは『纏衣』と呼ばれる身体強化魔法よりも高次元の魔法。

身体強化魔法は自身の魔力により身体能力を上げる魔法（身体の一部でも可）であるのに対して、『纏衣』は魔法属性そのものを纏う（身体の一部でも可）魔法である。

『纏衣』を使うと身体強化魔法以上の身体能力向上に加えて、纏った魔法属性の威力が格段に上昇する。

一方で、纏っている属性の弱点となる属性魔法に対しては、極端に弱くなるという弱点も存在する。

ゼロ、ガイア、ウリアの三人で編み出した固有魔法の一つである。

一方『魔力貸与』は物質に魔法属性を貸与し纏わせる無属性魔法である。

物質に魔法属性を纏わせることでその属性の特徴を得る。

これは『纏衣』と違って、一般に使われている魔法だ。

ゼロとガイアは光速の世界で刀剣と拳を交える。

ゼロは無数の剣戟を繰り出し、ガイアはそれを躲し、若しくは受け流しながら拳を打ち込んでいく。

ゼロの『アイテール』による横一閃を身体を回転させながら飛んで躲し、その回転力を利用した拳を顔面に打ち込む。

それを首を逸らすことによって躲したゼロは空中で身動きの取れないガイアに『エレボス』による下段からの袈裟切りを仕掛ける。

光属性の『纏衣』によって強化した腕を交差させ、斬撃を受け止めたガイアは地面に足がつくと同時に後方へ跳躍した。

それを逃がすゼロではなく、影のように追従してガイアに追い打ちの交差切りを放つ。

しかし、動きを読んでいたガイアはニヤリと笑みを浮かべながら両の拳を前に突き出し、交差する『アイテール』と『エレボス』に一撃を見舞う。

拮抗する二人の衝突によって、爆発的な衝撃波が撒き散らされていく。

二人は人の認知領域を遥かに超えた速度をもって刀剣と拳を交えていた。

そこへウリアがSSランク炎属性魔法『黒陽』を放とうとしたところで防御魔法に綻びが生じた。

ウリアはそれに気づかず『黒陽』を放つ。

『黒陽』を察知していたゼロとガイアが光速で飛び退いた所に膨大なエネルギーが突撃した。

そして、綻びが生じていた防御魔法は決壊を始める。

それに気づいた三人は戦闘を中断した。

「これは、防御魔法の決壊！」

「まさか、この戦闘に耐えきれなくなつたのか！」

「SSランク防御魔法じゃなかったの！」

三人が困惑している間にも防御魔法の決壊は進んでいく。

我に返つた三人は急いで崩れかかった防御魔法を補強した。

このまま防御魔法が破られれば『黒陽』の炎が周囲を破壊しつくしてしまう。

それだけは何としても避けなければならない。

結局、ゼロ達の補強により防御魔法の決壊は防ぐことが出来たのだつた。

ガイアとウリアは力を使いすぎたのか、擬態魔法が解けてしまつてしまい、いつもの光竜と鳳凰の姿に戻っている。

ゼロ達が一息ついていた時、異変を察知したらしいリーガン、ミリアリア、リリーがやって来た。

「おいおい、今の何だ！？すごい音だつたぞ！！」

「あ！ゼロ君達だわ！今のまさかゼロ君達が！？」

「……一体何をやっていたの？」

三人はそう言いながらゼロ達に近づいてきた。

「ゼロ、さっきの音何だつたんだ？」

「音？」

「さっき物凄い音が聞こえてきたんだよ！まるで何かが爆発したようなさ！」

どうやら防御魔法の綻びから爆発音が洩れたようだ。

「その音を聞いて、偶々近くにいたあたし達が一番乗りしたって訳」

「SSランク防御魔法発生魔法具を見に来たの」

「で、ゼロ。一体何があつたんだ？」
「……………」

正直に話すことなど出来る筈がなかった。

SSランク防御魔法を破ったことが学院に知れば、外部にもその情報は洩れることだろう。

今はあまり目立つ訳にはいかないゼロにとってそれは何としても避けたい。

リーガン達に正直に話して、秘密を守らせる方法もあるが、ゼロはこの三人をまだ余り信用していなかった。

ゼロは人間の醜い心を誰よりも知っているから。

この三人を始末するという手もあるが、それは即刻脳内で却下する。

これ以上、無駄に人を殺したくない。

ガイアとウリアも同じ考えなのだろう、見れば首を横に振っている。

ゼロが考え込んでいる間にも騒ぎを聞きつけたのか、どんどん野次馬が集まって来ていた。

「おい、あいつってゼロ・イシュタールだろ。幻獣使いの」

「ホントだ。まさかさっきの音もゼロ・イシュタールが!？」

「ありえない話じゃないだろ。あいつはライガー伯爵家のジオ・ライガーを簡単に倒したんだぜ」

「それにしても、一体何をすればあんな音が出るのかしら？」

「あの空間魔法みたいに何か凄い固有魔法でも使ったんだろ」

「あゝ成程。それ有り得るかも」

「貴方達、道を開けなさい!生徒会です!」

そんな話をしていた野次馬を掻き分けながらセリカがやって来た。

「ゼロ君、このままでは野次馬は増える一方だわ。ここの騒ぎは何とかしておくから先に生徒会室に往ってて！」

セリカはそう言つと野次馬達にと帰るように叫びだした。

「ゼロ、ひとまず生徒会室に行くか」

「……うん、そうだね」

ゼロはセリカの言うことに従いその場を後にするのだった。

第10話　鍛錬（後書き）

何か至らぬところがありましたらどんどん教えてください。
後、評価・感想をよろしくお願いします！

第11話　懇願

ゼロは生徒会室でセリカと向き合うように座っていた。

ガイアとウリアはゼロの両肩に陣取っている。

他にもリーガン、ミリアリア、リリー、リーナ、ダリア、アンが同席していた。

皆、ゼロ達に疑問の視線をぶつけていた。

第一アリーナで一体何があったのか？と。

そんな皆の疑問を代表してセリカが訊いた。

「ゼロ君、要件は分かっていると思うけど改めて訊くわ。第一アリーナで何があったの？」

「……………」

「答えたくないことなら強要はしないわ。でも、これから生徒会の仲間として付き合っていくんだから、出来ればお互い隠し事は無くしていきたいと私個人としては考えているの」

「皆さんはそれを聞いてどうしようというんです？」

セリカは一瞬も迷わずに答えた。

「どうもしないわ。只、私達は真実が知りたいだけよ。他意はないわ」

ゼロは到底その言葉を信用することが出来なかった。

「何を証拠に信用しろと？」

「証拠なんてない。これは単なるお願いだもの。ゼロ君が何をそんなに警戒してるか知らないけど、ここで話したことは決して口外しないことを誓います」

セリカの言葉を他の者も肯定する。

ゼロは諦めたかのように溜息をついた。

・・・

（結局いつかは知られることと分かつてはいましたし、あの方に迷惑が掛からなければ良しとしましょう）

「……お話しても構いませんが、二つ条件があります」
「条件？」

「はい。一つ目は今から話すことは決して口外しないこと。二つ目は校外への情報漏洩の防止。この二点を厳守することです」

ゼロがこの条件を提示したのには勿論理由がある。

一つはゼロとウィズダム王家との関わりである。

そもそも、ゼロが聖アストラル学院に入学したのは強くなる為だけではなく、幻獣達の王国ストレンジのストレンジ王の推薦があったからだ。

ストレンジ王がウィズダム王に取り計らってくれたので、ゼロは人間族の王国ウィズダムでの身分を保証され、聖アストラル学院に通うことになったのだ。

ゼロが幻獣使いということ、ゼロの素性を調べる者が出てくることは分かりきっていた。

幻獣と盟約を交わせるということは、それだけ強力な魔法師だということだからである。

そして、ゼロがSSランク防御魔法を破る程の魔法師と知らればその重要度は跳ね上がる。

ゼロの事を調べる者は後を絶たなくなるだろう。

SSランク防御魔法を破ることはそれだけの価値があるのだ。

そんなことが出来るのは、世界中の最強の人物を集めた最強の組織『グリフォン』ぐらいだろう。

ゼロの素性を調べてウィズダム王家との関わりを知られたらゼロだけでなくウィズダム王家に迷惑が掛かる。

それだけは避けなければならない。

ゼロは自分の親ともいえるストレンジ王にさえ迷惑が掛からなければ良いのだが……。

という事情があり、ゼロは今回のことを他人に話したくなかったのである。

「分かりました。その二つは必ず厳守します」

ゼロはもう一度溜息をつくと話し出した。

「シユタイン会長も薄々気づいてるでしょうが、僕、ガイア、ウリアは第一アリーナで只鍛錬をしていただけです」

「……鍛錬してただけ!!」「……」

ゼロの言葉に皆が驚愕する。

「じゃあ、ゼロはガイアとウリアとの鍛錬にSSランク防御魔法が耐え切れなかったってことか!？」

「ど、どれだけレベルの高い鍛錬なの!？」

「今まで一体どこで鍛錬をしていたの!？」

リーガン、ミリアリアに加えて、いつもは無感動なリリーまでもが興奮した体で矢継ぎ早に質問してきた。

「リーガンの言う通り防御魔法自体が耐え切れなくなったみたいだね。鍛錬自体はいつもは今日程レベルの高いものはしていませんよ。いつもは自分で創った空間で外に影響が出ないように注意して鍛錬

してるから本気が出せないんですよ。」

「創った空間とは空間魔法のことですか？」

ゼロの答えに落ち着きを取り戻したらしいリーナが訊いてくる。

「ええ、その通りです。空間魔法について詳しくはお話出来ませんが……」

ゼロが説明に詰まっているとセリカが助け船を出した。

「今までの話を要約するとこんな感じかしら？今までゼロ君達の鍛錬はいつもはゼロ君が空間魔法で創った空間でしていたけど、空間魔法の維持に集中力が割かれて本気で鍛錬出来なかった。だから、今回学院のSSランク防御魔法の中で本気で鍛錬をしていたが、結局SSランク防御魔法もゼロ君達の本気には耐え切れなかったと、そういう解釈で合ってるかしら？」

「ええ、概ね合っています」

そこで不意にダリアがゼロに訊いた。

「イシユタール、今の話だとSSランク防御魔法はお前達の鍛錬に耐え切れなかったそうだが、最終的に防御魔法は破れなかったようだが、それはどういう事だ？」

ダリアの問いに少し迷った表情を見せた後、溜息混じりにゼロは答えた。

「簡単なことです。僕達が防御魔法に魔力を送り込んで補強したからです」

「何、補強だと！馬鹿な、そんな事が可能なのか！？」

ダリアがいきなりゼロに詰め寄った。

アン、ミリアリア、リリーが悲鳴を上げる。

「ダリア君落ち着いて！貴方らしくないわよ！」

「ぐう、すまん。イシュタール、許せ」

セリカの仲裁によりダリアは落ち着きを取り戻す。

だが、セリカも驚きを隠せない様子だ。

「でもゼロ君、本当なの？貴方達が防御魔法を補強したって？」

「はい。本当の事です」

「でも一体どうやって。防御魔法に限らず、他人の魔法に干渉するということはその魔法式を理解していないと不可能なことよ。それも、SSランク魔法に干渉するなんて！」

セリカの言う通り他人の魔法に干渉するにはその魔法式を理解していなければならない。

誰もが日常で使っているような簡単な魔法でも、使う個人によって魔法式は千差万別である。

よって、他人の魔法に干渉することは不可能といわれる技術の一つにもなっている。

それこそ、この世界を創造した神でもなければ不可能なことであるというのが常識だ。

しかし、その定説を目の前の少年は覆したのだという。

セリカ達の驚きも至極当然の事であった。

「その事についてもお話しすることは出来ません」

ゼロは申し訳なさそうな顔で言った。

「いえ、それは仕方ないわ。これもゼロ君達の固有魔法だというのは私達が詮索するのはルール違反よ」

正確にはゼロの固有魔法という訳ではない。

この魔法は幻乱魔法といい、限られた者にしか使いこなす事が出来ない、幻獣族に伝わる秘魔法である。

この魔法は魔法に魔力を直接流すことによって魔法を一部を乱し、そこから漏れ出た魔法式の情報を逆算する魔法である。

しかし、幻乱魔法を使用する際には、幾つもの厳しい使用条件がある。

まず対象の魔法を乱すために、その魔法を凌駕する大量の魔力を注がなければならない。

次に漏れ出た魔法式の情報を逆算するための観察眼と知識、大量の情報を処理する能力が求められる。

最後に干渉する際にまた、対象の魔法を凌駕する魔力を注がなければならない。

幻乱魔法が使いこなせれば、魔法を消去することも、補強することも、主導権を奪うことすらも可能になる。

ただし欠点としては大量の魔力を消費してしまうため、使いすぎるとすぐに魔力が枯渇してしまう。

ガイアとウリアの擬態魔法が解けてしまったのもそれが原因である。

「お心遣い、ありがとうございますシュタイン会長」

「当然の事よ。確かにゼロ君の固有魔法には私としても興味を惹かれるけど、さっきも言った通りそれはルール違反よ」

ゼロの謝辞にセリカは真面目な顔で答えた。

セリカが生徒会長としての顔以外にもこんな顔が出来るのかとゼ

口は感心した。

聖アストラル学院生徒会長は能力だけでなく、当たり前だが人柄も評価されるのだろう。

でなければ、S組生とはいえ2年生で生徒会長の地位には就けない。

ゼロは心の中で、セリカという人物に対しての評価を上向きに大きく修正した。

「なあ、ゼロ。唐突で悪いんだけどさ、お願いがあるんだ」

いきなりのリーガンの言葉によって、ゼロの思考は遮られた。

「どうしたんです、リー？」

このタイミングで自分に話しかけてくるリーガンの意図が読めず、ゼロは首を傾げた。

「その……な、俺達に魔法を教えてくれないか？」

「はい……？」

ますます、リーガンの考えが分からなくなるゼロ。

「いやだからな、俺達に魔法を教えてくれないか？」

ゼロがミリアリアとリリーに目を向けると、二人も頷いていた。

ゼロはリーガンの言葉の意味を理解した。

三人の考えとは、違った意味で。

「固有魔法はお教え出来ませんよ」

「いや、そういうんじゃないくてな、俺達は普通の魔法を教えてくれ

ないか？つて訊いてんだよ」

「普通の魔法……、ああ、そういう意味ですか」

ゼロはようやくリーガンの言う意味を察した。

つまり、三人はゼロに自分達を鍛えて欲しいというのだ。

恐らく、ゼロの魔法技能が自分達よりも圧倒的に優れていることを知ったからだろう。

しかし、ゼロには一つ不可解なことがあった。

それは

「どうして、僕なんですか？」

「そりゃあ、お前が物凄い魔法師だからだよ」

「でも、態々僕に頼むことないと思いますよ。僕達にも鍛錬がありますし……」

ゼロの言う通り、態々ゼロがリーガン達に魔法を教える事は無い。風紀委員会の直属の上司であるダリアに頼めば良いことである。

ゼロが受けたくない理由はあと二つある。

一つ目はゼロにはリーガン言う普通の基準が全く分からないというところである。

ゼロの基準を押し付けた結果、リーガン達の魔法技術を歪めてしまいかねない。

二つ目はゼロ自身と三人の才能の差である。

魔法の才能は保有魔力量と魔法演算領域だけではない。

魔法を使用する感性等も要求される。

それらの事全てにおいてゼロと三人は余りにも違いすぎるのだ。

これらの事柄が、ゼロがリーガン達三人に魔法を教えたくない理由であった。

「そこを何とか、頼む！ゼロー！」

「お願いします!!」
「お願い!!」

リーガン達はそう言いながら頭を下げてる。
その様子にゼロはどういった対応をすれば分からなかった。
そして、困惑しているゼロを見てダリアまでもが頭を下げてきた。

「自分からも頼むイシュタール!こいつらに魔法を教えてやってくれ!」

それはさらにゼロの困惑を誘う光景だった。

「……………どうして、そこまでするんですか?」

その言葉に顔を上げたダリアはこれ以上ないくらいに真剣な表情だ。

「これはこいつら個人の為だけじゃないからだ。イシュタール、そもそも何故この三人を風紀委員会に入れたと思う。」
「……………それは、クラス差別撤廃の為ですか?」

ゼロの言葉にダリアは笑みを浮かべた。

聖アストラル学院では、上位組による下位組への差別、虐めが行われている。

一種の縦社会ともいえるそれは既に慣習化しており、代々の生徒会、風紀委員会もこの腐った慣習を止めさせようとしたが、結局終わることはなかった。

そこに人が存在する限り必ず差別は存在する。
これはどうしようもなく不条理な現実だ。

ゼロは差別の事実を考慮した上で、ゼロ達が学校機関に入ることの意味を考えて口にしたのだ。

「やはりお前を生徒会に入れたのは正解だったな。その通りだイシユタール、そういうお前もそうなんだがな。生徒会にしても風紀委員会にしてもそうだが、今まではA組以上の生徒を迎えるのが慣例だった」

「……………」

「お前たちはこの学校に新たな風を巻き起こす新風だ。クラス改竄の被害者であると同時に。だからこそ自分達はお前達に目を付けたんだ」

ダリアのその言葉にセリカ、アンが頷く。

「こいつらにお前から魔法を教えて貰いたいのは、自分が教えるのでは意味がないからだ。お前が教えてこそ意味がある。だから、頼む！こいつらにお前が魔法を教えてやってくれ！！」

「ゼロ、頼む！！」

「お願いします、ゼロ君！！」

「お願いします！！」

ダリアと一緒にリーガン、ミリアリア、リリーが頭を下げてきた。だが、ゼロには一つ疑問があった。

「どうしてそこまで強くなりたいんですか？風紀委員になったからなのですか？」

「いや、それもあるがそれだけじゃない。俺達はその時、リンスレット先輩を助けたお前の強さに惚れたんだ。だから、俺達も誰かを守れる様な強さを身に着けたいんだ！」

その熱意溢れる言葉にゼロは昔の自分を少し思い出した。

・・・

・・・

特異で強力過ぎる自分の力を完全にコントロールし、自分が憧れ、尊敬するあの人に近づき、守りたいと思ってひたすらに強さを求めた日々。

だからこそ今のゼロがあるのだ。

過去の自分と三人を重ね合わせて感慨に耽るゼロ。

果たして、ゼロは決心した。

「……分かりました。微力ながら御力にならせて頂きます。その代り、必ずしも成果が出るとは限りませんよ。下手をすれば、皆さんの魔法技術を歪めてしまう可能性だってあります。それでも構いませんか？」

「

「勿論だ！例え今より弱くなる結果になっても、それはゼロに応えられなかった俺達の責任だからな」

「リーの言う通りよ。どうなったとしても私達の自己責任だから」

「悪い結果になったとしても、ゼロに非は全くない。頼んだのは私達なんだから……」

その発言にゼロは溜息をつきながら言った。

「分かりました。ですが僕が皆につける特訓の期間は一週間という条件をお願いしますね」

ゼロの言葉にリーガン、ミリアリア、リリーは真剣な表情で頷く。こうしてゼロは三人の魔法の先生になることが決定したのだった。

第11話 懇願（後書き）

何か至らぬところありましたらどんどん教えて下さい。

良ければ評価・感想をよろしくお願いします。

第12話 特訓（前書き）

先日プロローグを追加しました。

第12話　特訓

翌朝、ゼロ達の姿は第三アリーナにあった。

リーガン、ミリアリア、リリーの特訓の為である。

因みに三人の霊獣達はいない。

霊獣との連携を高める為にはまだ実力が不十分だからだ。

三人は皆一様に真剣な表情を浮かべている。

何故なら三人は早急に強くなる必要があるからだ。

一週間という制限期間もあるがそれ以外にも理由がある。

それは昨日の生徒会室でのことである。

ゼロがリーガン達の特訓を承諾した後の顛末はこうであった。

「イシユタール、三人の特訓のことだが勿論明日から始める予定か？」

「勿論です。期間を制限したのは僕ですからね。何かあるんですか？」

「来週の一部活動勧誘週間があるからだ」

「ああ、そういうことですか……」

ダリアの言葉にゼロは成程と頷ぎ、納得した。

部活動勧誘週間では、生徒間で問題で問題が少なからず生じる。

例を挙げるなら部活同士での生徒の奪い合いや、勝手な決闘などその問題は多岐に渡り、そんな生徒達を鎮めるためにはそれなりの実力が必要になってくるのは必然と言える。

だが、リーガン達にはまだそれだけの実力は無い。

「分かりました。早速明日の朝から開始したいと思います」
「そうか、助かる。お前の鍛錬時間を削る結果になってしまつがよろしく頼む！」

こうしてゼロは朝から三人の特訓に付き合うことになったのだつた。

「では早速始めたいと思います。初めに何でも良いから魔法を使つてくれないかな？」

ゼロがこの要求をしたのにはもちろん理由があつた。

それは三人の魔力操作能力の確認だ。

魔法を使うにはいくつかの手順を踏む必要がある。

魔法とは、自分の中に存在する魔法式の情報魔法演算領域に送り込みそこでその魔法式に必要な魔力を注入して現実に投射する技術の事だ。

ここで重要なのは魔法式に送り込む魔力量である。

この基本技術を完璧に習得出来ていないと、魔法式に余計な魔力を送り込むことになる。

魔法式に余分な魔力を送り込んだところで魔法の威力が変わる事は無い。

魔法式とは魔法の情報そのもので、魔法の威力は決まっているからだ。

保有魔力とは無限ではなく有限であり、魔力を使いすぎれば当然消耗もする。

よって、戦闘においては如何に少ない魔力で戦えるかが勝利の鍵を握るポイントとなってくるのである。

「ああ、了解したぜ！」

「あたしの魔法をしつかり見ててね！」

「……私の一挙手一投足を見逃さないで」

そう言う三人はリーガンを先頭に魔法を発動した。

「まず、俺からだな！」

リーガンは掌を前方に翳すとCランク土属性魔法『土弾』を発動した。

リーガンの手を基点に7つの魔法陣が生まれ、そこから7つの土の塊が飛び出す。

『土弾』はアリーナのAランク防御魔法にぶつかり一瞬で無に返った。

「こんなもんかな。どうだぜロ？」

「うん、そんな感じでお願い。注意する点は皆が終わった後にするから」

「じゃあ、次はあたしね」

ミリーは意気込みながら真上に掌を翳しBランク水属性魔法『大水弾』を発動した。

ミリーの頭上に巨大な水の塊が浮いていた。

それをアリーナに張られている防御魔法にぶつける。

するとやはり『大水弾』は一瞬で蒸発した。

「……最後は私」

リリーは前方に手を翳して一つの魔法陣を生み出し、Aランク雷属性魔法『雷撃槍』を発動した。

雷の槍は防御魔法にぶつかり、魔力と魔力でせめぎ合い防御魔法に穴を穿った後、『雷撃槍』は消滅した。

この光景を前にリーガンとミリアリアは暫く呆然としていたが、我に返るとリリーに対して素直に賞賛を送った。

聖アストラル学院ではE組からS組までを実力に応じて組み分けしているが、必ずしもO組だからといってOランクの魔法が使える訳ではない。

かといって、E・D組の生徒がE・Dランクの魔法を使いこなせない訳ではないのだ。

そもそもCランク魔法も使えないような者が聖アストラル学院に入学など出来はしないのだから……。

よって、一年生でAランク魔法が使えることは誰もが真似出来ることではなかった。

「すげーぜリリー！Aランク魔法なんて使えたんだな！」

「ホントホント！Aランク魔法って凄く制御が難しいのに！」

二人の賞賛に頬を赤らめていたリリーだったが、不意にゼロに視線を向けた。

その真意を悟ったゼロはすぐさま気持ちを言葉に出した。

「凄いねリリー。シュタイン会長がリリーの實力はA組相当って言うってたけど、まさかAランク魔法を使えるなんて思わなかったよ」

リリーはその言葉で完全に表情を綻ばせた。

普段は無表情なリリーだけに、その笑顔はとても可憐だった。

リーガンやミリアリアも笑顔を浮かべる。

三人の光景はとても微笑ましいものだった。
だが、ゼロは容赦がなかった。

「でも、雰囲気壊す様で悪いけど、早速皆の良くない点を発表するね」

ゼロの言葉で三人は一瞬で現実に引き戻された。

先程の喜びようは影を潜め、真剣な面差しを取り戻す。

「問題点は色々ありますが、皆に共通して言えることは魔力を無駄遣いしすぎです。それではすぐに魔力が枯渇してしまいます。後、個人個人の問題もあります」

ゼロの本当に容赦のない言葉に三人の顔が思いっきり引き攣った。
しかしゼロは甘やかされた環境の中では人が成長しないことを知っている。

だから三人に現在の現実を突き付けた。

「本当に容赦ねえな……」

「そこまで遠慮なく言われると……」

「凄く凹む……」

今までの明るい雰囲気が嘘の様に霧散した。
それでもゼロは続ける。

「まずリーです。リーは三人の中で一番魔力操作が下手です。リーの保有魔力量の基準を100と考えたとして、さっきの『土弾』一つに込める魔力は2程度で良かったのに、リーは6も魔力を込めていました。あれではすぐに魔力が枯渇してしまいます。これで仮にAクラス魔法を発動させたとしたら一瞬にして魔力が枯渇するでし

よう。よって、今後の課題として、リーは魔力操作を中心的に鍛える必要があります。次にミリーですが、魔力操作能力は現段階では十分だと思います。けど、魔法の並列演算がうまく出来ていません。一つの魔法式に魔力を注ぎ込むのに神経を研ぎ過ぎています。今後の課題としては複数の魔法式に同じだけの魔力を注ぎ込めるように魔法演算領域の拡張に努める必要があります。最後にリリーですが、リリーの問題は魔法操作能力ですね。魔力操作、魔法演算領域についてはリーやミリーの上を往っています。魔法操作が雑です。『雷撃槍』が防御魔法に衝突した際に力が拡散していました。あの魔法は一点集中型ですから、魔法をしっかりと操作していれば一瞬で防御魔法に穴を穿てたでしょう。リリーはその他の技術は優れているんですから、魔法操作さえマスターすれば格段に実力が上がりますね。以上が、僕の感じた三人の魔法技術の改善点と今後の課題です。

ー

リーガン、ミリアリア、リリーの三人は先程の悲嘆とは裏腹に驚きに顔を歪めていた。

普通、魔法師が魔法を発動するところを見ただけで魔法式に込められた魔力量を、魔法師の魔法演算領域内を、魔法の威力を看破することは難しいとされている。

そんなことが出来るのは魔法を極めた一部の魔法師だけだ。

ゼロの年齢でその域まで達したのは世界で数える程しかない。

確かにゼロの実力は同年代の中ではずば抜けて高いが、その域まで達しているとは考えなかったのだ。

ゼロが自分達の魔法を一目見ただけでその改善点を見抜いたことに驚いたのはその為である。

ゼロはその様子を見て少し表情を緩めてた。

「まあ、厳しいことばかり言いましたが、大体こんな感じです。最終的に皆には最低でもSランク魔法師にはなってもらう予定ですか

ら、頑張っていきましょう」

そんなゼロの言葉にまた顔を驚愕に歪める三人は見ていてとても面白かった事は秘密だ。

「ぜ、ゼロ。冗談だよな？俺達がSランク魔法師って……」

「ホ、ホントにそんな事が可能なの……？」

「信じられない……」

そんな三人にはつきりとゼロは告げた。

「嘘ではありませんよ。僕が見たところ、皆にはそれだけの素質があります。それに、目標が低いと強く成れるものも強く成れませんよ？」

その言葉にまたまた驚く三人。

皆例外なく、口を限界まで広げてその驚き様を示していた。

その表情に到頭限界を限界を迎えたのか、ガイアとウリアが声（念声）を上げて笑い出した。

《ワッハハハハ！何なんだ貴様らのその顔は！落ち込んだと思ったら、次の瞬間には口を限界まで広げて驚きを表現しおって！貴様らはそんなに顔芸が得意なのか！？》

《アッハハハハ！ホントだよ！そんなことでいちいち驚いてたら、ゼロの友達なんて続けられないよ！ゼロの凄さはまだまだこんなものじゃないんだからさ！》

ガイアとウリアの言葉でようやく放心状態から抜け出せた三人はその言葉にムツと顔をしかめる。

リーガン、ミリアリア、リリーの三人は口々に反論した。

「しょうがねえだろ！ゼロが凄すぎて驚いちゃったんだからよ！」
「それにあたし達は誰に何と言われようとゼロ君の友達よ！勝手なこと言わないで！」
「その通り！ゼロ君がどんなに凄い人でも私達は受け止めてみせる！」

暫く驚いていたガイアとウリアだったが、三人の反応に満足した様子だった。

だが、一番驚いていたのは他の誰でもない、ゼロ自身である。
それはガイアやウリアにしか伝わらない程度のもだったが、確かに満足げな表情を浮かべていた。

それを見た二匹もまた表情を緩ませる。

とても暖かな空気がその場を支配した。

それまで興奮していた三人だったが、自分の発言が恥ずかしくなったのか顔を赤らめる。

それもまた、暖かな空気を醸し出す。

暫く誰も口を開かなかったが、何かを惜しむかのようにゼロは口を開いた。

「ありがとう、皆。これからもよろしくね」

ゼロの言葉を切っ掛けにリーガン、ミリアリア、リリーも口を開く。

「ああ。さっきは小っ恥ずかしいこと言っちゃったけど、よろしくな！」

「そうよね。本当に凄く恥ずかしかったわ。けど、これからもよろしくね、ゼロ君」

「……よろしく」

こうして友情を固め合った後、ゼロによる三人の特訓が始まったのだった。

昼休み、授業を終えた後いつも通りのメンバーで食堂に向かおうとした時、ルーナがゼロを呼び止めた。

「イシユタール君、今ちよつといいかしら？」

いつもと違う真剣な声音（本人に聞かれたら確実に怒られるだろうが……）に少し嫌な予感を覚えつつもゼロは振り、ルーナの顔を見てすぐに後悔した。

「何かご用でしょうか？先生」

「ええ、今日の放課後に学院長室に来てくれないかしら？学院長先生から大事なお話があるわ。勿論、幻獣ちゃん達は外してね」

嫌な予感が的中したゼロは顔を顰める。

それに何故か二匹の呼び方が殿からちゃんになっている。

ガイアとウリアはルーナの言葉に顔を怒りを覚えたのか顔を赤く染めていた。

今にも怒りが爆発しそうな二人を視線で抑えながら、ルーナに訊いた。

「二人を外してまで僕に一体何のご用でしょうか？」

「詳しいことは学院長先生からお話があります。なので必ず来てく

ださいね」

最後に笑顔でまくし立てると、ルーナは早々と教室を出て行った。

「なあぜ口、何か俺、滅茶苦茶面倒臭そうな予感がするんだが……」

「そうよね、いつもあんなにおちやらけるルーナ先生があんな真剣な顔してるとこなんて初めて見たわ」

「……一体、学院長先生がゼ口は何の要件だろう？」

そんな不安げな友人たちにゼ口はそれを煽るような形で答えた。

「大体の想像は出来ますが……、リーの言う通り面倒臭い事になりそうですね」

そんなゼ口の嘆息と共に、昼休みは過ぎていくのだった。

第12話 特訓（後書き）

この作品を面白いと感じて下さった方は、評価、感想を宜しく願います。

第13話 会談（前書き）

前編と後編を一つにします。

エラーなどを起こした方は申し訳ございません。
少し描写を追加しております。

御時間のある時にでもお確かめ下さい。

明日の0時、最新話を投稿します。

第13話 会談

放課後、生徒会室にガイアとウリアを預けたゼロは一人学院長室に向かっていた。

こうして廊下を歩いている間にもゼロに嫉妬と好奇の視線が突き刺さる。

常に両肩に陣取っている二匹の幻獣の姿がないことが珍しいのか、いつも以上に視線を集めている。

一週間前のジオとの勝負の後、ゼロは『謎の幻獣使い』からランクアップ？して『E組の可愛い異常者』という不名誉極まりない称号が定着していた。

あのジオ・ライガーという人物はA組の中でもトップクラスの実力者だったらしく、それに圧勝して見せたことが問題だったらしい。それに加え、S組のトップに位置しているリーナと仲が良いことも問題らしく、ゼロのことを疎ましく思う生徒も現れる始末。

そして今も真正面からゼロに侮蔑と憎悪の視線が投げ掛けている集団が近づいて来ていた。

「おい、お前がゼロ・イシュタルだな」

明らかに此方を小馬鹿にした態度で接してくる男子生徒Aに不快感を覚えるゼロ。

相手はそんなゼロの様子にも気付かずに話しかけてくる。

「おいおい、マグレで勝った落ち零れが調子乗って無視してんじゃねえよ！」

何の反応も示さないゼロが気に入らなかったのか、声を荒げる男子生徒A。

「ええ、すみません。別に無視していた訳ではないんですが、僕に一体何のご用でしょうか？急いでいるので手短にお願いします」

下手に出たゼロの態度を見て気を良くしたのか、不遜な態度で応じた。

「ああ、今日は心優しい俺様が、お前に忠告しに来てやったんだ。感謝するんだな。良いか、もう金輪際リーナ様には近づくんじゃねえ！マグレでジオ・ライガーに勝ったような奴が一緒にいて良い御方じゃねえんだ！分かったか！？」

男子生徒Aに余りにも勝手過ぎる言い分にゼロは心底呆れた。

「すみませんが、それは出来ないご相談ですね。何故なら、ランカスターさんは生徒会委員で、僕もそうなんですから」

ゼロの至極真つ当な言い分に今まで黙っていた男子生徒B、C、D、Eからも野次が飛ぶ。

「お前馬鹿じゃねえのか！お前が生徒会を辞めれば済む話だろ！」
「その通りだぜ！俺達が怖い余り頭が壊れたんじゃねえか！」

「それ言えてるぜ！」
「ぎやははははっ！」

聞くに堪えない罵詈雑言にどんどんストレスが溜まる一方のゼロ。騒ぐ男子生徒B C D Eを黙らせた男子生徒Aは口元に嫌らしい笑みを浮かべた。

「そういうことだ。痛い目に合いたくなかったら、さっさと生徒会

を辞めることだな。そもそもお前みたいな落ち零れが生徒会に入れたこと自体がおかしかったんだ。A、S組の中から選ばれるのが今までの慣例だったはずなのに！」

喋っているうちに怒りを覚えたのか、また興奮してきた男子生徒A。

そのセリフに気になる点を感じたゼロは遠慮無しに突っ込んだ。

「まるで、自分なら生徒会に入れたような言い方ですね」

興奮していたところにゼロによる容赦のない指摘が入って、男子生徒Aは完全に切れた。

「てめえ、E組の落ち零れの分際でB組の俺様に意見するとは良い度胸じゃねえかよ。ここでぶっ飛ばしてやる！」

怒りに身を任せた男子生徒Aがゼロに魔法を発動しようとしたところで

「君達、そこで何をしているのかな？」

制止の声が聞こえた。

目を向けるとそこには丸帽子を深く被り、黒のスーツを着こなした若い一人の男が近づいて来ていた。

帽子から飛び出た癖のある黒髪に端正な眉、楽しそうに細められた緑の瞳からはまったく考えが読み取れない。

そんな飄々とした雰囲気とは裏腹に只者ではないと思わせる一種の風格を持っている。

ゼロの見たことのない男だった。

その男はすぐ近くまで来て立ち止まると男子生徒達に目を向けた。

「君達、見たところ二年生のようだけど、新学期早々新入生いびりかい？」

「ス、スミス先生！そんな滅相もない、こいつが道を訊いてきたから先輩として快く教えていただけです！なっ！」

先程の威勢は何処へやら、男子生徒達は明らかに怯えていた。その様子を見てスミスは口元を邪悪に歪める。

「そうかな、僕にはとてもそんな雰囲気には見えなかったけどな。イシユータル君、君が彼らに道を尋ねたというのは本当かい？」

男子生徒達に視線を向けると、ゼロに眼で（見逃してくれ！）と訴えていた。

今後の人間関係に無駄な軋轢を生みたくないゼロはその訴えを聞き入れることにする。

「はい、そちらの方の言う通りです。学院長室までの道が分からなかったので、丁度目についたそちらの方々にお訊ねしていたところですよ」

スミスはフツと口元を綻ばせると、男子生徒達を見やって言った。

「そっか、君達達悪かったね。もう行って良いよ」

楽しげなスミスの言葉で今まで硬直していた男子生徒達は一目散にその場を立ち去った。

その背中を見た後、スミスに目を向けると向こうも此方に目を向けたところだった。

視線が交錯し、スミスが口火を切った。

「ああいう口先だけの奴がいるから、魔法師の印象が悪くなるんだよね」

男の言う通り、日常生活に用いる魔法ではなく生物に危害を加える魔法を行使する魔法師は一般的に良い印象を持たれていない。

ランクの高い魔法師程、その反応は顕著になる。

「……見たところこの学院の教師の様ですが、そんな事を言っただけですか？」

「良いの良いの。ところで初めましてですね、ゼロ・イシュタール君。僕は、S組の担任兼学年主任兼生徒会顧問を務めているスミス・アミドロールです。これから顔を合わせることが多いだろうけど、宜しくね」

「はい。僕はE組のゼロ・イシュタールです。宜しくお願いします。ところで先生は何故此処に？」

ゼロはスミスの登場のタイミングの良さに疑問を感じた。
するとスミスは鋭い目で真っ直ぐ此方を見つめて告げる。

「うん、学院長室に来るのが遅いと思ってね。少し様子を見に来たら、君が連中に絡まれているところに遭遇してね。暫く様子を見てたんだ」

その言葉にゼロは驚愕した。

いくらゼロが男子生徒達に気をとられて警戒を緩めていたとはいえ、それでも気配を悟られないことはスミスが只者でないことを示していた。

その予期せぬ事態にゼロはスミスへの警戒を深めた。

「……先生、何者ですか？」

「おっと、そんなに警戒しないでくれよ。僕だってこの聖アストラル学院の教員なんだからそれなりの実力があるのは当然だろ」

飄々とした様子だが、そんなことが出来る者がこの世界にどれ位いるのか……

スミスに対する警戒心をより一層強めるゼロの内心を知ってか知らずか、零れ落ちんばかりの笑顔を浮かべたスミスが言う。

「さあ、早く学院長室に行きましょう。皆さんお待ちになってますよ」

スミスの言った「皆さん」という部分に嫌な予感を覚えながらも、その言葉を合図にゼロとスミスは学院長室に向かった。

ゼロとスミスの二人は学院長室の前に着いていた。

他の部屋とは明らかに違った豪華なドアを見て、ゼロはその美しさに心底驚いていた。

一方スミスは見慣れている様で、特に感銘を受けた様子は見られない。

「ここが学院長室ですね」。先に言っておきますけど、中にいる方々を見ても腰を抜かさないうで下さいね」

その言葉で先程の予感が間違ってたことを実感したゼロは思い切って訊いてみることにした。

「方々とは？」

すると抑えきれないとばかりに溢れ出る笑みを手で押さえている。何がそんなに可笑しいのか分からないゼロは不信感を募らせた。

「何、中に入れば分かることです。では、入りましょうか！」

そんな陽気な掛け声とともにノックも無くドアを開いた。

スミスに続いて中に足を踏み入れるとゼロは何とも言えぬ違和感を感じた。

その疑問を解消しようとした時、豪華な絨毯の上に向かい合うように並べられた来客用と思しき二つのソファアの内の一つから、一人の老人が立ち上がって此方に話しかけてきた。

短く切った白髪に垂れ下がった眉、青い瞳は年の功とも言つべき知的な色を宿しており、身に纏う白のスーツと手に持った杖に雰囲気がかとてもマッチしていた。

しかし、その逆に只者でない気配を身に纏っている。

魔法師としての実力も相当なものなのだろう。

「初めましてだね、ゼロ君。私は聖アストラル学院の学院長ガーロ・シュヴァリエだ。以後、宜しくね」

第一印象は気さくで温和な人物といった感じた。

だが、その態度の中にまた微かな違和感をゼロは覚えた。

ゼロが（何だろう？）と思っていると、部屋に居た他の二人も話しかけてきた。

「遅かったわねイシユタル君。来る途中で何かあったの？」

一人はE組担任のルーナ・キャンベルだった。
そこにはいつもの楽しげな感じはなく、何か申し訳ない事をして
いるような雰囲気だ。

ルーナの疑問にスミスが答えた。

「いえ、イシュタール君が変な生徒に絡まれていたんだよ。勿論、
僕が助けたけどね」

「そうだったの……。それは大変だったわね」

そんな会話をしているともう一人の男が話しかけてきた。

床まで着かんばかりの大きなマントを羽織り、腰に大剣を携えた
40代程の男性だった。

オールバックにした金髪に凜々しい眉、碧眼は他社を威圧するよ
うな眼光を放っている。

身に纏う魔法騎士服の上からでも鍛えられた肉体が一目で分かる。

「貴公があのだ獣使いゼロ・イシュタールか。初めまして、私は王
直属近衛騎士隊隊長のアッシュ・ヘルだ。今日は来てもらって申し
訳ないな。是非、貴公の話が聞きたかったものでな」

そう言うとアッシュはゼロに握手を求めてくる。

流石は王国の近衛騎士というべきか、見た目に違わず礼儀はしつ
かりとしている様だ。

王直属の近衛騎士の、それも隊長格が何故此处にいるのかを警戒
しつつ、礼儀に応じるゼロ。

その遣り取りが終わった後、ガロンが着席を促してきたので来
客用のソファーに腰掛ける。

ゼロの正面にアッシュ、その隣にガロン、ゼロの両隣をスミス
とルーナという配置だ。

全員が着席するとおもむろにガロンが口を開いた。

「急に呼び出したりしてすまなかったね、ゼロ君。その事に対して先ずは礼を言っておかなければならない、ありがとう」

「いえ、王様直属の近衛騎士の方がいらっしゃるのですから、何か大事なお話があるのでしよう。ですから、学院長が頭を下げる必要はありません」

ゼロの落ち着いた対応にガーロンは心の中で申し訳ない気持ちになつた。

「そう言つて貰えると助かるよ。今日は来て貰つたのはヘル殿がゼロ君に訊きたい事があるらしいんだよ」

「訊きたい事ですか？」

真剣味を帯びたアツシュの声音と表情に不穏な気配を感じ取つたゼロは警戒心を強める。

果たして、アツシュの口から出た言葉はゼロの予想通りのものだった。

「貴公は私が此処にいることに疑問を抱いている様だから先に言っておく。ゼロ・イシュタール、貴公は一体何者だ？」

「……………」

押し黙つたままのゼロに構わずにアツシュは続ける。

「私が此処にいる理由はウィズダム王直々の御命令だったからだ。ゼロ・イシュタールなる人物の正体を確かめよと」

「……………」

ゼロは黙秘を続ける。

「改めて訊ねるが、貴公は何者だ？何故、数少ない幻獣達の王であるストレンジ王と知り合いになれたのだ！？ここ数百年、現在のウイズダム王やその他の王でさえ、一度もその御姿を拝見したことはないというのに！」

此処にきて漸く、ゼロは口を開いた。

「その質問に答える義務はあるのでしょうか？」

「これは質問ではない、王命である。貴公も馬鹿ではあるまい。私が此処に送られたことの意味は理解しているだろう？」

「……キャンベル先生とアミドロール先生が同席しているのはそういう事ですか……」

そう言つて、ゼロは溜息をつく。

つまりは黙秘するのは構わないが、その場合は力ずくでも白状してもらふという意味である。

ルーナとスミスがゼロの両隣に陣取っているのは、いざという時にゼロを抑え込むため。

いくらゼロがこの世界の歴史上類を見ない幻獣使いといつても所詮は子供、王直属の近衛騎士や聖アストラル学院の教師に敵う筈がないという下心あつてのことであつた。

そこまで考えて、ガロンとルーナ、そして学院長室に入室した時の感じた違和感の正体を悟つた。

スミスはこんな状況でも笑っていたが……。

「やはり貴公は聡明だ。それならこの場で何が最善の選択かは言うまでもないね」

威厳に溢れたアッシュの言葉にゼロは冷笑を浮かべながら答えた。

「ええ、丁重にお断りさせて頂きます」
「なっ！」

ゼロの間髪いれぬ返答に、絶対に断られることはないと確信していたアツシュは驚愕し顔を赤く染めた。

ゼロの答えを自分や王家への侮辱と受け取ったのだ。

「その返答が何を意味しているのか分かっているのか！王命に逆らうということだぞ！」

「そんなに声を荒げないで下さい。そもそも、ウィズダム王もどういう見なのですか？確かにウィズダム王のおかげでこの王国での生活を保障されている身分ですが、その命令に従う義務も義理も僕には、ひいてはストレンジ王には有る筈がないでしょう？」

「何故そこでストレンジ王の名前が出てくるのだ！？」

アツシュの疑問に呆れかえった様子で答えた。

「愚問ですね。いわば僕はストレンジ王国とウィズダム王国のパイプ役です。言い換えれば、僕はストレンジ王国の使者なのです。いくら何でもこの程度の事は承知の上だと思っていましたが……」

ゼロの言葉に絶句したアツシュや他の面々（スミスはニヤニヤ顔）など目も暮れずゼロは続ける。

「僕に対する非礼は、そのままストレンジ王に対する非礼に繋がることになる」と御考え下さい。だからといって僕を特別扱いすることは僕やストレンジ王の本意ではありませんが……。ですが、そちらがその気というのなら僕達はこのままこの王国を去ります」

僕達とは言うまでもなくゼロ、ガイア、ウリアのことである。
アッシュは思わず呻き声を上げる。

今まで他種族との交流を断ってきたストレンジ王国からの使いを
このまま帰す事は、王国にとっての損失でしかない。

それにもしストレンジ王の機嫌を損ねてしまつたら、只でさえ少
ないストレンジ王国との外交が一生無くなる可能性だってある。

アッシュが頭を悩ませていると、ここにきて一つ疑問に思ったの
か、ガロンはそれを口にした。

「一ついいかね？ 幻獣族は他種族の眼を欺くための擬態魔法を有し
ていると聞いたことがあるが、ゼロ君は幻獣なのか？」

その言葉にルーナ、アッシュは驚きの表情を浮かべ、スミスはニ
ヤニヤ顔を深めた。

「いえ、僕は間違いなく人間です。これは王城へ入る際の身体検査
で既に証明されています。尤も、そのことが今回の騒動の原因の様
ですが……」

「ならば君はどうして幻獣の側にいるのかね？」

その問いに一瞬の逡巡も無く答えた。

「僕はストレンジ王に、いえ、幻獣の皆に大きな恩があります。そ
れに、幻獣はその力からプライドは高いですが、一度認めた者には
家族のように接してくれる暖かい種族なのです。ですから僕は幻獣
達と助け合ってきましたし、これからもそういう関係で在ればと思
っています」

「そうか、家族か……。成程、それなら得心も出来る」

優しく微笑みながら、ガロンは感慨深げに頷く。

それはとても素晴らしいものを見た様な、穏やかな表情だった。とそこに、急に強大な殺気を放ちだしたアツシュが立ち上がった。

「平和な雰囲気のところ大変申し訳ないが、こうなれば実力行使も仕方がない。ゼロ・イシュタル、私は陛下への忠誠の為に、どんな手段をとってでも貴公の正体を聞き出して見せる！」

そう言うアツシュは腰の大剣を抜き放ち、その切っ先をゼロの喉元に突き付けた。

「これも王様の御命令ですか？」

「否、これは私の独断であり、陛下は一切関与していない。ゼロ・イシュタル、命が惜しくばこの場で知っている事を全て話して貰おうか！」

「……………」

その場を暫しの間沈黙が支配した。

ガロンとルーナは突然の事態に呆然としており、スミスは未だにニヤニヤと笑っている。

狂ったような静寂と殺気の中で、ゼロは嘆息と共に話し始めた。

「少し昔話をしましょう。御存じの通り、この世界は創造の三神によって創り出されました。そして三神は創った世界に住まう生物を創造しました。異種族間での抗争はあったとはいえ、三神の力のよって平穏な世界が保たれていました。だが、その世界は唐突に終わりを告げます。魔族が三神を殺したからです。しかし、三神は一部の種族にある力を授けていました。それが古の盟約です。そして古の盟約によって得た力により、魔族をタルタロスという異世界に封じた。これがその昔に実際にあったという神話の顛末です」

「その程度の事は言われるまでもない。一体、何が言いたいんだ！」

「？」

当初とは違う余裕の感じられないアッシュに対してその端正な顔にまでも冷笑を浮かべながらゼロは続ける。

「ところで、何故世界最強の組織の名前が『グリフォン』というか知っていますか？」

ゼロの唐突な問いにスミスを含めたその場の全員が首を傾げる。

「答えは簡単です。当時の多民族連合軍の指揮者アレスとグリフォンという幻獣が古の盟約を交わしたからです」
「「「「なっ！！！」「」「」」

ゼロの発言にアッシュ、ガロン、ルーナ、スミス一同の顔が驚愕に染まる。

何故ならゼロの言ったことは、神話の話と大きく異なっているからだ。

神話には幻獣は一切登場しない。

幻獣は霊獣とは比較出来ない程の力を持った上位種であり、当時はまだ存在しなかったというのが常識だからだ。

もしゼロの言ったことが本当なら、神話の歴史は根底から大きく覆る事になる。

「さ、戯言も大概にしろ！命惜しさに出鱈目を言っているのだろう！嘘をつくならもう少しマシな嘘をつくことだ！」

「人に本当の事を話せと言っておきながら、自分達に都合に悪い事だとすぐに嘘だと決めつけるのですか？」

「ぐっ！」

ゼロの言う事は確かに正論だ。

現段階で嘘かどうかを確かめる術がない以上、最後までゼロの話を聞く必要がある。

「……いいだろう。続けよ」

「はい……。古の盟約とは、そもそも自分と霊獣を生涯を共にする対等なパートナーとすることを言います。ですが、アレスとグリフォンとの間に交わされた古の盟約は違います。それは魔族との戦いが終わった後、幻獣族を歴史から抹消しこれから建国される国の王がこれからも平和に手を取り合っていくというのが一つ。そしてもう一つは、その古の盟約が守られていれば、幻獣族はこれからも力を貸していくというものです。しかし今日において、その古の盟約が守られていると言えるでしょうか？この部屋に召喚魔法封じの防御魔法を張った上で、暴力に頼ってでも情報を聞き出そうとする王と」

ゼロが学院長室に入室して感じた違和感は召喚魔法封じの防御魔法によるものだったのだ。

これは間違いなくガイアとウリアを召喚されることを警戒しての事だろう。

ゼロは自分に大剣を突き付けてきているアッシュを見やる。

アッシュが握っている大剣の切っ先はふるふると震え、ゼロの首の薄皮を切った。

「よ、よくも次々とそんなに嘘が吐けるものだな！その上、陛下に対する中傷まで！今の貴公の立場が分かっているのか！？」

「貴方のウィズダム王に対する忠誠心は尊敬に値しますが、そのせいで視野が狭くなっています。それに、僕の話聞いて貴方も薄々気が付いているのではないですか？現にストレンジ王はここ数百年、どの国の王にもその御姿さえも拝見させたことは無いというのに。」

貴方が言ったことですよ」

「そ、それはっ！」

先程の威勢が嘘の様に霧散する。

今のアッシュは虎に追い詰められた鼠でしかなかった。

「それに貴方は僕にその大剣を突き付けた。これがどういう意味がお分かりですか？例えこれが貴方の独断だったとしても、貴方の背後にはウィズダム王が控えているのです。結果的に、これは貴方の独断ではなくウィズダム王の命令となるのです」

「ぐっ……」

ゼロの容赦ない追い打ちにどんどん追い詰められていく。

「貴方の敬愛する君主を本当に守りたいと思うのなら、もっと物事を良く考えてから行動すべきです。政治とは、只剣を振っているだけでは務まらないのですから。この王国の重臣が貴方の様な方ばかりなのだしたら、この王国は遠からず滅びることになるでしょう」

ここにきてアッシュの我慢は限界を超えた。

「これ以上この王国を侮辱するなー！！！」

気付いた時には突き付けていた大剣を振りかざし、ゼロの首を横薙ぎに一閃しようと大剣を滑らせていた。

しまったと後悔する間も無く振るわれた大剣は既にゼロの喉元に迫っている

刹那、振るわれた大剣とアッシュの身体は床に敷かれた絨毯の上に倒れていた。

身体が異常に重い、まるで自分の体重が何倍にも重くなった様な

感じた。

（こ、これは、まさか……！）

「貴方がそんなに浅慮だったとは、とても残念です」

そう言うとゼロはソファを立ち、扉へと向う。

アッシュは床に倒れながらも必死に叫んだ。

「待て、ゼロ・イシュタール……！この魔法は闇属性魔法か！？貴公は闇の魔法属性の持ち主だというのはか……！？」

ゼロはアッシュに背を向けたまま告げた。

「その質問に答える義務は僕にはありません。貴方は少し自分で考えることを覚えるべきですね」

それだけを告げると、ゼロは作法に則って学院長室を出て行く。
後に残されたのは予想外の事態の連続に困惑する三人だけだった。

第13話 会談（後書き）

この作品を面白いと感じて下さった方は評価・ご感想を宜しく願います。

第14話 部活動勧誘週間（前書き）

皆さんのおかげでお気に入り登録件数が1200件を突破しました。
これも全て読者の皆様のおかげです。
今後とも『混沌の魔法師』を宜しく願います。

第14話 部活動勧誘週間

5月1日当日聖アストラル学院の部活動勧誘週間の日である。

リーガン、ミリアリア、リリーの特訓もゼロの予想以上に順調に進み、今では上位のAランク魔法師のレベルに達している。

強くなりたいという素直な情念から、ゼロのアドバイスをどんどん受け入れ、ゼロ自身も驚くほどのスピードで実力を身に付けていた。

ゼロに教えられる最低限の事をマスターして、後はもう自分で精進していくしかないという事になり、ゼロの指定した期間内に三人の特訓は無事終了する。

その三人は今、風紀委員室でダリアの話を真剣な表情で聞いている。

「いいか、何度も言う様だがお前達はまだE組に所属している。そんなお前達の事を面白く思わない連中が必ず存在する。只でさえ風紀委員は一般生徒に敵視されている面があるからな。過激な連中なら、見回りの最中に魔法で妨害などをしてくる者も出て来るだろう。強くなったからと油断せずにしっかりと取り締まる様に」

「はい！……！」

三人が気合の入った返事を返すと同時に風紀委員会議はお開きとなった。

因みに現在の風紀委員会の総員はこの四名のみだ。

他の委員はリーガン、ミリアリア、リリーを風紀委員会に入れることに反対して退会してしまったからである。

役員募集の呼び掛けは当然しているが、今のところ志願者はいない。

故に今年の部活動勧誘週間は聖アストラル学院の歴史上、最も大

変な時といえた。

今回の風紀委員会の主な仕事は、学院の見回りと校則を冒した生徒の取り締まりである。

見回りは二人一組で行われ、リーガンとミリアリア、ダリアとリーの組み合わせだ。

リーガン、ミリアリア組が屋外を、ダリア、リリー組が屋内を見回ることになった。

こうなると本部である風紀委員室が空っぽになってしまいが、そこは生徒会からの人材派遣で補うことになった。

そして、風紀委員会にはアンが派遣され、その場で待機することになった。

その間、生徒会は何をしていたのかというと

「アンには悪いことしたわね」

「そうですね。僕が変わってもよかったんですが……」

生徒会長専用の椅子で大きな伸びをしていたセリカはゼロの発言にとんでもない！と言うように反発した。

「それはいけないわ！今回の一番の功労者はゼロ君なのよ！それにゼロ君は学校行事は一度も経験がないって言うじゃない。この機会に楽しまなきゃ人生の半分は損するわよ！」

その言葉にリーナも同意する。

「そうですね。人生の半分うんぬんは兎も角、経験して損はしないと思いますよ」

「はあ……」

そういうことが未経験なゼロは言われたまま頷くしか出来ない。

そんなゼロを余所に、同じく学校行事が未経験な筈のパートナー達も珍しく同意する。

《その通りだぞ、ゼロ。我らが此処にいる理由の一つは社会見学も兼ねているのだ。こういう事に参加して人生経験を積むのも悪くないと我は考えている》

・・・

《そうだよ！僕達は皆の代表でもあるんだから、思い出話の一つや二つ作っても良いと思うよ。下等な連中が主催してるってのが汚点だけど……》

「ウリア、そんな事言っちゃだめだよ。でも、そうだね。皆、外の事を知りたがってたもんね。それじゃあ、出来るだけいっぱい思い出を作ろうか！」

《うむ！》

《思いつき楽しんで行こー！》

という風に生徒会室でくつろいでいた。

元々各部活の予算配分などの大量の仕事は既に片付いている。生徒会としてははつきり言って当日は暇なのだ。

しかし、部活動勧誘週間が終わると共に、今度は校内実力模擬トーナメントの準備で忙しくなる。

この時間はいわば憩いの時間なのである。

「ところでゼロ君と一緒に回る相手とかいるの？」

「いえ、ガイアとウリアの三人で回る予定です」

「ふーん、成程ね……」

そう言って楽しげな笑みを浮かべて、何かを思案するセリ力。

その笑みにとても嫌な予感をゼロは覚えた。

セリ力が笑みを浮かべて何かを考える時は、大抵嫌な予感が的中

するからである。

嫌な予感を覚えたのはゼロ一人ではなかったらしく、リーナは先手を打った。

「セリカ会長、私はクラスの友達と一緒に回る事になってますのでお先に失礼します」

「あらそう。残念だね。ここにいるメンバー全員で楽しもうと思っていたのに……」

そう言つと子供の様に頬を膨らませて見せるセリカ。

しかし、何故かその瞳は悪戯が成功した子供の様に輝いている。

ゼロは額を一筋の汗が流れ落ちるのを感じた。

「それでは、失礼致します。皆さんで存分に楽しんで来て下さいね」

そして、生徒会室の扉で御手本の様な綺麗な所作で一礼して退室した。

しかし、ゼロは見た。

頭を下げたリーナの口元が薄く笑っていたのを。

「それでは、私達も行きましょうか。のんびりしていると勧誘週間が終わっちゃうわ!」

「まだ、始まつてすらいませんが……」

セリカは勢い良く立ち上がるとゼロの言葉を無視した上に、強引に手を掴んで引っ張った。

いきなり立たされた事でバランスを崩しそうになったゼロは当然抗議の声を上げる。

「な、何をするんですか!？」

「何って、決まってるじゃない。早くに行って、一番乗りで楽しむのよ！」

《ゼロよ、もう諦めてしまえ。この娘の勢いは我にもどうしようも出来ん……》

《何言ってるんだよ、ガイア！僕はセリカちゃんをとつても気に入っちゃたよ。こんなに勢いのある奴はストレンジ王国にもいなかった！ゼロも折角なんだから楽しんでいこうよ！》

ガイアには同情され、ウリアには急かされ、セリカに引っ張られながら、一同は生徒会室を後にした。

聖アストラル学院の部活動とは全て魔法に関するものである。

特に魔法戦闘の面には学院側も力を注いでおり、大会において優秀な成績を収めれば将来の道はかなり約束されるといえる。

それも成績を収めた本人だけでなく、その部のメンバーにおいてもそれは将来にとつての大きなステータスとなるのである。

よって、魔法戦闘系の部員捕獲争いは毎年苛烈を極める。特に上位組生徒になればなる程それは顕著になる。

それは一種のお祭り状態で、新入生の興味を引くために様々な催しが行われていた。

聖アストラル学院のとつともなく広い訓練場で行われている部活動勧誘は一種の混沌とした状況と化している。

各部活ごとに大きな声を張り上げて新入生に呼び掛けているが、何処の誰が発した声なのか全く認知出来ない。

そんな生徒達が溢れかえった喧騒の中をリーガンとミリアリアは歩いていた。

左腕に付けている風紀委員の腕章のせいか無駄に注目を集めている。

それを見て二人の事を知らない生徒は何か問題を起こしていないかと顔を青褪めさせ、知っている生徒は嘲笑を浮かべている。

無数の恐怖と嘲りの視線を感じながらリーガンは呟いた。

「何か滅茶苦茶鬱陶しいな、どうにかならないのかねこの視線……」

「しょうがないわよ。ダリアさんも言ってたでしょ、風紀委員は何かと目の敵にされてるって」

「それにしてもこの敵意と侮辱の入り混じった視線の山は、感じてて気が遠くなりそうだ」

「同感。ゼロ君はいつもこれ以上の視線を集めてるっていうから驚きよね」

生徒会と風紀委員の在校生組と新入生組は一部を除いて名前呼び合う程に親しくなっていた。

セリカが「仲間なんだから名前で呼び合うのは当然の事よ!」と、強く主張した為である。

.....

そんな新入生二人が会話していると、歩いている足元の地面が突然盛り上がり、そこから土で造られた手が襲い掛かってきた。

それを事前に察知していたリーガンとミリアリアは身体強化魔法を発動、強化した脚力をもってその場から瞬時に離脱した。

発信源の魔力を辿っていくと、訓練場の端に一人の男子生徒が地面に手を付けた状態で顔を忌々しく顰めているところだった。

リーガンは即座にBランク土属性魔法『土牢』を発動して、男子生徒を捕縛する。

男子生徒の周囲の地面が盛り上がりドーム状の土の牢屋が形成され、男子生徒を覆い隠してしまう。

強化された土で構成されている土の牢屋は、隙間がないため中の様子を窺い知る事は出来ない。

だが恐らくは、噛み切らんばかりに唇を噛み締めている事だろう。突然の事態に周囲の生徒は驚いていたが、二人が近づいて行くと共に騒ぎも静まっていった。

リーガンが『土牢』を解除すると中に閉じ込められていた男子生徒が土の槍を手に襲い掛かって来た。

恐らくは魔法で出来ているであろう土の槍を上体を逸らす事で容易に躲しながら、足を突き出し男子生徒の足を引っ掛ける。

勢いの付いていた男子生徒はその勢いのまま横転したが、すぐに受け身をとって此方に向き直ってきた。

躲されるとは全く予想していなかったのか、その顔を驚愕に歪んでいる。

リーガンは無言のまま男子生徒が使ったのと同じCランク土属性『土槍』を発動させる。

リーガンの手を基点に魔法式が生まれ、先端を尖らせただけの土の槍が現れた。

すると、男子生徒も土の槍を手自体勢を立て直す。

真正面から対峙する両者の勝敗は一瞬で決した。

男子生徒の突きに対して此方も突きを繰り出す。

突き出された両者の土の槍は衝突し、お互いの存在を無に返した。そのことに怯んだ男子生徒の隙を見逃さず、鳩尾に拳を見舞う。

男子生徒の意識はそのまま闇の底に沈むのだった。

「ふう、まさか本当にこんな奴が出て来るとはな……。ダリアさんの言っただけだぜ」

リーガンが一息ついているとミリアリアが防御魔法の張られた手錠を男子生徒に掛けながら言った。

「まあ、良いじゃない。誰も怪我しなかったんだから」

「まあ、そりゃあそうだろうけどよ」

倒れている男子生徒と周囲の大量の野次馬に目を向け、溜息を一つ。

「そんな辛気臭い顔してないで、早くこいつを風紀委員室のアンさんの所に連行するわよ」

「何か、俺達警察みたいだな」

「学院の警察っていう意味じゃ似た様なもんでしょ。ほら、男なんだからアンタがこいつを運びなさいよ！」

「へーへー。分かりましたよ」

二人はそんな会話を交しながら周囲の視線を無視してその場を後にしようとしたその時、今まで感じた事がない程の尋常ではない量と質の魔力が迸ったのを感じた。

時間は少し遡る。

相も変わらず人の眼を集めながら歩くゼロは、精神上かなり疲れきていた。

これ程までに疲れたのはウィズダム王国に来て以来初めての事だ。ウィズダム王と謁見した時も、ここまで疲れた記憶はない。

そんなゼロには目も暮れず、人垣の向こうで生徒達の視線を一身に集めながら、元気に此方に手を振っているセリカと空中で羽根を羽ばたかせているウリアがいた。

「ゼロ君、遅いわよ！何時までもそんなところにいると置いて行っちゃうわよ！」

《そうだよ！そんなにのんびりしていると日が暮れちゃうよ！ガイアもいつもの勢いは何処に行っちゃたの！》

その声を聞き流しながらゼロは呆然と呟いた。

「……さつきからずっとあの調子だけど、あの元気の源は何処にあるのかな？」

《同感だ。いい加減付き合わされる此方の事も考えて欲しいものだが……》

「それはしょうがないよ。あの二人には自覚というものが全く無いんだから……」

そう言つて、本日何度目になるか分からない溜息をつきながら、これまでの事を思い出す。

生徒会室を出た後、結局何もする事が無く何故かハイテンションなセリカに連れられてその辺をぶらぶらした。

部活動勧誘週間が始まってからはさらにその勢いに拍車が掛かり、初めての事に興奮した上にセリカと見事に意気投合したウリアに振り回された。

いつもはストップをかけるガイアは既に無駄だという事を悟っている様で、只只ゼロに同情するばかりで一向に止め様とする素振りを見せない。

よって、一人と一匹の勢い（暴走？）を止めてくれる者は全くいなかった。

ゼロとガイアに出来る事は、セリカとウリアという嵐が収まるのを待つ事だけだ。

「ほら、いつまでもボーッと突っ立ってないで、今度はあそこに行きましょう！」

と、気づいた時には何時の間にか近寄って来ていたセリカに手を掴まれていた。

セリカがゼロの手を掴んだ瞬間、周囲の生徒の殺気の籠った視線が突き刺さるが当人は全く気が付かない。

《ガイアも何やってんだよ！？ゼロをサポートするのも僕らの大事な役目だろ！それなのにガイアときたら……、そんなだからプリマに振り向いて貰えないんだよ！！》

ガーン……！！

誰もが一目で分かる程に表情が強張った後、ガイアは凄まじい勢いで落ち込んだ。

今の今まで周りが一切見えてなかったセリカや溜息をつく程に疲れていたゼロがびっくりして我に返る程の落ち込み様だ。

だが、そんなガイアに全く気付かないウリアは日頃の鬱憤を晴らす様に毒を吐き続ける。

《大体ね、ガイアは何時も僕がゼロにお置き食らってる時にそれを促すような事言うけど、ホントはガイアだってその対象なんじゃないの！？ガイアの言う事聞いてるとさ、何時も何時も僕だけが悪いように聞こえるけどガイアだって本当は僕と大差ない筈だよな？

ゼロの注意受ける時はガイアだって僕と同じような事ばかり言ってるし、ゼロのお仕置きを受ける原因になる問題行動を起こしちゃう時だってガイアも僕と同じ行動起こしてるよね？ストレンジにいた頃だって怒られるのは僕だけでガイアはいつも責任逃れしちゃうんだ！そつだよ、思い出したらさらに腹が立ってきちゃった。ねえガイア、この際だからはっきりさせようよ！どちらがストレンジで一番の問題児かを！！」

ウリアの念話（怒声）で、さらに注目を浴びる一向。

ゼロは古の盟約を交わした相手としか念話を行えない霊獣の念話が羨ましく思えてきた。

そろそろ止めて欲しいと思うのだが、ウリアの怒りには少なからずゼロの行動も含まれている事から止める事が出来ないのだった。

ゼロのそんな思いとは裏腹に、ウリアの毒舌はますますヒートアップしていく。

《これは僕の胸の内に仕舞い込んで墓まで持って行くつもりだったけどやっぱりやめた！ねえガイア、ガイアがストレンジの女の子達にどういふ評価されてるか知ってる？》

数秒前の怒気溢れる態度とは一変、急に人をからかう様な雰囲気を出す。

《わ、私の評価がどうだというのだ？》

それは何時もの自身に溢れたものではなく、今にも壊れてしまいそうな儂げな声だ。

ガイアの普段見せない態度に気を良くしたのか、ウリアは満面の笑みを浮かべながら朗々と語り始めた。

《ガイアはね、ストレンジーの堅物問題児って呼ばれてるんだよ。何たって一日中僕と一緒にいる上に、ガイアの性格を考えれば当然の呼称さ！こんな呼称が定着してるから皆にモテないのも無理ないよね！ガイアってば、黙ってればカッコいいのに、残念だね！》

ウリアの言葉に今までゼロの右肩の上で身体をプルプルと震わせていたガイアは

《黙って聞いていれば、殆どが貴様のせいではないか！！！》

蓄えていた怒りを爆発させた。

同時に、その身体から尋常ではない量と質の魔力が迸った。

その魔力に耐え切れなかった生徒が何人も倒れる。

ゼロは咄嗟に光魔法属性のSランク防御魔法『光層膜』を周囲に張り巡らした。

周囲の生徒を追い出す様に幾重にも輝く防御魔法が張られる。

《なんだい、殺ろうつてのか！望むところだ！どちらが強いが、白黒はつきり着けてやる！！！》

そして、ウリアもガイアに負けない程の量と質の魔力を放出した。二つの魔力は互いにせめぎ合い、物理的な暴力となって吹き荒れる。

ゼロが張った防御魔法が無ければ、もっと被害が拡大していただろう。

さすがにこれを放って置く程、ゼロは無責任ではない。

ゼロが二匹を止めるための魔法を発動させようとしたところで、人垣を掻き分けて乱入者がやって来た。

屋外の見回りをしていた風紀委員のリーガンとミリアリアである。

「道を開ける風紀委員だ！一体何があつたんだ……って、やっぱりガイアとウリアかよ！！」

「ゼロ君、セリカさん、どうしてこんな事になつてるんですか！？」

ゼロとセリカはその問いに答える事が出来ない。

ゼロは少なくともウリアの怒りの遠因になっているし、セリカは行き成りの事に混乱していてまだ状況を理解出来ていなかったからだ。

リーガンとミリアリアが二人を問い詰めている間にもガイアとウリアの身体からは相当な量の魔力が放出されている。

それはゼロの張ったSランク防御魔法を破ろうとする程の勢いだ。今張っている防御魔法が破られてもまた張り直す事も出来るが、それでは何の解決にもならない。

よってゼロは、緊急手段を決行した。

突如、3メートル程上空に人が一人が入る程の小さな穴が開いた。その穴の奥には全ての色彩感覚を狂わせる様な白が広がっている。そして、その穴が現れると同時に空中で大量の魔力を撒き散らしながら睨み合っていたガイアとウリアは穴の中に吸い込まれて行く。ガイアとウリアは驚愕し、この後の行動について考えた。

・

本気で抵抗すればこの程度の重力にも対抗出来るが、それをすれば後でどんな仕打ちが待ち受けているか見当もつかないという見解に至る。

よって、今出来る最大限の抵抗を試みた。

《ま、待つてくれゼロ！強硬手段に出るよりも、まずは話し合いから始めよう！》

《そつだよゼロ！！今すぐ仲直りするからそれだけは勘弁してよ！！》

その言葉に当人は只普段からは考えられない程の満面の笑みを浮かべるだけだ。

それを見た二匹は絶叫しながら穴の奥深くへと消えて行った。

その見る者が見れば分かる世にも恐ろしい光景を目の辺りにしたセリカは恐る恐る訊ねた。

「ねえゼロ君、あの穴は一体何処に繋がってるの……？」

その問いにゼロは満面の笑みを浮かべたまま

「そうですね、あの穴の向こう自体は僕が空間魔法で創った世界です。尤も、あの二人にとってはそうではないかも知れませんね。」

と言った。

その言葉に質問したセリカの額から頬を伝って一筋の雫が流れ落ちた。

「リー、ミリー、身内が迷惑を掛けてすいませんでした。あの二人には良く言って聞かせておきますから、後の事は宜しくお願いね」

そう言つと、ゼロは上空に空いた穴に吸い込まれて行った。

ゼロが空間魔法で創ったという世界へ続く穴は徐々に狭まってきた、最終的に完全に閉ざされた。

後に残されたのはこの後二匹に起こるであろう恐ろしい事態に心の中で合掌する者と、初めて見る異様な光景に固まる者だけだった。

第14話〈部活動勧誘週間〉（後書き）

『混沌の魔法師』を面白いと感じて下さいましたら、是非とも評価・感想をお願いします。

誤字・脱字や文章に対するご指摘なども見つけ次第ご報告下されば幸いです。

第15話〽白と黒〽【前編】（前書き）

一週間更新という気長な更新速度に付き合わせてしまって申し訳ありません。

今回は前編と後編に分けたいと思います。

第16話〽白と黒〽後編は明日更新予定です。

第15話　白と黒　【前編】

部活動勧誘週間が無事終了した後、生徒会と風紀員メンバー（一名を除く）は生徒会室に集まって今日一日の事を報告し合っていた。

「それじゃあ、今日は例の件とリー君、ミリーちゃん襲撃事件以外は、特に問題は発生しなかったのね」

「はい。風紀員室で待機していた私の所に来たのは襲撃者と毎年通り部活間で問題を起こした生徒だけでした。凄かったですよ、リー君が取り押さえた生徒はB組の実力者だったんですよ！それをいとも簡単に取り押さえたって言うじゃないですか！これも、ゼロ君とリー君の努力の賜物ですよ！……でも、例の件は……」

例の件。

言うまでもなく、ゼロの幻獣二匹が起こした騒動である。

幸いにもガイアとウリアの魔力に当てられた生徒は只氣絶しただけで、特に後遺症などは残らないとのことだった。

尤も、その幻獣二匹を回収して何処かに消えてしまったゼロは未だに姿を見せないのだが……。

「ガイア君とウリア君、大丈夫かしら……」

この一カ月であの一人と二匹の関係をある程度把握しているセリカが呟いた。

最後に見せたゼロの笑顔が気掛かりでならない。

「確かに、ゼロのあの笑みは見た瞬間ゾツとしたな……」

「あれは完全に怒ってたわね……」

リーガン、ミリアリアの二人も思い出したのか微かに身体を震わせていた。

しかし、その光景を見ていない者達は余り理解出来ずにいた

「……そんなに怖かったのか（ですか）？」

リリー、ダリア、アン、リーナの声が見事に重なった。

だが、ゼロの笑みを思い出して恐怖している三人はそれすらも気付かない。

三人は恐怖し、残された四人が困惑していたその時生徒会室の扉が二回ノックされ、話題のゼロの声が聞こえた。

セリカは懸命に震える心と震えそうになる声を落ち着かせ、入室を促した。

セリカの許可を貰い、生徒会室に入ってきたゼロの姿にその場の全員が違和感を覚える。

何時もゼロの両肩を占領している幻獣二匹の姿が何処にも見当たらないのだ。

「イシュタールさん、ガイアさんとウリアさんはどうしたんですか？」

「いえ、ちょっと反省させる為に、空間魔法で創った世界に閉じ込めてちよつとした課題を科しているだけです、ランカスターさん」

「そ、そうですか……」

満面の笑みを浮かべて答えるゼロにリーナは自分が地雷を踏んだ事を悟った。

「一応訊いて置くけど、課題って何？」

「そうですね、それは」

一方その頃、ガイアとウリアは地獄とも言える世界にいた。
満面見渡す限りの白。

何時もの鍛錬の時のように白しか存在しない世界。

その世界が現在進行形で黒の世界に塗り替えられていた。

白はゼロの創った世界の色、黒は空間の狭間の色だ。

それは、この世界が崩壊しているという事を意味していた。

空間の狭間に飲み込まれれば、一生そこを彷徨うことになる。

分かりやすく言えば、宇宙空間を彷徨う様なものと言えば良いだろう。

余程の空間魔法の使い手でもない限り、空間の狭間を抜け出す事は不可能だ。

もし空間の狭間で力任せに魔力を行使しても、ゼロ達の住まう世界に悪影響を与えてしまう事になる上だけで、ガイアとウリアが脱出出来る訳ではない。

危機はそれだけに留まらず、空間の狭間から世にも恐ろしい姿形をした魔物の群れが流れ着いて来ていた。

・

魔物とは魔族の側について禁忌の力である魔術を体得した魔人や魔獣の総称だ。

魔物は魔神と魔族の眷属として他の種族に忌み嫌われている。

よって、魔物の掃討には3つの王国全体で取り組まれており、その魔物のランクに応じて報奨金が懸けられている程だ。

だが、魔物と生まれつきのもので、忌み嫌われるという種族に生を受けてしまった事以外には他の種族と何も変わらない。

一方、悪事を働く魔物や化物の様な強さを持った魔物も当然存在する。

そういった魔物は体内に膨大な魔力を有しており、殺してしまうと溢れ出た魔力が何らかの形で世界に悪影響を与えてしまう。

例えば、天災や不治の病など、そのバリエーションは多岐に渡る。だから、高ランクの空間魔法を使える魔法師の力を借りて次元の狭間に封印するのだ。

結果、次元の狭間には無数の強力な魔物が彷徨っているのである。空間魔法を使える魔法師が下手に次元の狭間に干渉すると、そういった強力な魔物を世に解き放してしまう可能性があるのだ。

そして、今回はゼロの創った世界に解き放たれたのである。勿論、空間魔法で創られた世界が崩壊を始めたのはゼロの仕業であるが……。

ゼロの出した課題とは、お互いに協力して、ゼロが戻ってくるまで空間の狭間に飲み込まれない事と、空間の狭間に漂っている魔物達から無事に生き延びる事。

幸いにもこの世界はとても広く、四方10キロメートルはある、SSランク空間魔法だ。

とはいえども、逃げ道は有限ではない。

・

確かに、今のガイアとウリアでは互いに協力しない限り達成出来る課題ではなかった。

しかし、ガイアとウリアは只今絶賛敵対中の状態にある。

ガイアとウリアは何となく互いに顔を向け合い、眼が合うと同時に一瞬で逸らした。

《誰がこんな身勝手な奴と協力などするものか！》

《それはこっちのセリフだよ！この程度の事、一人で何とでもなるさ！》

そう言って、二匹は不気味な笑みを浮かべる魔物の群れに殺気を放った。

ゼロの報告を聞き終えた一同は共通して頬を引き攣らせていた。暫くの間、生徒会室は静寂が支配した。

一秒が一時間にも感じられる様な時が流れ、一番に口を開いたのは意外な事にリーナだった。

「それはまた、スケールの大きなお仕置きですね……」

「いえ、前に僕達が住んでいた所ではもっと酷い罰も存在しましたから、僕のはお仕置きという時点でまだ軽い方ですよ」

「これ以上に酷い罰が存在するんですか!？」

最も驚いたのはアンである。

規律に厳しい彼女だからこそなのだろう。

「そうですね、例えば視覚も聴覚も触感も嗅覚も味覚も全てを封じられた空間で一週間過ごす罰などがそうです。尤もこれは余程の罪を冒した者にしか与えられません……」

言いくるそうにするゼロの態度から、これは立ち入ってはいいけない領域だと自覚する一同。

だがそこで、ふと気付いた様にリーガンが突っ込んだ。

「なあゼロ。こんな事言うのあれなんだけどさ、結局ガイアとウリアの罰はかなり重いつてことだよな。どうしてそんな思い罰を科したりなんかしたんだ？」

「何時もの様な軽い罰ではあの二人は改心しないから。喧嘩をする

なとは言わないけど、せめて時と場所を選ぶくらいの常識は身に着けて欲しいと思っっているんですよ」

「成程な……、つまりゼロはあの二人を信じてるんだな？」

リーガンの鋭い指摘にゼロは薄く微笑んだ。

一方、ゼロの思いを一瞬で汲み取ったリーガンには驚きの視線が向けられていた。

「珍しいわね、あんたがそんなに鋭いなんて……。今日は雨でも降るんじゃない？」

「雨どころか雷まで落ちてくる予感がする……」

ミリアリア、リリーの失礼過ぎる感想に、リーガンの額に青筋が立った。

だが、それだけで、まだ怒りのコントロールが出来ている状態だ。

「お、お前ら、普段から俺の事をどういう風に見てたんだ？」

リーガンの殺気だった問いに、ミリアリアとリリーは即答した。

「直情的な馬鹿かしら？」

「同じく……」

その言葉にリーガンの怒りが爆発した。

「いいだろう。ガイアとウリアじゃないが、白黒はつきりつけてやる！俺は、お前達に勝負を申し込む！」

こうして、リーガンVSミリアリア、・リリーという構図が出来上がったのだった。

魔物は神話の世界で魔族に取り込まれる事によって生まれた。

現存する魔物の大多数は、その種族の子孫、そして、後天的に魔物に転生する者は本当に極少数だ。

そういった者は魔神と魔族と眷属である魔物にしか扱えない魔術を体得するために魔物へと転生する。

魔物に転生する為には魔族、又は魔物によって『魔神の刻印』という魔神との繋がりを示す印をを身体の何処かに刻まなければならない。

この手順を踏む事で、初めて魔術が使用可能になるのだ。

.....

だが、魔法と魔術の根本は何も変わらない。

.....

この二つを明確に分ける要因は、魔法式内の情報に記されている魔法の威力を制御するためのリミッターだ。

このリミッターは、言い換えると魔力の規定量の事で、この規定量を超える魔力を魔法式に注入しても魔法の威力は変わらない様に出来ている。

その利点は魔法のランクを明確に区別出来る事だ。

.....

リミッターが無ければ魔法式に魔力を注入した分だけ魔法の威力が増す事になる。

神話の世界では、まだ魔法が世界に普及し始めた頃、魔法の制御不能による事故が多発した。

創造の三神はこの事態を、魔法式にリミッターを組み込む事で対処した。

よって、この世界（空間魔法で創られた世界も含む）で創られた魔法の魔法式には自動的にリミッターが組み込まれるように定めたのだ。

そして現在の魔法は、魔法式の情報が増える程、魔法式の文様が複雑になる程にそのランクが増す様になった。

一方魔術とは、『魔神の刻印』を通じて、魔神の魔力を体内に取り込む事で、魔法式の情報内にあるリミッターを外した魔法である。だから、根本的には魔法と何ら変わりはない。むしろ、魔法をリセットしたともいえるのだ。

だからその利点は、例えばある魔術師（魔術を扱う者は魔術師と形容する）が、Cランク魔術しか使えなくとも、魔力の注入量によつてはAランク魔術に匹敵する威力を出せる事にある。

これまでの事を要約すれば、リミッターを掛ける事によつて魔法師の才能、又は努力によつてその威力が左右されるものが魔法、魔力を注入すればする程に威力が上がる代わりに、制御不能になる危険性が発生するものが魔術ということになる。

そして今、無数の魔術がガイアとウリアの眼前に迫つて来ていた。見た目はCランク炎属性魔術『炎弾』だが、そこからはAランク相当の魔力を感じる。

尤も、現在の実力を魔法師の基準に照らし合わせるなら、SSランク魔法師のレベルである二匹にとって、この程度の魔術に対処する事は兎戯にも等しい。

ガイアは咆哮に乗せて、ウリアは翼を羽ばたかせて、大量の魔力を放出した。

二つの膨大な魔力は互いにせめぎ合いながら、無数の『炎弾』を吹き飛ばしていく。

そして、全ての魔術が吹き飛ばされた後、目の前にいる魔物のリ
ーダー格らしき魔人と妖魔の二人を睨みつけた。

魔族や魔物は全体の色が黒いが、この二人もその例外ではない。

一人はスポーツ刈りにした黒髪に勝気に吊り上った眉、淀んだ紅
の瞳は警戒の色を宿している。

もう一人は黒みがかった緑のセミロングの髪に垂れた眉、濁った
橙色の瞳は餓えた獣を思わせる。

前者が魔人、後者が妖魔だ。

全体的にガリガリで、栄養不足が窺える。

だが、その身体から溢れ出る魔力の質は後ろに従える魔物の比で
はない。

「成程、これは中々の猛者と見える……」

「ヒヤハハハハハッ！こんな上質な魔力は生まれて初めてだぜ！
笑いと涎が止まらねえ！」

魔人は強者に巡り会えた喜びに笑みを浮かべ、妖魔は二匹の上質
な魔力に涎を流しながら下卑た笑みを浮かべていた。

ガイアとウリアは妖魔の表情に嫌悪感を顕わにする。

「貴様、汚らしい眼でウリアは兎も角、我を見るな！虫唾が走るわ
！」

その言葉にウリアの頭から一時的に消えていた怒りがまた吹き上
がる。

「ガイア！そのウリアは兎も角ってどういう意味だよ！ふざけた事
ばかり言っているとあの屑共の前に、まず先にお前を灰にするぞ！」

「良いだろう！やれるものならやってみるが良い！」

「臨むところだ！」

自分達を完全に無視していきなり喧嘩を始める二人に呆れる魔物達。

それを率いる魔人と妖魔も戦うタイミングを完全に失っている。

「喧嘩する程仲が良いというが、それはお前達の事だったのだな…」

…」

「ヒヤハハハハッ！実物なんて初めて見たぜ！」

一人は感慨にふけ、一人は呆れを通り越して爆笑している。

その様子が気に入らなかったのか、喧嘩の真っ最中だったガイアとウリアが魔物達を睨みつけながら

《《誰がこいつなんかと仲が良いだつて！？下等な元人間と元妖精風情がふざけるな！》》

と、息ピッタリに言った。

その様子を呆れながら見ていた魔物達は、そんな二匹を無視して襲い掛かって来た。

だが、喧嘩をしながらも警戒を怠らなかったガイアとウリアは瞬時に反応する。

身体強化魔法で身体能力を強化している魔物の群れを一瞥し、一瞬でその場を離脱する。

そして、固まっている魔物達に向かって、Sランク風属性魔法『大鎌鼬』を大きく口を広げたガイアが、Sランク炎属性魔法『陽炎』を大きく翼を振るったウリアが放つ。

二つの魔法はSランク複合魔法『大熱鎌鼬』となって、魔物の群れを熱しながら真っ二つに切り裂いていく。

次元の狭間に追い込まれた程の魔物だが、この二匹の前では只の

雑魚でしかない。

しかし、それを率いていた魔人と妖魔は違った。

自分の周囲に防御魔法を展開し、『大熱鎌鼬』をいとも簡単に防いでいる。

ガイアとウリアはその事に感心しつつも、自分達が息ピッタリだった事に対して苛立ちを感じていた。

「おい、ウリア！貴様が『陽炎』などを放つから、複合魔法『大熱鎌鼬』になってしまったではないか！」

「そっちが『大鎌鼬』を放つからいけないんだろ！責任転嫁するな！」

そんな二匹には目も暮れず、魔人と妖魔は身体強化魔法を使って襲い掛かる。

その攻撃を天空へ舞い上がって躲しながら、予想以上の手強さに舌打ちするのだった。

一方その頃、生徒会室では、リーガンVSミリアリア、リリーの勝負内容が決定しようとしていた。

「じゃあ、勝負内容はもうこれで良いわね」

「そうだな。こんな不毛な争いは金輪際あつて欲しくないものだ」
「ですが、発生してしまったものはしょうがありませんから、さつさと片を付けてしまふのが良いでしょうね」

セリカ、ダリア、アンはさも面倒くさそうな調子で話し合ってい

た。

因みにゼロとリーナは完全に傍観者の姿勢で、何も口出しする意思はないらしい。

「リーガン君、ミリアリアちゃん、リリーちゃん、勝負内容が決定したわよ！」

セリカの言葉に、今まで睨み合っていた三人は素早く反応する。

「はっ、どんな勝負だろうと必ず勝ってみせますよ！」

「それはこっちのセリフよ！あんたに負けるのだけはプライドが許さないわ」

リーガンとミリアリアが言い合っていると、リリーが一つの提案をした。

「……負けたら罰ゲームっていうのはどう？」

「罰ゲーム！？」「」

二人の声が重なる。

その事に顔を見合わせた途端に顔を背ける。

そんな二人を見つめながら淡々と語った。

「そう罰ゲーム。定番だけど、勝った方が負けた方に一つだけ何でも言う事を聞かせられる」

「「それだ！！」「」

またしても言葉が重なるが、そんな事には気付かない程に二人は興奮していた。

「「そうと決まったら話は早い（わ）。早速勝負内容の説明をお願いします、セリカさん！」」

まったく同時に同じ事を訊いてくる事に、本当にこの二人は仲が良かったなあ……と、若干の戸惑いを覚えながらも、セリカは口を開いた。

「え、ええ。私達が提示する勝負内容は知識勝負よ。どれだけ一般常識に優れているのかを競うという内容にしました。今回の騒動はミリーちゃんとリリーちゃんがリリー君を侮っていたのが原因だから、この勝負内容だったなら納得して貰えると考えたの……」

説明しているセリカが口籠ってしまう程に、罰ゲームが掛かった三人の剣幕は凄まじいものだった。

そんなに必死になるなら罰ゲームなんて設けなければ良いのに……と思うが、なってしまったものは仕方がないので、説明を続ける。

「ルールは簡単よ、私達が出題する問題を先に6問正解した方が勝ち。けど、これでは二対一の形になってしまつて不公平なのでリリーガン君は3問先に正解する事を勝利条件とします。宜しいですね？」
「質問なんですけど、それはあたしとリリーの正解数の合計が6になれば良いんですか？」

「その通りよ。何度も言う様だけど、そうでないと不公平でしょう」

リリーガン、ミリアリア、リリーは、セリカの言葉に納得したように頷き視線を交わした。

絶対に罰ゲームを受けて貰うという、強い意志の籠った視線を。

第15話『白と黒』【前編】（後書き）

『混沌の魔法師』を読んで頂いて真にありがとうございます。
この2週間程でたくさんのご指摘頂きました。

中には胸にグサツと突き刺さるものや、成程と納得のいったご意見
などがたくさんありました。

これからも皆さんからのご意見やご指摘をたくさん受け入れて良い
作品を書いていきたいと思えます。

これからも『混沌の魔法師』を宜しく願います。

第16話 白と黒 【後編】（前書き）

投稿が遅くなってすみません。

つい今し方書き上げたばかりなのでミスが目立つかも知れません。
見つけ次第ご報告お願いします。

第16話　白と黒　【後編】

ガイアとウリアの二匹はまったく実力を発揮出来ていなかった。

一方が攻撃に転じれば、もう一方も負けじと攻撃に転じる。

結果、両者の放った魔法は互いに相殺し合い、威力を殺し合っていた。

最初の複合魔法は完璧なマグレだった様で、それからそのような偶然もない。

一方、魔人と妖魔は互いに互いの長所と魔法属性を生かし、見事な連係プレイを見せていた。

その上、魔人と妖魔の実力はSSランク魔法師のレベルに匹敵する。

畢竟、まったく息の合わない二匹と息ピッタリの二人に差が生じるのは当然の事だった。

そして今も

《ウリア！邪魔をするな！こいつら如き、我一人でも十分だ！》

《それはこっちのセリフだよ！足手まといは引っ込んで！》

身体よりも口の方が活発に動いていた。

その間も敵の猛攻は止まらない。

自由自在に空を飛び回るガイアとウリアに向かって魔術を放ち続けている。

「どうした！？飛び回っているばかりでは何も始まらないぞ！」

「さつさと俺達の餌になっちまえよ、ヒヤハハハハッ！」

餌になるという事はそのままと死に直結する。

無論の事、そんな事態に陥る訳にはいかないので二匹は反撃に出

る事にした。

《仕方がない。ここは妥協するかなさそうだな》

《そうだけど、それであくまで一時的なものだからね！》

ガイアとウリアは憎まれ口を叩きながらも、互いに微笑みあう。それは、長年の付き合いからの、無意識が織り成す偶然だった。

《行くぞ（よ）！！》

叫ぶと同時にガイアは大きく口を、ウリアは大きく翼を広げた。そこを基点に強大な魔力が渦巻き、巨大な魔法式が生まれる。

次の瞬間、ガイアが咆哮し、ウリアが翼を羽ばたかせると同時に魔法式から魔法が生み出された。

SSランク風属性魔法『大竜巻』とSSランク炎属性『黒陽』が合わさり、SSランク複合魔法『紅蓮陣風』が魔人と妖魔に襲い掛かった。

炎を纏った巨大な竜巻は、巻き込んだものを容赦なく骨まで燃やし尽くす。

先程と違い、この魔物二人にも簡単に防げる攻撃ではなかった。

「おおっ！これこそ我が生き甲斐！全ての苦難を乗り越えてこそ、真の幸福が待っているのだ！」

「同感だ！一仕事した後の魔力はきつとうめえぞ！」

魔物二人もそう叫ぶと、『紅蓮陣風』に手をかざして、そこを基点に魔術式を展開した。

魔法式のリミッターを外した魔術式からは、禍々しい魔力が放たれている。

そして、魔人の魔術式からはSSランク水属性魔術『激流水砕』

が、妖魔の魔術式からはSSランク風属性魔術『大鎌鼬』が放たれる。

二つの魔術はSSランク融合魔術『絶対零氷』と化し、複合魔法『紅蓮陣風』と真正面から衝突した。

全てを燃やし尽くす炎の竜巻と全ての物質を消失させる絶対零度の氷塊は、その温度差から膨張した熱と冷気は辺りの空気を引き裂き、燃やし、冷やし、凄まじい爆発を巻き起こした。

世界は紅の炎に包まれ、そして

生徒会室では、バチバチと散る火花の中、リーガンVSミリリアア、リーリの知識勝負が始まろうとしていた。

その進行役を担当するセリカは、三人の醸し出すとてつもない緊張感に冷や汗を流しつつも知識勝負の火蓋を切って落とした。

「それでは、今から出す問題に手を挙げて答えて下さい。初めに言っておきますが、最初の方は基本的に簡単な問題です。数を追うことに難しくなっていくのでそのつもりでいて下さい。それでは、一問目、全ての基本魔法属性の特性を答えて下さい」

そのセリカの問いに一番早く手を挙げて反応したのは、意外な事にリーガンだった。

その事に驚きつつも回答権を与える。

リーガンは頭の中の知識を披露する様に、朗々と答え始めた。

「炎属性魔法は破壊、水属性魔法は癒し、雷属性魔法は速度、土属性魔法は構築、風属性魔法は移動、光属性魔法は浄化、闇属性魔法

は支配、これらが基本魔法属性の特性とされています」

「はい、その通りです。リー君に一ポイント！」

セリカの宣言に生徒会室に拍手の音が響いた。

ミリアリアとリリーも、音は控えめだが拍手を送っている。

その顔は面白くないものを見ている感じが……。

そんな二人に構わず、勝負は進行する。

「それでは二問目、基本魔法属性の中で最も使い手の数が少ないのは何の基本魔法属性ですか？」

次に回答権を得たのはリリーだった。

「それは光属性魔法と闇属性魔法です。この二つの魔法属性を使いこなすためには相特な素質が必要とされていますが、それが一体何なのかは明らかにありません……」

「補足説明までしてくれてありがとう。リリーちゃんに一ポイント！……でも、言われてみればどうしてなのかしら？」

その疑問の視線が向かう先は、言わずもがな、ゼロであった。それに肩をすくめながら答える。

「僕に答えを求められても、知らないものは知りません。僕は全知全能の神という訳ではないのですから……」

「それはそうね……。御免なさい、変な期待掛けちゃって」

「いえ、態々謝るような事ではありませんから」

ゼロの恐縮したような態度に、セリカは申し訳ない気持ちになる。セリカは気を取り直す様に勝負を再開させた。

「じ、じゃあ、次の問題です。第三問、一般的に魔法ランクはSSランクまでと言われていますが、実はもう一つ上の魔法ランクが存在します。それは何でしょう？」

これには即答出来る者は皆無だった。

皆一様に、何だろう、といった思案顔で悩んでいる。

そんな三人にセリカは助け船を出す事にした。

「ちょっと意地悪な問題の様なので少しヒントを出したいと思います。SSSランクは戦略級魔法と呼ばれているのに対して、その魔法は天災や災厄級魔法と呼ばれています。もう一つヒントを出しておけば、神話の時代に密接に関わってくる問題ですよ。他種族連合軍を率いた英雄アレスとその盟約者たる幻獣グリフォンも、この魔法を使って、魔族を『タルタロス』に封印したとも言われていますね」

そのヒントに閃いたのか、リリーが手を挙げ、指名を待つまでもなく答えを述べた。

「その答えはEXランク魔法。確か、子供の頃、神話の絵本を読んでいた時、そんな魔法ランクが有った様な気がする」

「正解です！それにしても良く思い出したわね、リーちゃん。皆子供の頃は、神話の昔話の中で出て来るEXランク魔法を聞いたことがある筈なんだけど、成長するにつれてどうしてか皆忘れちゃうのよね。成長する過程でSSSランク魔法っていう高難度の魔法ランクばかり耳にする様になっちゃって、EXランク魔法の事は忘れちゃう人が多いのよ！」

「私は、たまに神話の昔話なんか目を通したりしてるから……。でも、すぐに思い出せなかったのは、セリカさんの言った通り、普

段全く耳にしないから。最後に神話を読んだのは、確か一年位前だった様な気がする……」

「それでも大したものよ！私も生徒会委員に成り立ての頃、ダリアとアンに訊いた事があったんだけど、二人共全く答えが分からなかったのよ。今年の新人生は優秀だわ……」

そう言いながら、横目で話題の二人を見やるセリ力。緯線の先にいたダリアは、そんなセリ力を鼻で笑う。

「良く言う。右も左も分からない生徒会委員を一体誰が指導してやったんだか……」

「うっ……！」

痛いところを突かれたセリ力は小さく呻く。

それにダリアは口の端に小さな笑みを浮かべた。

その事に少しイラッときながらも、次の問題に入った。

「それでは第四問、魔力とは一体何なのかを説明しなさい！」

イライラしているせいか語気がかなり荒い。

そんなセリ力を余所に、回答者三人は頭の中で論理を組み立てる。数秒の間をおいて、最も早く拳手をして回答権を得たのはミリアリだ。

「魔力とは元々身体に流れているものではなく、魔法を使用する際に身体を流れている身体エネルギーが変換されたものです。だから魔力を消費するという事は身体エネルギーを消費する事と同義であり、使い過ぎれば過労で倒れる場合もあります。万が一にも身体エネルギーが枯渇する様な事になれば、あとあと身体障害を引き起こしたり、最悪の場合、死に至る事もあります。それが魔力の正体で

す」

「その通りね、丁寧な説明をありがとう。ミリーちゃんに二ポイント」

その声は少し惘然としている。

まだ引きずっている事がありありと窺える声音だ。

何にしても、これで全員が一ポイントはとった事になる。

リーガンに一ポイント、ミリアリアに一ポイント、リリーに二ポイント。

実質的にミリアリア、リリー組が一步リードしている計算になる。

「あゝ、ここからは私が進行役を務めますね……」

急に無愛想になったセリカの代わりにアンが進行役を買って出た。少しおずおずとした様子だが、次の問題を言い始めた。

「今までは魔法や魔力に関する知識を競うものでしたが、これからは最近活動が活発になってきている魔物についての問題です。それでは第五問、魔物は経口摂取以外にも、もう一つエネルギーの摂取手段を有しています。それは、どのような手段ですか？」

この問題の回答権を得たのは、連続してミリアリアだった。何故か、その瞳は鋭く細められ、微かな殺気を放っていた。魔物に対して、何か恨みでもあるのかもしれない……。

「先程も言った様に、魔力は身体エネルギーから精製されます。そして、その身体エネルギーを生み出す元となっているのが食事です。人類は食事をする事によって身体エネルギーを生み出し、身体エネルギー」

.....

...

を消費して魔力に変換して、魔法を発動します。対して魔物は魔力そのものを喰らい、自らの身体エネルギーにする事が出来るのです。勿論、人類と同じく食事する事によって身体エネルギーを生み出し、それを魔力に変換する事も可能です。これが、魔物が経口摂取以外に身体エネルギーを摂る方法です」

「正解です。ミリーさんにポイント追加します。それにしても凄いですね、魔物の事をそんなにすらすらと答えられるなんて……。ついでに一つ質問しても良いですか？」

「何ですか、アンさん？」

無意識の内に可愛らしく小首を傾げる。

「先程も言いましたが、最近では魔物の活動が活発になってきます。これについて、ミリーさんはどう考えていますか？」

確かに、何故か最近では魔物の活動が活発化している。

それはこれまでにはなかった事だ。

あると言えば、神話の中での他種族連合と魔族の戦争の時くらいのものだろう。

この問題は最近における大きな問題の一つとして重要視されているが、詳しい事は何一つ分かっていないのが現状だ。

しかし、ミリアリアは臆することなく自らの考えを述べた。

「あたしは異世界『タルタロス』から魔族が脱走したせいと考えています。そう考えれば、魔物が活発化した理由にも説明が付きましますから」

「でも、『タルタロス』は英雄アレスが創造したというこの世界とは完全に隔絶された世界ですよ」

「では逆に訊きますけど、その神話の物語は一体どの位以前の出来事なんですか？綻びの一つや二つ生じていても可笑しくないとあたしは考えます」

決して考えを曲げないと告げている強い意志を秘めた瞳。

その力強さにアンは気圧された。

「確かにそうね。御免なさい、ミリーさん。ケチつける様な事を往ってしまつて」

「良いですよ。あたしの考えている事を他の人も考えているなら、今頃何か対策が練られているでしょうから。それはつまり、アンさんの考えが一般的に正しいっていう事。何回も言う様ですけど、今のは単にあたし個人の考えですから、気にしないで下さい。アンさんも、自分の意見を述べていちいち恐縮してたら何にも発言出来ないんじゃないですか？」

「そうですね、悪い癖だつて分かつてるんだけど、どうしても直らないんです」

お互いに苦笑する。

人というのは変わろうと思っても変わらないものだ。

特に、過去に何らかの過失を伴った人間ほどその特徴は顕著なものになる。

「それでは、次の問題に移ります。第六問、魔術を使用する事以外の『魔神の刻印』の役割を述べて下さい」

この問題の回答権を得たのは、これに答えればリーチを掛けられるリーガンだった。

やはり男子で、反射神経は一番優れていた様だ。

遅れた残りの二人は、しまった！、とでも言いたげな顔をしてい

る。

それに構う事無くリーガンは答えた。

「『魔神の刻印』とは、魔神や魔族に対する隷属・絶対服従の証と言う意味が込められている代わりに、『魔神の刻印』が在れば魔術を使用出来るようになり、才能の無い者が才能の有る者に追い付ける様になります。それが『魔神の刻印』の役割であり、魔術を扱う利点です」

隷属・絶対服従の証というのはそのままの意味だ。

もしも、魔物が魔族やその主である魔神に何らかの形で逆らおうものなら、『魔神の刻印』を通して全てを超越する様な痛みが発生し、所有者を苦しめる。

心身の弱い者は発狂して死に至るという恐ろしい罰である。

魔法のリミッターを外した魔の術、それが魔術。相応の力には相応のリスクが伴っているのだ。

「正解です。これでリー君が次の問題に正解すればリー君の勝利が決定します」

その言葉に、ほっと安堵した様に息をつくリーガン。

そして、それを悔しそうな顔で見つめるミリアリア、リリーという構図が出来上がっていた。

「あんたも馬鹿じゃなかったのね。油断してたわ」

「……本気で見てくびってた」

これに対してリーガンは少しだけ誇らしげな表情を浮かべる。

しかし、これで終わりではない事を思い出し、それを引き締める。

「まだ勝負は着いてないんだから、最後まで頑張ろうぜ」

「あんたにそれを言われるとはね……」

「でも、その通り。まだ勝負は着いてない……」

真剣みを帯びた声音に、顔を綻ばせる二人。

リーガンが二人に認められ、三人の仲直りが成立した確かな瞬間だった。

とその時、自分の創った世界で起こった大爆発を感知したゼロが立ち上がる。

この突然の行動に、その場にいた皆が目撃した。

「どうしたの、ゼロ君？」

「いえ、ちよつと急用を思い出したので、ここで失礼しても良いですか？」

「それは構わないけど、私達には言えない事なのかしら？」

ゼロは説明しようかどうか逡巡する。

先程、ガイアとウリアの二匹を別世界に閉じ込めて世界を崩壊させているところまでは説明したが、魔物うんぬんの部分説明を省いていた。

下手な事を口走れば、ここにいるメンバーが付いてこないとも言切れない。

これはガイアとウリアにも告げていない事だが、これからの鍛錬は魔物退治でもしようかと考えている。

・

そうすれば空間の狭間に追放されている強力な魔物を殺す事が出来るし、『奴ら』を倒すための経験を積むことも出来て一石二鳥なのだ。

はつきり言って、そこに付いて来られる状況は芳しくない。

だからゼロは

「二人を迎えに行こうと思ひまして」

嘘をつくことにした。

それにセリカは、一つの疑問を投げ掛ける。

「それなら、私達と一緒に行っても？」

「僕の創った世界は相当に魔力濃度が高いので、皆さんの実力では命の危険が伴います。だから、僕一人で行こうと思ひまして……」

これは半分本当で半分が嘘だ。

ゼロが創った世界事態は誰であろうと関係なく生存出来る。

しかし、今は空間の狭間が開いた状態にある。

空間の狭間の魔力濃度は常人には耐えられない程に高く、相当な魔力耐性を持っていないと漂っている魔力が毒となって人を死に至らしめる。

空間の狭間に封印された魔物も魔力耐性の無い者は情けも容赦もなく朽ちていくのだ。

説明不足のゼロに納得がいかない様子だが、ここは個人的な理由の為に納得して貰う他ない。

果たして、セリカはつまらなさそうな顔で溜息をつきながら言った。

「しょうがないわね。こればかりは個人の問題だもの。私達が口出しして良い事じゃないわ……。それにしても本当につまらないわ。私達は生徒会と風紀委員会の仲間なんだから、もうちょっと頼ってくれても良いんじゃないの？余り自分一人で抱え込んで、いつかは壊れてしまう物よ」

「でも、そうやって人にばかり頼る訳にもいけないので。僕達には僕達のやり方がありますから」

かなり突き放した様な言い方だったが、何とか納得してくれたらしい。

実際には不満は溜まりまくりなのだが、それに全く気付かないゼロは、Sランク空間魔法『仮想世界』を発動させ、生徒会室の天井に別空間へ通じる穴を開けた。

以前は白一色しかない世界だったものが、今は炎の紅で塗り潰されている。

また派手にやったのだなあと、嘆息しながらゼロはその世界へと跳躍しようとしたところでセリカが呼び止めた。

「ゼロ君、必ず此処に戻って来て！後で皆に大事な話があるから！」

それに無言で頷くと同時に、今度こそゼロは穴の中へと消えて行っ

た。
ゼロが穴の中へ消えると同時に、まるで最初から何も存在しなかったかの様にそれは消える。

後に残るのは、必要とされない自分に腹を立てる者とそれを静かに見守る者だけだった。

大質量の爆発の中、ガイアとウリアが姿を見せた。

さすがは幻獣と言ったところか、その身体には傷や火傷一つ見当たらない。

だが、その身体を巡る魔力は殆ど使い果たした状態だった。

《はあはあ……、まさか貴様に助けられる事になろうとはな》

《それを言うならガイアだって、僕に魔力をくれたじゃないか。あれが無かったら、今頃僕達、焼竜と焼鳥になつてるところだったよ》

ウリアの言う通り、ガイアはウリアに魔力を貸与した。

あの爆発は二匹の身体と魔法をもつても耐えられる様なものではなかった。

半ば条件反射でガイアを庇う様に炎魔法属性のSSランク防御魔法『紅蓮巨盾』を発動させ、そこにガイアの魔力が合わさった結果、何とか生き延びる事が出来たのだ。

でなければ、本当に命の保証はなかった。

《まったく、今まで何のために争っていたのか……》

《ホント、もうその理由も思い出せないよ！》

仲違いしながらも、お互いを庇い合い、守り合った二匹。

そして、簡単に仲直りという流れは些か吊り橋効果もあったのかも知れないが、その笑顔はそれを示す確かな証だった。

しかし、そんな二匹に新たな不幸が降り注ぐ。

「何だ、あいつら潰されちまったのか。まあ、この俺様に比べれば雑魚なあいつらが死ぬのは当然の事だがな」

《《っ！》》

二匹が振り返った先には新たな魔物が立っていた。

明らかに先程の魔物よりも邪悪で濃度の濃い魔力を全身から迸らせている。

今の疲弊しきった自分達が相手取るにはかなり分が悪い。

それでもやるしかないのだ。

ガイアとウリアはお互いの顔を見合わせて頷いた。
とそこへ、いつも耳にしている人間の声が届く。

腰まで伸ばした銀髪をゴムで纏めている、女かと見紛う顔立ちをした少年だ。

その少年が今、此方に向かって微笑みながら歩いて来ていた。

《ゼロ！ やつと来てくれたか！》

《そうだよ！ もう疲労し過ぎて死にそうだよ。 もう金輪際こんなお仕置きは勘弁して！！》

その必死な懇願にゼロは微笑みを絶やさず答えた。

「心配しなくても大丈夫だよ。 これからの鍛錬は全部ここでする事にしたから」

その言葉に二匹の表情が凍りつく。

ガイアとウリアは恐る恐る訊ねた。

《ゼロよ、 もしや今回の事は全てその為の予行演習だったのか……？》

《じ、冗談だよな？》

「勿論冗談なんかじゃないよ。 もう僕の創った世界では満足のいく鍛錬が出来ないからどうしようかと悩んでたんだ。 丁度そんな時、二人が喧嘩なんて始めてくれたから懲らしめる事も含めて良い機会だと思ったんだよ」

二人は今度こそ絶句した。

ゼロはそんな二匹の様子に、顔の笑みを深めるだけだ。

そして、ゼロの登場によって完全に置いてけぼりを食らっていた強大な魔物は激情を顕わにする。

「お前ら、この俺様を誰だと思っている！無視するんじゃないねえ！」

そこで漸くその存在を思い出したのか、少々億劫そうに応えた。

「ああ、すみません。すっかり失念していました」

「てめえ、その死に底ないよりも先に殺してやる！！」

そう怒鳴った魔物は大量に邪悪な魔力を身に纏いながら、真っ直ぐに此方に突っ込んで来る。

単調だが強力な突進によって生じる風を利用して、宙に舞う羽根の様にそれを回避した。

自らの突進を容易に躲かれた魔物は勢いを殺す事なくゼロのいる方へとターンする。

しかし、ターンによって生じた隙を突いて、自らの身体に身体強化魔法を施したゼロは、身体を空中に躍らせ遠心力をつけた跳び蹴りを放つ。

その蹴りを真面に受けた魔物は彼方へと吹っ飛んで行った。

そこへガイアとウリアが近づいて来る。

そして二匹は意志の籠った声で暗黙の了解を確認する。

《ゼロ、今の内に》

《僕らの力を合わせるんだ》

それに無言で頷く。

そして一つと成る為の合図を叫ぶ。

「ガイア、ウリア、『二重同調幻化』を！！」

《ああ、我らの力を一つに！！》

《しっかりと受け止めてよ！！》

そうしてゼロ、ガイア、ウリアの身体は一つに重なっていく。
と、丁度そこへ駆けつけて来る魔物は見た。
世界が神々しいまでの光に包まれる瞬間を。
その光景を最後に、魔物を含めた世界の全ては完全に消滅したの
だった。

第16話 白と黒 【後編】（後書き）

もし宜しければ、感想を宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824w/>

混沌の魔法師

2011年10月23日19時15分発行